宮城県文化財調査報告書第102集

柳 津 館 山 館 跡

－東北地建バイパス関係遺跡調査報告書－

昭和 59 年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会
東北地建仙台工事事務所

序

近時、本県の産業・経済の発展に伴う国道45号線交通量の増加に因り、著しい渋滞を生じるようになったので、建設省東北地方建設局はその対策として、本吉郡津山町柳津の地にバイパスを建設することになった。

ところで、この計画路線敷が、中世城館跡である館山遺跡として周知されている丘陵部の一部を通ることになったので、宮城県教育委員会は、東北地建側と協議し、通称三ノ丸の北端部にある平場と腰部に限って発掘調査を実施し、また併せて全体の地形測量を行うこととした。

昭和58年４月８日から開始された発掘調査は、その遺構の複雑な在り方の故に予想を越えて延び、９月30日まで約半年に及んだが、その結果、本丸、二ノ丸・三ノ丸という基本構造の確認に加えて、中世門跡、通路状遺構、段状遺構等を検出することができた。当該地方中世史料の極めて乏しい事情のなかで、得られたこれらの知見は、歴史の実態を解明する上にすこぶる貴重である。

本報告書が学術上は勿論のこと、学校教育、社会教育の分野でも活用され、ひいては文化財保護思想の普及と啓蒙に役立つなら幸いこれに過ぎるものはない。なお、関係された方々のご理解とご協力にたいし、特に記して感謝の意を表する。

昭和59年３月

宮城県教育委員会　教育長　　三浦　徹

目　　次

序
Ⅰ．調査に至る経過 …… 1
Ⅱ．遺跡の位置と環境 …… 3
　１．遺跡の位置と自然環境 …… 3
　２．周辺の遺跡 …… 4
Ⅲ．館跡の規模と構造 …… 5
　１．規模と構造 …… 5
　２．文　　献 …… 6
Ⅳ．調査の方法と経過 …… 9
Ⅴ．調査の成果 …… 13
　１．中世以前の遺構と遺物 …… 13
　　(1)．竪穴住居跡と出土遺物 …… 13
　２．中世以降の遺構と遺物 …… 23
　　(1)．遺　　構 …… 24
　　(2)．出土遺物 …… 46
Ⅵ．考　　察 …… 60
　１．中世以前の遺構と遺物 …… 60
　　(1)．出土遺物の年代 …… 60
　　(2)．遺構の年代と特徴 …… 62
　２．中世以降の遺構と遺物 …… 62
　　(1)．出土遺物の年代 …… 62
　　(2)．遺構の検討 …… 64
　　(3)．遺構の変遷 …… 67
Ⅴ．ま　と　め …… 68

例　　言

１．本書は柳津バイパス工事に伴う柳津館山館跡の発掘調査報告書である。

２．発掘調査は宮城県教育庁文化財保護課が担当し、津山町教育委員会の御協力をいただいた。

３．植物種子の鑑定は東北大学農学部助教授星川清親氏にお願いした。その結果については付編として本書に収録した。

４．板碑の梵字判読については加藤政久氏の御教示を得た。

５．土色は「新版標準土色帳」(小山・竹原 1973)を、土性区分は国際土壌学会法の粒形区分を参照した。

６．地図は建設省国土地理院発行の５万分の１地形図の「登米」、「涌谷」を複製したものである。

７．本書において「Ⅰ．調査に至る経過」を平沢英二郎が執筆し、その他の整理、執筆・編集は文化財保護課職員の協議を経て、阿部恵が担当した。

８．調査・整理に関する諸記録および出土遺物は宮城県教育委員会が保管している。

調 査 要 項

遺跡所在地：宮城県本吉郡津山町柳津字宮下

遺 跡 記 号：ＧＦ－Ａ（宮城県遺跡地名表登載番号：61002）

調 査 期 間：昭和58年4月11日～9月29日

調 査 面 積：約6,500㎡（発掘面積約4,800㎡）

調　査　員：宮城県教育庁文化財保護課

阿部恵・佐々木和博・小山田正男

調査に協力された地元の方々は以下のとおりである(順不同、敬称略)。

阿部友佳・阿部孝雄・中内寅夫・遠藤賢一郎・西條昭・千葉きよえ・佐藤二三技三浦咲子・林留美子・福田よし子・亀井ふみ・菊地たか子・須藤より子・亀井キヌ子・西條とよ子・阿部ふみ子・須藤昭子・佐々木富子・浅野栄子・西條としえ菊地庸子。

Ⅰ．調査に至る経過

建設省東北地方建設局は、国道４号線など宮城県内各所において交通網の整備を推進してきた。

高速交通時代の要望を受け容れ、また、交通量の増大と交通安全の確保のため、国道45号線でもバイパス等の整備を行い、すでに気仙沼市の一部地域では供用され地域の開発に寄与している。

津山町柳津地区は、仙台・石巻と古川・佐沼方向から三陸海岸部へつなぐ交通の要衝にあるにも拘わらず自動車交通時代の要望を受け入れるには道路は狭隘で整備が不十分であった。

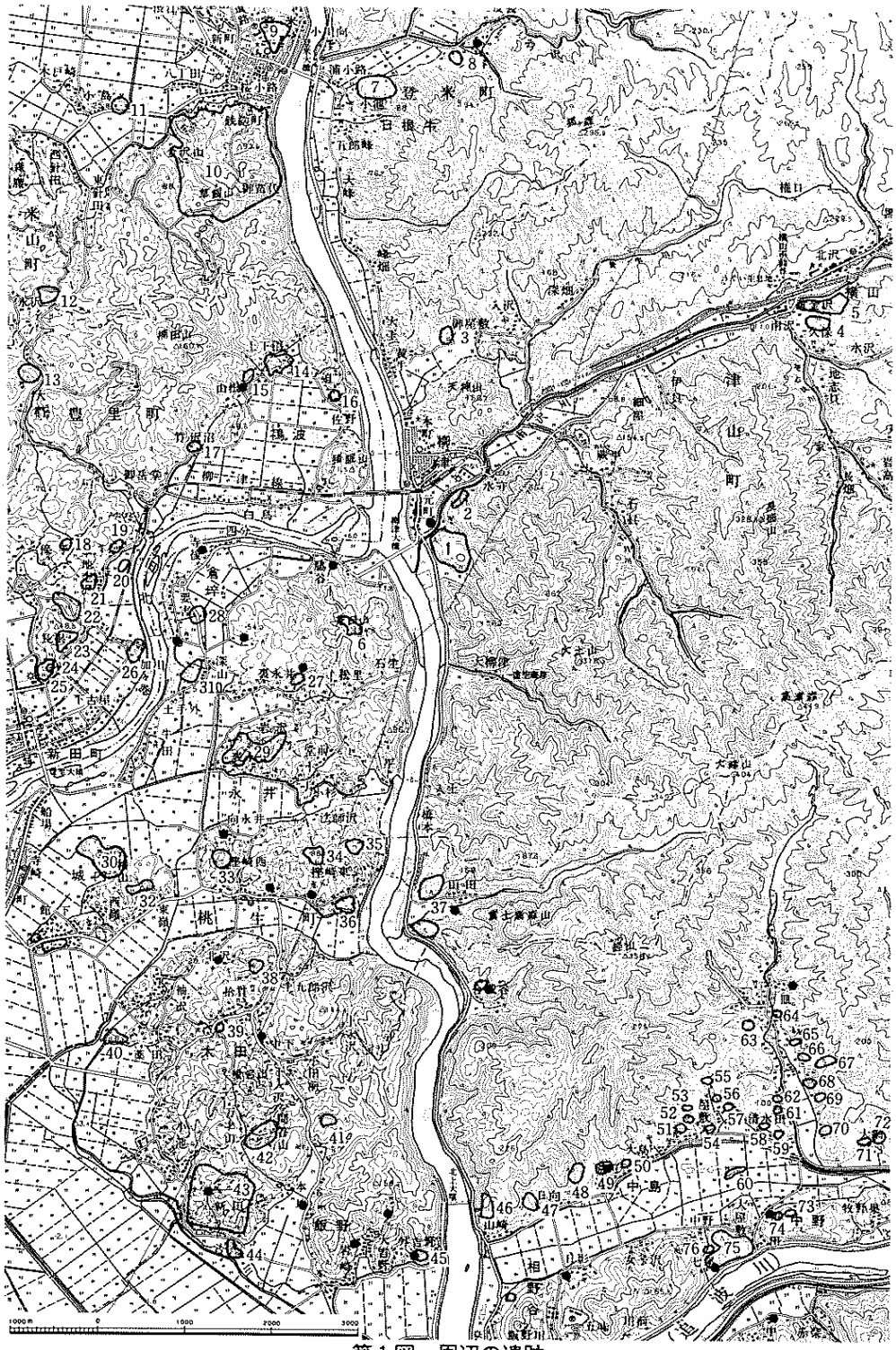
そこで建設省東北地方建設局仙台工事事務所は、当柳津地区の交通渋帯の解消を目的に町の中心部の南部を流れる南沢川沿いに柳津バイパス建設（柳津局改）を計画した。柳津バイパスは津山町柳津字宮下地内を起点とし同町柳津字幣崎を終点として在来線に続く約1.8㎞である。ところがこの柳津バイパス計画が埋蔵文化財包蔵地と係り合いのあることが宮城県遺跡地図地名表との照合によって明らかとなった。

宮城県教育委員会は、東北地建と遺跡の保存をめぐり協議を行い計画路線に係る遺跡の分布調査と調整を行った。

その結果、中世城館跡として周知されている館山館跡が二ヶ所で路線敷と係り合いをもつことが判明した。協議調整のうえ、用地買収の比較的進んでいた館山Ｂ地区（平形遺跡）を昭和55年６月から７月に発掘調査し、平安時代の住居跡等を発見その報告書を昭和56年３月に刊行した(千葉：1981)。

用地買収の遅れたＡ地区（柳津館山館跡）は、地権者及び町当局の協力のもとに昭和58年３月に調査準備を行い４月に調査を開始した。立木の伐採、雑物の撤去ののち路線とその用地に係る測量調査を実施し表土剥離に入ったのは４月中旬になってからである。発見された遺構と遺物は以下に記すとおりである。

発掘調査が完了したのは９月下旬で重複遺構の検出のため予想を超える日数を要した。また、本館跡の性格をより明らかにするため線外にのびる館跡の中枢部の測量調査の必要があり12月に依頼者及び町の関係者の協力により再測量調査を実施することができた。



第１図　周辺の遺跡

Ⅱ．遺跡の位置と環境

１．遺跡の位置と自然環境

柳津館山館跡は、宮城県本吉郡津山町柳津字宮下に所在し、津山町役場の南方約１㎞の地点にある。

宮城県北東部の地形を概観すると、岩手県からのびてきた北上山地は、宮城県の本吉郡と登米郡の東部を通り南の牡鹿半島まで南北にのびている。北上山地の東側は太平洋に面し、複雑な地形のリアス式海岸となっている。北上山地の西麓には北上川が南流し、津山町柳津附近で西方へまわりこんで南流する旧北上川とそのまま真直ぐに南流を続ける新北上川に分れる。旧北上川は途中、河南町和渕附近で迫川や江合川と合流する。新北上川は河北町飯野川附近で東に大きく流路を変え、追波湾へと注ぎこむ本流とそのまま南へむかい河南町鹿又附近で旧北上

No	遺跡名	時代
	津山町	
1	**柳津館山館跡(高森山・古館)**	平安・中世
2	平形遺跡(館山館Ｂ地区)	縄文・平安・近世
3	菅ノ沢館跡(小下沢城)	中世
4	久保城跡(窪館)	〃
5	北沢館跡(鴻ノ巣城、横山城)	〃
6	茶臼山館跡	〃
	登米町	
7	日根牛館跡(小池館、道味本館)	中世
8	吾妻館跡	〃
9	寺池館跡(臥牛城)	中世・近世
10	保呂羽館跡	中世
11	小島館跡(亀ヶ城)	中世・近世
	米山町	
12	大沢館跡(吉田館跡)	――
	豊里町	
13	赤生津館跡	中世(鎌倉・室町)
14	美濃館跡(鵜並古城)	〃 (室町)
15	山根遺跡	奈良・平安
16	迫遺跡	縄文・奈良・平安
17	竹ノ沢遺跡	奈良・平安
18	保手遺跡	〃
19	赤生津要害館跡	中世
20	前館跡(おだまき館跡)	中世 (室町)
21	杢沢遺跡	奈良・平安
22	鳥越遺跡	〃
23	蕪木遺跡	〃
24	経壇山経塚	中世
25	沼崎山遺跡	縄文(前)・中世
26	月輪館遺跡(加々券館)	中世(室町)
	桃生町	
27	茶臼山附近遺跡	平安
28	倉埠遺跡	中世
29	永井館跡	〃
30	沢山城跡	〃
31	女来山館跡(女来館、牛田城)	〃
32	八幡館跡	〃
33	壇ノ森館跡	――
34	黄竜渕館跡	――
	桃生町	
35	陣ヶ峯館跡	中世
36	樫崎館跡(合戦崎城、内館城)	〃
37	山田館跡	〃
38	安倍館跡(館山館)	〃
39	宗全山遺跡	〃
40	太田館跡(館ヶ崎館、館山城)	〃
	河北町	
41	赤間館跡	中世
42	宗全山遺跡	奈良・平安
43	桃生城跡	〃
44	飯野館跡(長者森城、西山城)	中世
45	外吉野遺跡	奈良・平安
46	山崎館跡	中世
47	相野谷館跡	〃
48	和泉沢古墳群	奈良・平安
49	和泉沢遺跡	〃
50	大島遺跡	〃
51-54	屋敷入遺跡(ＡＢＣＤ)	〃
55-59	清水田遺跡(ＡＢＣＥＦ)	〃
60	中島城跡 (鶴ヶ館)	奈良・平安・中世
61	宮田Ａ遺跡	奈良・平安
62	〃 Ｂ遺跡	〃
63	馬場館跡	中世
64	芝下遺跡	奈良・平安
65	熊野堂Ａ遺跡	〃
66	〃 Ｂ遺跡	〃
67	生出館遺跡	中世
68-70	十二神遺跡(ＡＢＣ)	奈良・平安 (Ａは縄文も含む)
71	大網Ａ遺跡	奈良・平安
72	〃 Ｂ遺跡	〃
73	竜源寺遺跡	〃
74	中野遺跡	〃
75	七屋城跡 (七王館)	奈良・平安・中世
76	的場遺跡	奈良・平安

●印は、鎌倉、南北朝、室町時代の代表的な板碑の出土地点を示す。

第１表　遺跡地名表

川に合流する支流とに分れる。鹿又附近で合流した北上川は南へむかって石巻湾へと注ぎこむ。

津山町は町域のほとんどが北上川の左岸に位置し、地形的には北上山地が大部分を占めるため、杉を中心とする山林が豊富で木工の町として有名である。町の東南部にはイヌワシの棲息地として知られる翁倉山(標高532m)や大峰山(419m)がそびえている。南西部は南沢川が流れる低地となっており、この川が北上川に合流する附近が現在の津山町柳津地区の中心部となっている。

柳津館山館跡は南沢川が北上川に合流する左岸の丘陵部分を利用した中世の城館跡である。発掘前の地目は大部分が山林で一部畑地となっていた。館跡の北側には南沢川が流れ、柳津の町並がある。西側は新北上川に臨む。南側は小さな明耕院沢をはさんで丘陵が続く。東側は尾根を通じて山地へ連続する。

２．周辺の遺跡

津山町には、遺跡地名表によると現在15ヶ所の遺跡がしられている。町の大部分を山地が占めるためか宮城県の市町村の中では遺跡の少ない町となっている。しかし、沢合いの地形を中心に詳細な分布調査を行えば、まだまだ数多くの遺跡が発見される可能性が高い地域でもある。

今回は柳津館山館に関連すると思われる中世の遺跡に限って周辺の遺跡をみてみる。南沢川の中流の横山地区には北沢館跡・久保館跡がある。また、天然記念物のウグイの生息地としてしられている横山不動尊も古くから信仰をあつめたようである。本館跡のやや上流域の北上川東側には、苔ノ沢館跡(津山町)・日根牛館跡・吾妻館跡（以上、登米町）がある。その対岸には寺池城跡・保呂羽館跡(以上、登米町)・月ノ輪館跡（豊里町）がある。寺池城跡は中世には葛西氏が居城したといわれ、天正18年(1590年)の葛西氏滅亡後は豊臣秀吉の家臣木村吉清の城となった。近世に入ると慶長９年（1604年）に白石宗直の居城となり、代々白石氏（登米伊達氏）が住むことになる(石垣宏：1982)。保呂羽館跡は県内では最大規模の館跡で、葛西氏やその家臣小野寺氏が居城したと伝えられる。また、旧北上川と新北上川にはさまれた地域では茶臼山館跡・樫崎館跡(桃生町)など多数の城館がある。新北上川の東岸には山田館跡(桃生町)などがあるのみで城館跡の数は少ないが、柳津虚空蔵尊(津山町)のように古くから知られた寺院もある。また、新北上川が分流する附近にも中島城跡や七尾城跡(以上、河北町)など多数の館跡がある。

次に中世の板碑の分布をみると津山町内では、柳津館山館跡の今回の調査で８枚出土した他その附近にもいくつかが散在することがしられている。津山町の北側にある登米町や豊里町では比較的数は少ないが、東側や南側にある桃生町や河北町では多数の板碑が知られている。また、志津川町・北上町では近年、板碑の調査がなされ、多数の板碑の存在がわかってきた。以上のことから津山町内でも熱心に探査すれば、板碑が数多く発見され、町の歴史をしる中世資料として役立つことが予想される。

Ⅲ. 館跡の規模と構造

１．規模と構造

柳津館山館跡は津山町柳津字宮下にあり、南沢川が北上川に合流する左岸の丘陵部分に立地する。館跡の北には福田寺沢が流れ、南には明耕院沢がある。西には北上川が流れ、その東岸に沿って国道45号線がはしるため館跡のある丘陵先端部はすでに削られている。西は尾根によって背後の山地に連らなってゆくため、明耕院沢にそそぐ蘭塔沢によって尾根が狭隘化している部分に南北方向の空堀を設置している。館跡の範囲はこの福田寺沢、北上川、明耕院沢、空堀によってかこまれた丘陵地域となり、その規模は南北600㎜、東西450㎜である。

館跡の遺構の中心は丘陵の尾根の部分を占地する５ヶ所の平場（Ａ－Ｅ）とそれを取り巻く幅の狭い平場（腰郭）・段状遺構や土塁・通路からなる。

平 場 Ａ

平場Ａは館内で最高所（標高112㎜）にあたり、平面形はやや楕円形で、東西50㎜×南北70㎜の平坦面である。北辺に高さ1.2㎜の土塁とその内側に小さな段がある。土塁は石を多く使用しているため石塁とよんでもよいのかもしれない。平場の外側には一段低く幅５～10㎜の腰郭がめぐるが、郭の東辺では腰郭との高低差がないので、この附近に郭への出入口が設けられていたと思われる。またその外側にもさらに一段低く幅25～26㎜の腰郭がめぐっている。南・東・北の三方面ではさらに下方に幅５㎜ほどの細長い段状遺構が３段から５段ほどのびている。

平 場 Ｂ

平場Ｂは、平場Ａの北側、平場Ｃの東側に位置している。標高は99㎜で、平場Ｉより約13㎜低く位置する。平面形はほぼ円形に近く、東西約60㎜×南北約50㎜の平坦面である。その周囲には一段下がって幅５～10㎜の腰郭がめぐり、さらに北川と東側に幅がせまく長さも短い階段状遺構が数段下方にむかってのびている。なお平場Ｂの南の部分で腰部が一段高くなり、せまい平場を形成しているので、平場Ｂへの入口はこの方向にあると思われる。

平 場 Ｃ

平場Ｃは、平場Ａの北西、平場Ｂの西側にある。標高は92㎜で、平場Ａより約20㎜、平場Ｂより約７㎜低い。平面形は南北約105㎜、東西約85㎜の長楕円形で、全体的に北、西両方向に傾斜している。この平場は詳しくみると、南側で３段の、北側で１段の比較的大きな平坦面をもつ段状遺構が連続しているものであることがわかる。この平場の南西側から北西側には幅５～10㎜ほどの細長い段状遺構が10数段認められる。

平 場 Ｄ

平場Ｄは平場Ｃの北側にあり、平場Ｅとは東の小さな沢をはさんで対峙する。標高53㎜で北

にむかってやや傾斜する平坦面である。平面形はほぼ長方形に近く、東西60㎜、南北100㎜の規模である。北側に幅10㎜～20㎜の長方形の段状遺構が約７段あるが、下方にむかうほど幅がせまくなる傾向がある。幅のひろい段状遺構は建物などの施設があってもよいほどの面積をもつ。今回調査したのはこの段状遺構の先端部に近い部分である。平場Ｄの西側には幅７㎜～12㎜の遺構が４段あり、やはり下方のものほど小形化する。東側には幅５㎜～15㎜の段状遺構が１段ある。これらの段状遺構は独立するものもあるが、端部でそれぞれが連絡しあい通路としての機能を果たすものもある。たとえば平場Ｄの南西隅や北西隅にみられる細長い段状遺構は西麓および北麓から館に登る通路として現在も利用されている。

平場Ｅ

平場Ｅは平場Ｂの北側にのびる尾根にあり、西側の平場Ｄとの間に小さな沢（小沢）をはさむ。標高は約56㎜で平場Ｂより約43㎜低い。北にやや傾斜する平担面で、平面形はほぼ方形である。東西35㎜、南北40㎜の規模をもつ。北側の丘陵先端部にむかって方形の段状遺構が３段ほどのびる。この平場Ｅは、他の平場がそれぞれ段状遺構や腰部などによって連絡しあうのに対し、きわめて孤立的である。

以上、概観したように柳津館山館跡は５個所の中心的な平場をもつ複郭式の山城で、空堀や土塁などはきわめてすくなく、むしろ段状遺構を多用しているところに特色がみられる。

２．文　献

次に文献からみた柳津館山館跡を概観したいが、これを記した中世の古文書などはない。わずかに江戸時代に入って延宝年間に作成された『仙台領内古城書立之覚』(宮城県史 32 所収)との安政３年（1774）に作成された『柳津村風土記書出』(宮城県史 26 所収)に登場するのみである。この二つの文献は柳津館山館を「高森館（城）」とよび次のように記載している。

（仙台領内古城書立之覚）K32－150

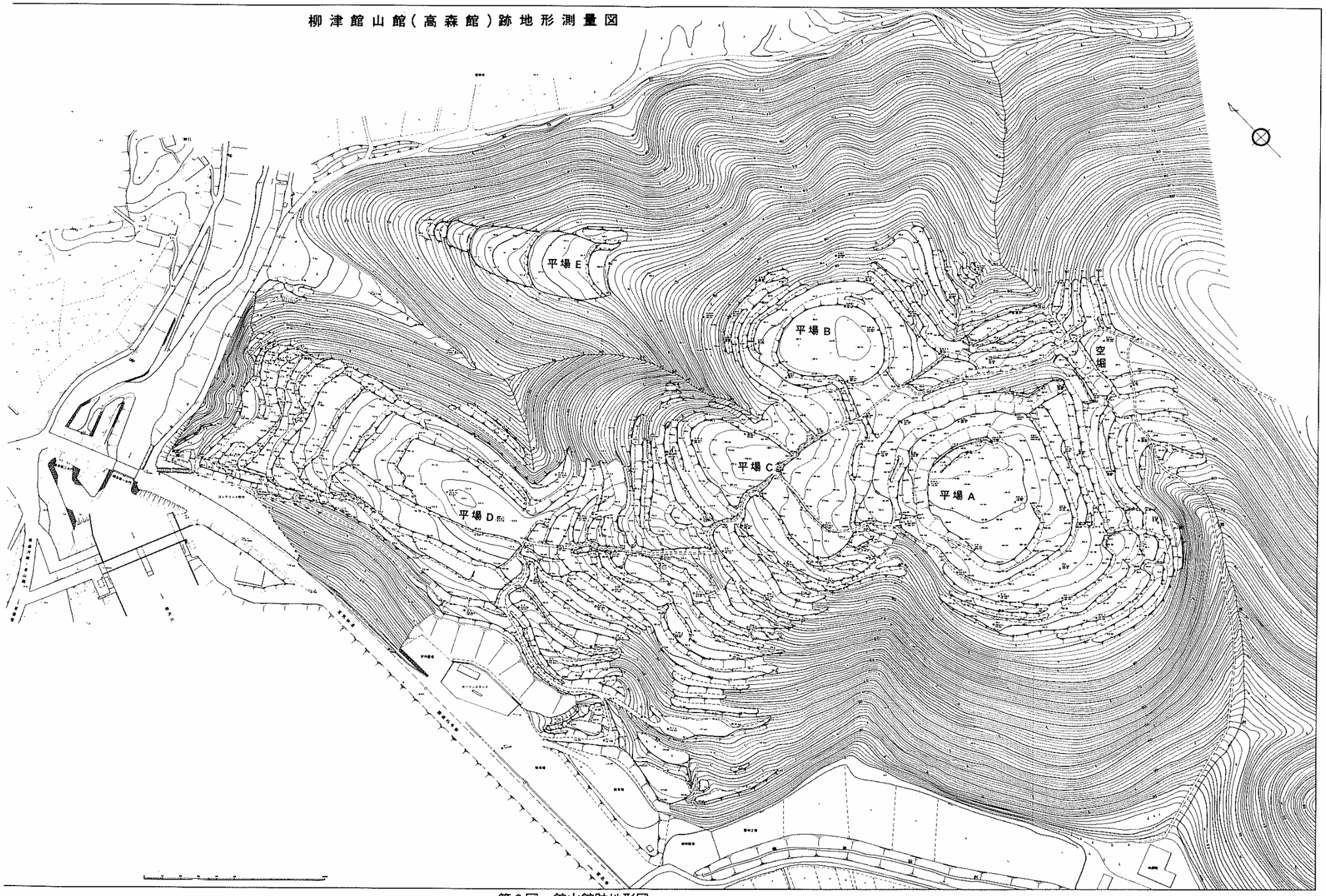
柳津村

高森城	東西三十三間
	南北九 十 間
二ノ丸	同 五 十 間
	同 三 十 間
三ノ丸	同 三 十 間
	同 廿　　間

右城主千葉次郎左衛門ト申者之由御座候

（本吉郡南方柳津村風土記出）K26－442

一、古　館　壱ヶ所



第２図　館山館跡地形図

一、高森館

本　丸　高七拾六間　南北九 拾 館
東西弐拾三間

ニノ丸　高九拾五間　南北三 拾 間
東西五 拾 間

三ノ丸　高百拾五間　南北弐 拾 間
東西三 拾 間

御館主黒木紀伊守と申御方御住居被成其後葛西御家臣千葉太郎左衛門と申御方御住居之由申伝候何茂年代相知不申太郎左衛門と申御方ハ橋本屋敷太郎右衛門及町屋敷六右衛門先祖之由申伝候右古館当時ハ畑ニ罷成居候事

「風土記」に記す規模が「古城書立」とほぼ一致するのは前者が後者を利用したためであろう。また「風土記」の千葉次郎左衛門と「古城書立」の千葉太郎左衛門は同一人物と考えられる。内容のやや詳しい「風土記」を参考にすれば、柳津館山館は高森館ともよばれ、館主は黒木紀伊守で、のち葛西の臣千葉太郎左衛門が居館したことになる。実年代については不明であるが、これは発掘調査などによって次第に明らかになるであろう。なお、これらの文献でいう一ノ丸は平場Dに、二ノ丸は平場Bに、三ノ丸は平場Aに対応すると考えられる。

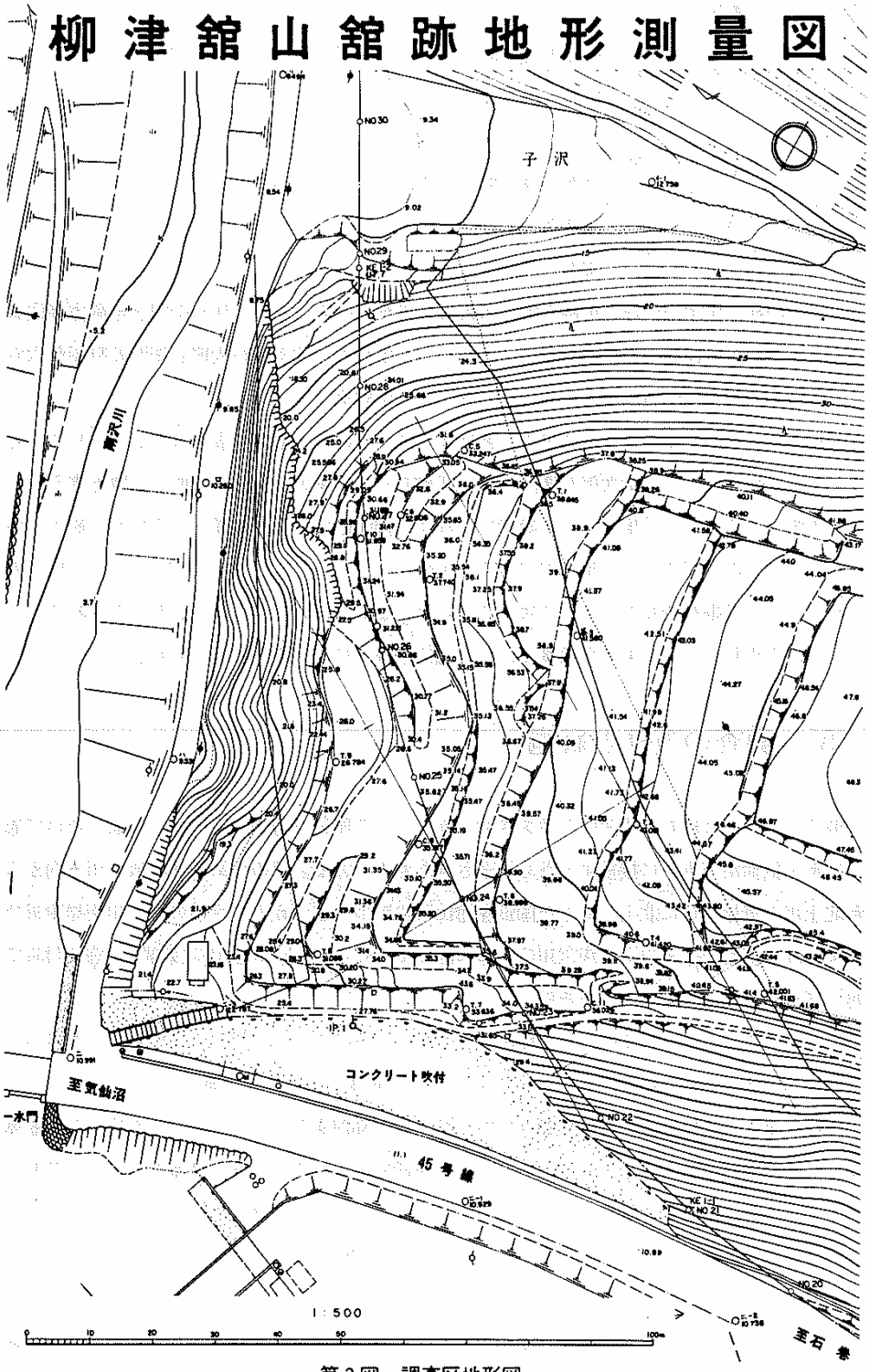
Ⅳ. 調査の方法と経過

柳津バイパスは現在、柳津の町並を複雑に通っている国道45号線を、町並を通過しないで志津川町・気仙沼市方面に接続するため計画されたものである。そのため河北町飯野川方向から新北上川の東岸沿いに北上してきた国道を津山町の町並にさしかかる手前の南沢川南岸附近で北東方向へ変えて、そのまま南沢川の左岸に沿って縦1.7㎞進み、町並の北東部、水守橋付近で再び45号線に合流させるものである。

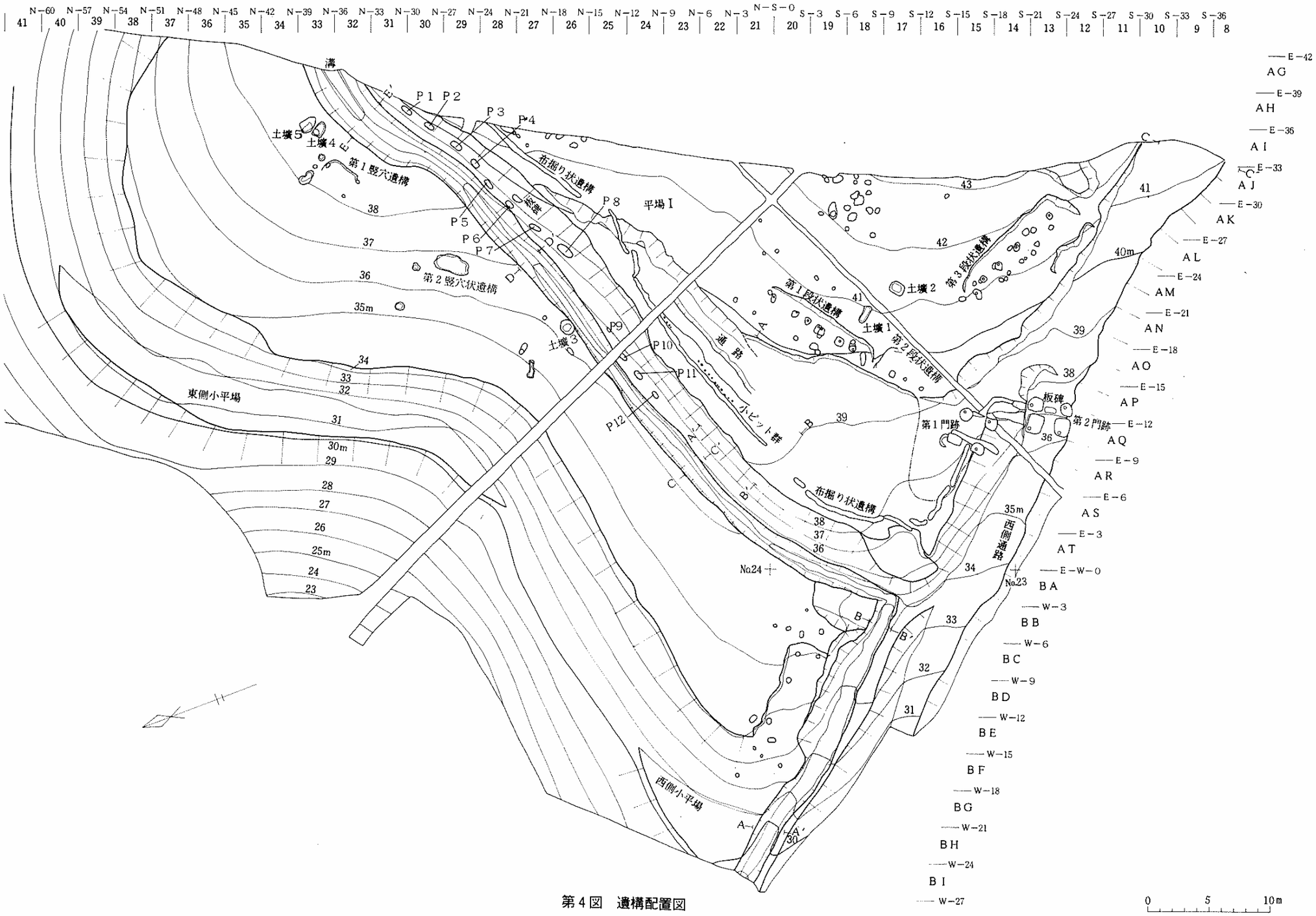
今回の調査はバイパス路線が館山館跡の北西端（前章で述べた平場Dの北西端）を北東方向に横切って建設されるため、その路線敷部分約6,500㎡を対象として実施したものである。

地区設定：計画路線の中心杭№23 と№24 を結ぶ線と№24 を基点にしてこれに直交する線を基準とし、調査対象区全体に3㎜ 単位のグリッドを設定した。グリッドには南北方向をアラビア数字で、東西方向をアルファベットで表わす名称を付した (第３図・第４図)。

調査経過：調査は４月11日から開始した。まず、路線敷内に残る雑木等を撤去し、調査区全体の写真撮影を行った。グリッドを設定した後、地形に合わせてN－O－S、W－30 を基点とする東西・南北方向のセクション観察用のベルトを残し、手掘りおよび重機を用いて表土の剥



第3図　調査区地形図


溝
土壌5
土壌4
第1竪穴遺構
第2竪穴状遺構
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
布掘り状遺構
平場Ⅰ
土壌3
東側小平場
西側小平場
通路
小ピット群
第1段状遺構
第2段状遺構
第3段状遺構
土壌1
土壌2
第1門跡
第2門跡
板碑
西側通路
No24
No23
0
5
10m

第4図　遺構配置図

離を行った。表土剥離は土捨場が調査区東側の子沢部分に一ヶ所しか確保できないため、調査区南端の上部平場から始め、順次、子沢方向に土砂を移動して行った。

表土剥離は調査区内に８～９段認められた段状遺構を中心に約4,800㎡に及んだ。その結果、検出された遺構は一番高い所にある最も広い上部平場（平場Ⅰ）、その一段下の下部平場（平場Ⅱ）、さらにその下に認められる段状遺構（小平場・通路等）に大きく分れて分布することが知られた。また、遺構確認が進むにしたがって、平場Ⅰ、平場Ⅱ、西側通路には積土を施した整地層が認められること、検出された遺構には門跡・布掘り状遺構・通路状遺構・段状遺構・竪穴状遺構・土壙・溝・多くのピット群などがあることが判明した。

検出された各遺構は主として$^{1}/_{20}$の縮尺で平面図・断面図を作成し、合せて写真撮影やレベルの記入もし、記録化をはかりながら精査を進めた。一部には$^{1}/_{100}$や$^{1}/_{40}$の縮尺で平板実測によって記録した所もある。

最後に平場Ⅰの整地層を剥離した所、整地層中から畑の畝と思われる遺構が検出された。さらに、この畑の面の下からも整地層・段状遺構・ピット群・溝などが検出され、最終的には地山を掘り込んだ遺構群が発見された。そのなかには平安時代に属すると考えられる竪穴住居跡２軒も含まれている。

調査のすべてが終了したのは昭和58年９月29日である。また、発掘調査に先だって、調査区を中心に$^{1}/_{500}$の地形図を、調査終了後の12月には館跡全体の地形図を作成した。

Ⅴ．調査の成果

発見された遺構と遺物

今回の調査によって発見された遺構には竪穴住居跡、整地層、門跡、布掘り状遺構、通路状遺構、段状遺構、竪穴状遺構、土壙・溝・ピット群などが、遺物には土師器、須恵器、陶磁器硯・石臼などの石製品や板碑、多様な鉄製品、古銭などの青銅製品や植物種子・角・骨などの自然遺物がある。これらは中世以前のものと、それ以降のものとに大別することができる。ここでは、この大別にしたがって発見された遺構と遺物について記述する。

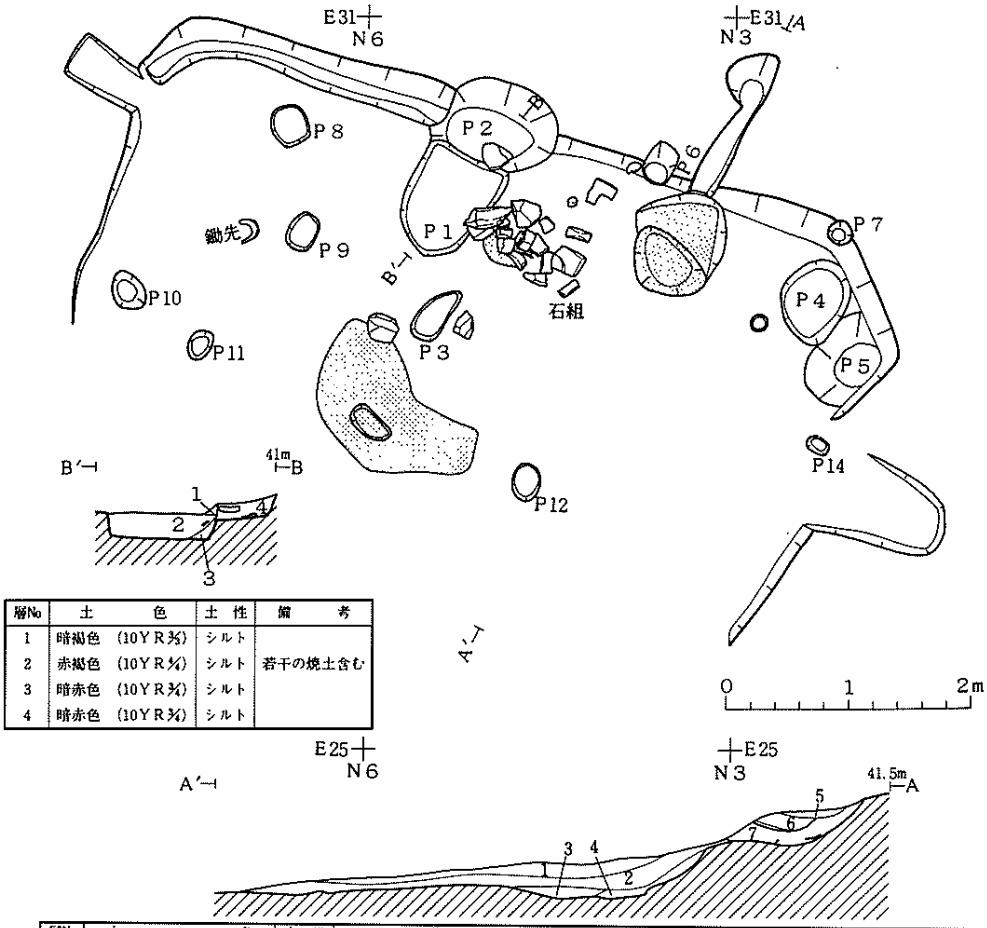
１．中世以前の遺構と遺物

中世以前の遺構には竪穴住居跡があり、遺物にはその堆積土中やその周辺の表土から発見された土師器・須恵器・鉄製品などがある。

１）竪穴住居跡と出土遺物

平場Ⅰの東部、ＡＴ～ＡＬ－21～23区で２軒の竪穴住居跡が検出されている。

第１号住居跡（第５図）



層No	土色	土性	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	
2	赤褐色 (10YR4/4)	シルト	若干の焼土含む
3	暗赤色 (10YR3/4)	シルト	
4	暗赤色 (10YR3/4)	シルト	

層No	土色	土性	備考	
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	灰白色(10YR8/3)火山灰をブロック状に含む　炭化物、地山岩粒を含む	住居堆積土
2	褐色 (10YR4/4)	シルト	炭化物、地山岩粒を含む	
3	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	地山岩粒を含む	
4	赤褐色 (5YR4/6)	シルト	焼土	
5	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	シルト		
6	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	砂質	煙道　天井部
7	褐色 (10YR4/4)	シルト		煙道　堆積土

第５図　第１号住居跡

〔遺構の確認〕ＡＴ～ＡＬ－21～23区で地山直上の漸移層で確認された。

〔平面形・規模・重複〕住居跡北半が検出できなかったため、全体の平面形・規模は不明であるが、残存する壁や床面から、平面形は隅丸長方形で東西6.5m、南北3.5m以上の規模をもつ。第２号住居跡と重複しており、第２号住居跡を南壁で0.6m、東壁で0.5m、西壁で1.2m、ほど拡張したものと思われる。

〔壁〕地山および地山漸移層を壁としており、南壁6.5m、東壁2.7m、西壁2.7mが残る。残存壁高は最も高い南壁で約30cmである。壁はゆるやかに立ち上がっている。

〔床面〕拡張部分は地山を床としているが、第２号住居跡と重複する部分は褐色土とにぶい黄褐色土を貼り床している。床面はほぼ平担で凹凸が少なく、北に緩やかに傾斜している。住居ほぼ中央の床面に1.5m×0.7m の範囲で焼け面が、カマド左脇の床面上には角礫のブロックが焼土・土器と共に認められた。

〔柱穴〕住居内から合計14個のピットが検出されているが、柱痕跡をもつものはない。また、その位置関係に規則性はなく柱穴は不明である。

〔周溝〕カマド東側の南壁東半に認められる。幅約25cm、深さ５cm である。

〔カマド〕住居跡南西隅から約1.5m 離れた南壁に付設されている。燃焼部と煙道部からなる。燃焼部は両側壁が失なわれ、奥壁と底面だけが残る。残在部分は、幅60cm、奥行80cm ほどの規模で、奥壁はゆるやかに立ち上がり煙道部へと続く。煙道部は幅2.5cm で、長さ1.4m、先端部は直径40cm の煙出しピットとなる。煙道床面はほぼ平坦で、煙出しピット部分で急激に立ち上がっている。また、長さ約50cm にわたって天井部が残っている。

〔その他の施設〕住居跡南西隅で検出されたP_4・P_5とカマド左側で検出されたP_1・P_2は他のピットに比して規模の大きなもので貯蔵穴状ピットの可能性がある。

〔堆積土〕２層認められる。第１層は住居中央部に分布し、灰白色火山灰がブロック状に含まれている。第２層は住居全体にみられ床面を覆っている。両層とも自然流入土である。

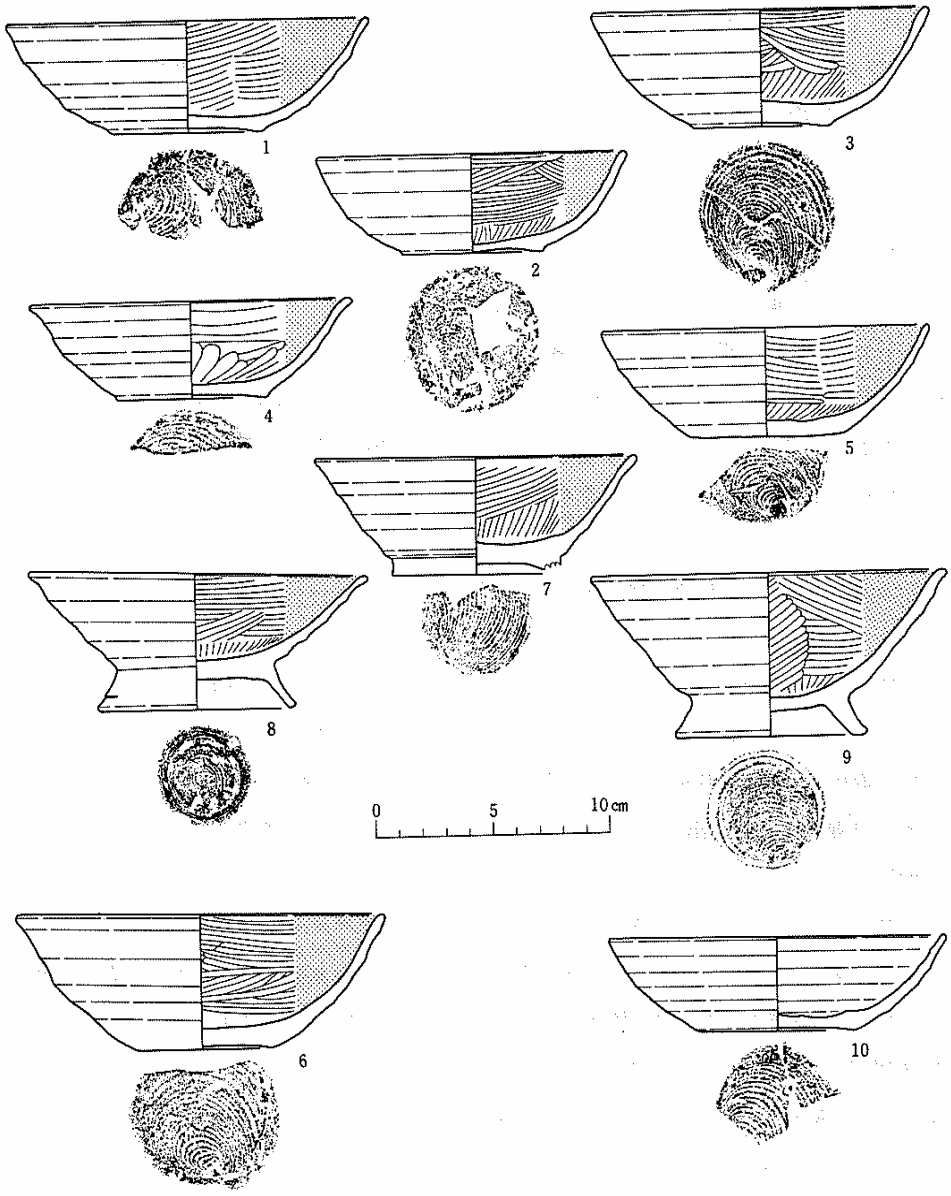
〔出土遺物〕堆積土、床面、ピット、周溝、カマド内から土師器(坏･羽釜･鉢･甕)、須恵器(坏･甕)、赤焼土器(坏)が出土している。堆積土から出土したのは土師器坏１点だけである。

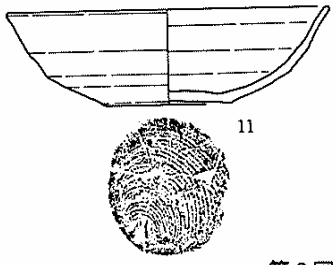
土師器（第６～８図）

坏（第６図１～６）いずれも製作にロクロを使用しているもので、底部は回転糸切り技法によって切り離され、切り離し後の再調整は加えられていない。内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。器形は体部が内弯気味に外傾し、そのまま口縁部にいたるもの（１～３・５）と口縁部がわずかに外反するもの（４・６）がある。

高台付坏（第６図７～９）いずれも製作にロクロを使用しており、坏部の体部はやや丸味をもって外傾し、口縁部で外反する。内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。底部は回転糸切り技法によって切り離されており、８・９は強く外傾する比較的長い高台部をもつ。７は高台部を欠損しているが８・９に比して短く、あまり外傾しない高台部をもつと思われる。

羽釜（第７図１）直接接合しないが、口縁部から体部の破片と底部破片とがある。製作にロクロを使用しており、体部はよく膨み、体部上半に最大径をもつ。口縁部は体部の延長でそのまま内傾しており、端部は角張る。外面の口縁端から約１cm 下部に0.5cm ほど水平にのびる鍔が１条巡っている。外面の体部下半には斜方向の、下端には横方向のヘラケズリが施され、底部にはナデ調整がみられる。内面にはヘラミガキ・黒色処理が施される。ヘラミガキ・黒色処

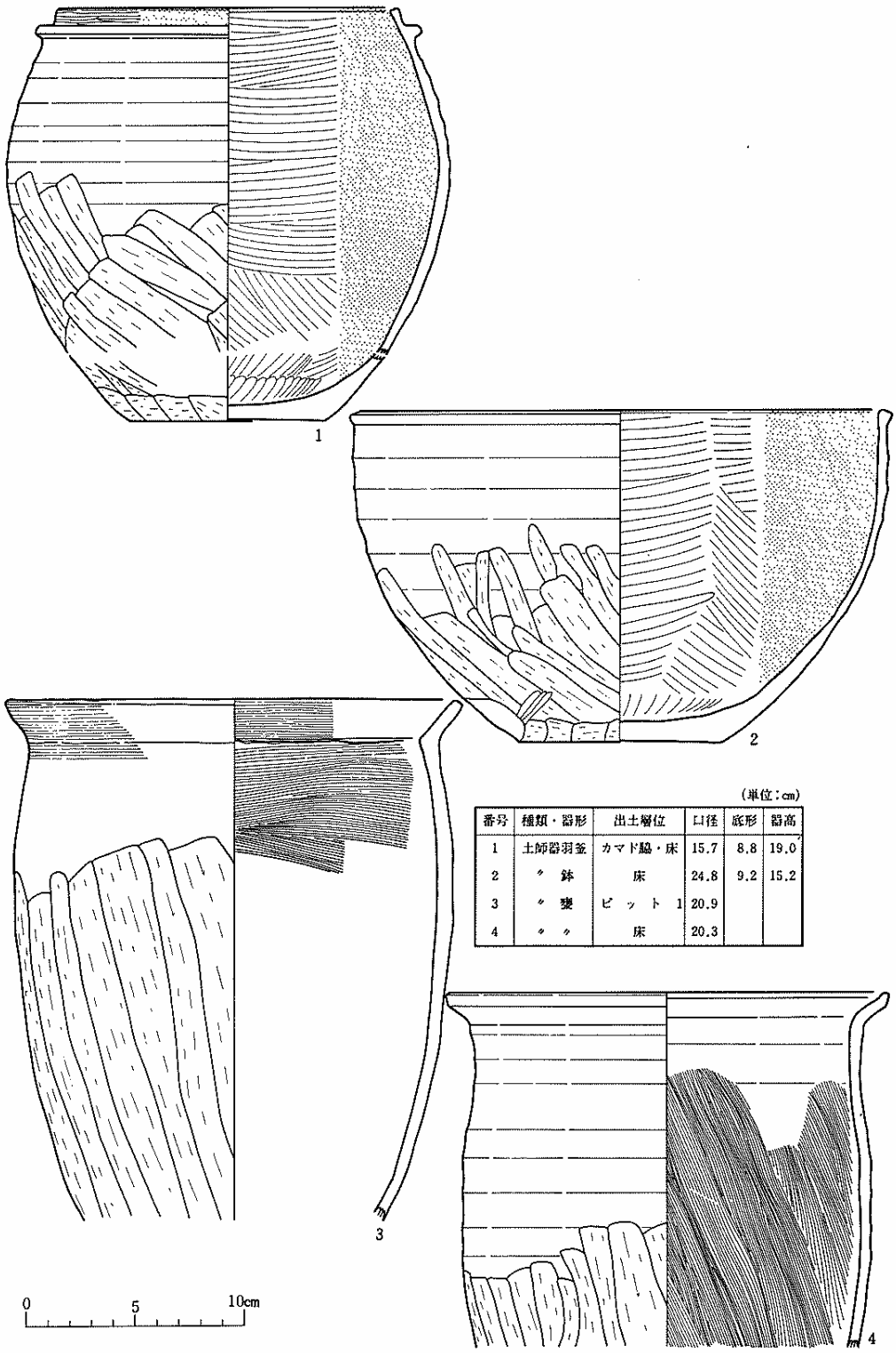




(単位：cm)

番号	種類・器形	出土層位	口径	底径	器高
1	土師器坏	カマド脇・床	15.4	6.4	4.6
2	〃	〃	13.3	6.0	4.1
3	〃	周溝・床	14.4	5.8	4.8
4	〃	煙道	13.8	6.4	4.0
5	〃	ピット4・5	14.0	6.3	4.5
6	〃	1・2層	15.7	5.8	5.5
7	土師器高台付坏	床	13.6	(7.2)	4.8
8	〃	周溝・床	16.4	8.2	5.6
9	〃	P1 カマド脇	15.1	7.8	6.7
10	須恵器坏	床	14.3	6.5	3.9
11	赤焼土器坏	ピット4・5	13.7	5.3	3.9

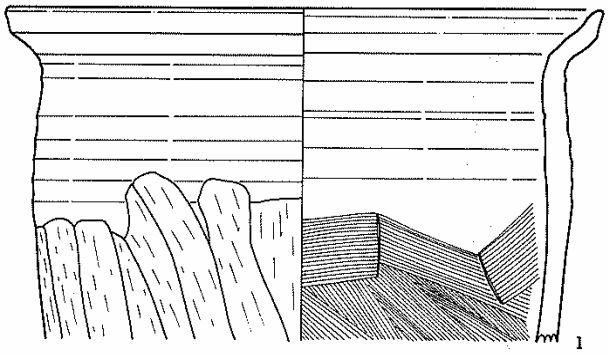
第6図　第1号住居跡出土遺物(1)

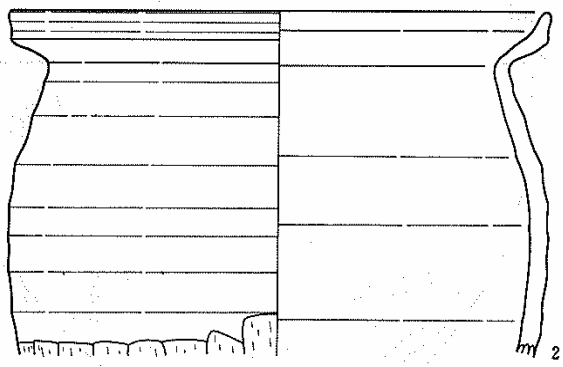


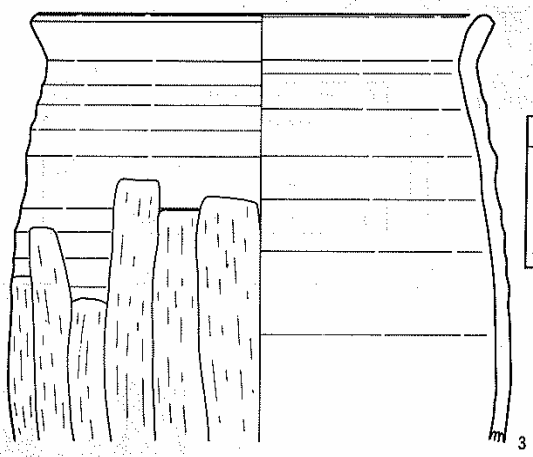
(単位：cm)

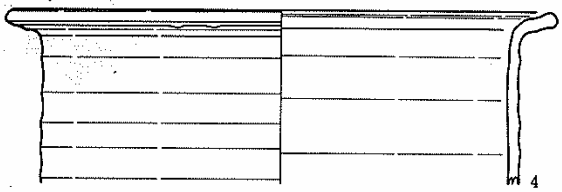
番号	種類・器形	出土層位	口径	底形	器高
1	土師器羽釜	カマド脇・床	15.7	8.8	19.0
2	〃 鉢	床	24.8	9.2	15.2
3	〃 甕	ピット1	20.9		
4	〃 〃	床	20.3		

第７図　第１号住居跡出土遺物（２）







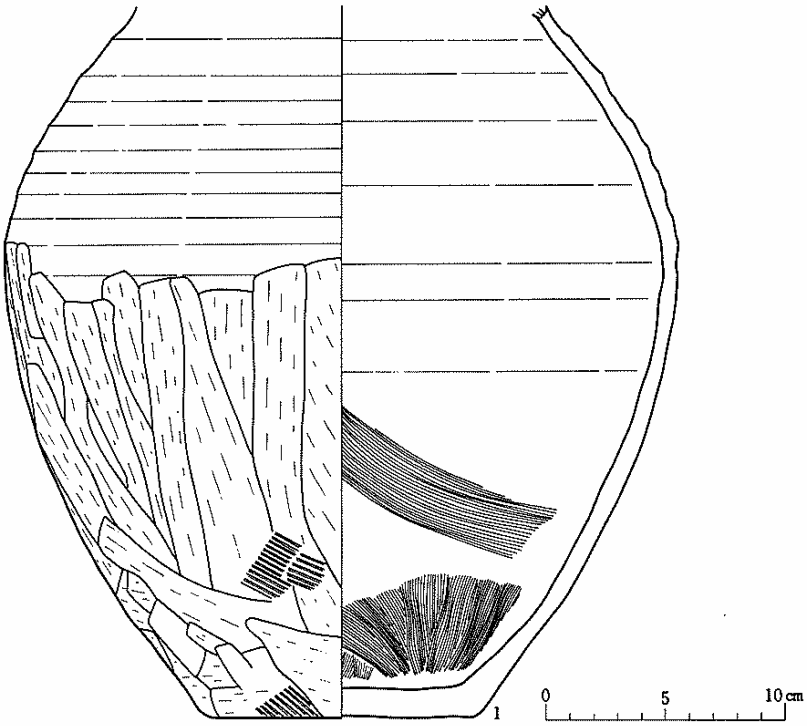


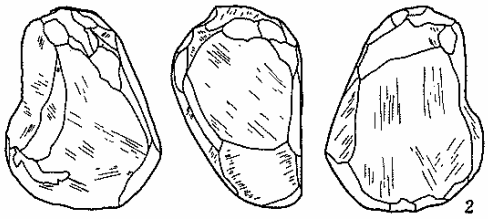
(単位：cm)

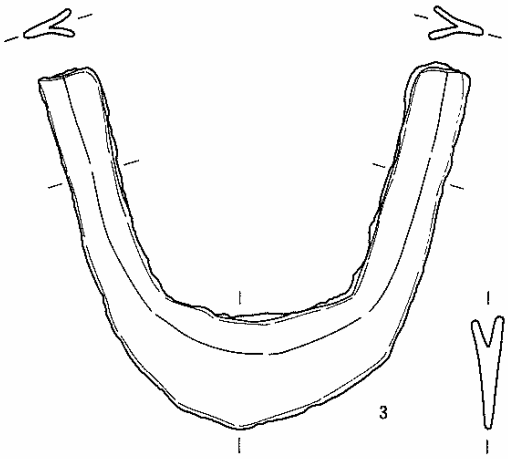
番号	種類・器形	出土層位	口径	底径	器高
1	土師器甕	床	26.1		
2	〃	〃	23.7		
3	〃	〃	20.2		
4	〃	〃	24.0		

0　5　10cm

第８図　第１号住居跡出土遺物（３）







(単位：cm)

番号	種　類	出土層位	備　考
1	須恵器甕	床	底径10.7
2	砥　石	〃	
3	鋤　先	〃	

第９図　第１号住居跡出土遺物（３）

理は外面の口縁部から鍔上面まで及んでいる。

鉢（第７図２）製作にロクロを使用しており、器高に対して口縁径が大きい。体部は丸味をもって外傾し、上半から口縁部は直立気味となる。口縁端近くでわずかに外傾し、端部は角張る。外面の体部下半には斜方向の、下端には横方向のヘラケズリが施され、部分的にその上からヘラミガキが施される所もある。底部はナデ調整されている。内面はヘラミガキ・黒色処理が施されており、黒色処理は口縁端部外面まで及んでいる。

甕（第７図３・４、第８図１～４）製作にロクロ不使用のもの（第７図３）と使用するもの（第７図４、第８図１～４）とがある。第７図３は底部を欠くもので、最大径が口縁部にある。体部における最大径は上半にある。口縁部は外傾し、端部は角張っている。器面調整は口縁部内外面とも横ナデ、体部外面にはヘラケズリ、内面にはナデ調整が施される。

ロクロ使用の甕は口縁部が外傾した後、さらに端部が上方に屈曲するもの（第７図４・第８図１・２）と単に外傾するもの（第７図３・４）とがある。前者には最大径が口縁部にあるもの（４・１)、口縁部と体部上半にあるもの（２）とがあり、後者には体部中央に位置するもの（３）と口縁部にあるもの（４）とがある。器面調整は内外共ロクロ調整の後、外面では体部中央から下半にヘラケズリが施され、内面にナデ調整がみられるもの（第７図４・第８図１）もある。

須恵器

坏（第６図10）体部から口縁部にかけてやや内弯気味に外傾する器形で、底部は回転糸切り技法で切り離されている。

甕（第９図1）口頸部を欠くが、体部は上半に最大径をもつ甕である。調整技法は外面はタタキ後体部上半がロクロ調整、下半がヘラケズリで、部分的に平行タタキ目が残っている。内面はロクロ調整であるが底部近くに放射状のナデ調整が施される。

赤焼土器

坏（第６図11）体部はやや内弯気味に外傾し、口縁部は外反気味となる。底部は回転糸切り技法で切り離されている。

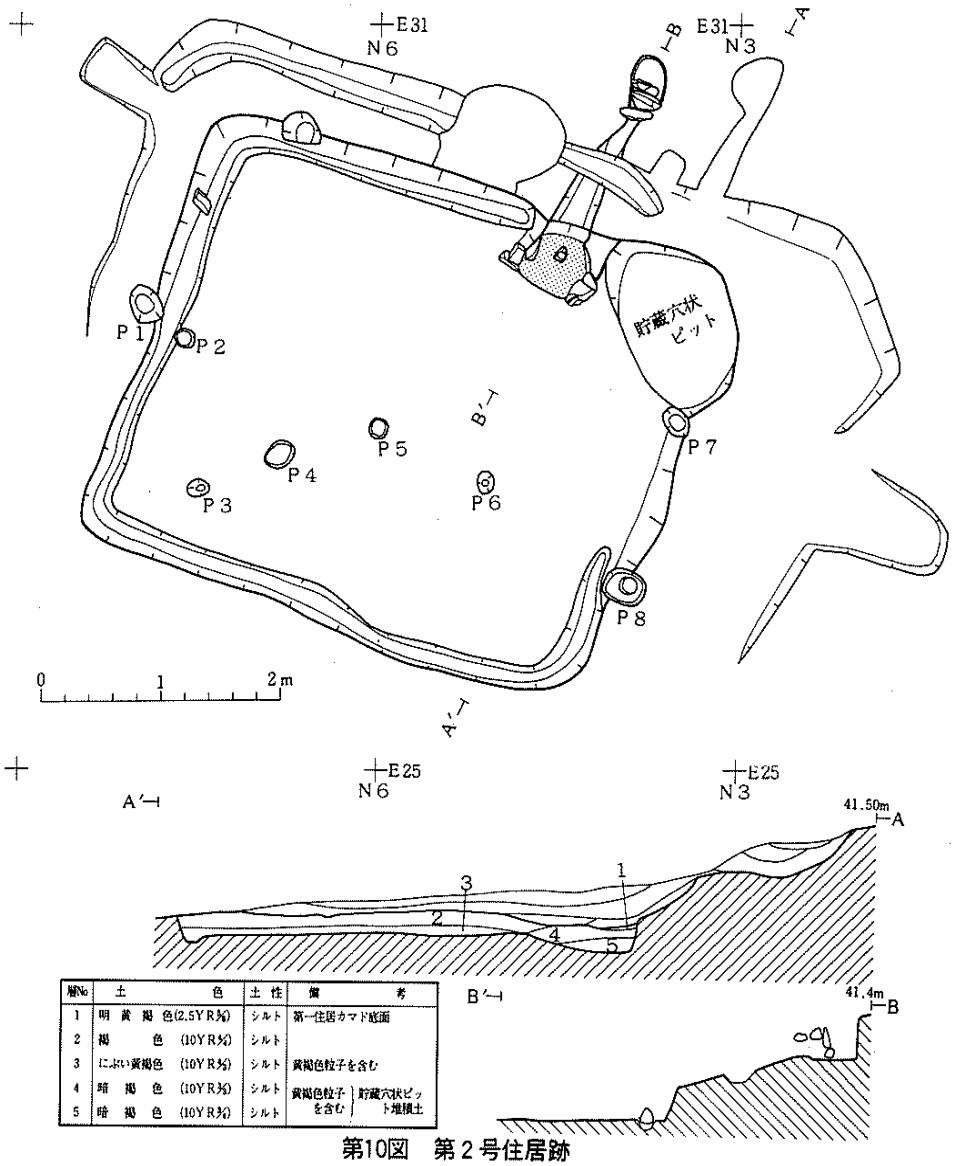
石製品

砥石（第９図２）軽石の円礫を砥石としたもので、大きな平坦面が４面みられる他、擦痕や切痕が全体に認められる。

鉄製品

鋤先（第９図３）鋤の外縁に装着する片刃のものと思われる。刃部は鈍く屈曲しており側縁は上に向って大きく開く。大きさは長さ15.2㎝、幅18.1㎝である。

刀子　図示しないが、P_4・P_5の堆積土中から銹化が著しく、刃部の大部分を欠く、刀子破版



層No	土色	土性	備考
1	明黄褐色(2.5YR3/4)	シルト	第一住居カマド底面
2	褐色 (10YR3/4)	シルト	
3	にぶい黄褐色 (10YR3/4)	シルト	黄褐色粒子を含む
4	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	黄褐色粒子を含む／貯蔵穴状ピット堆積土
5	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	

第10図　第２号住居跡

が１点出土している。関は両関である。

第２号住居跡（第10図）

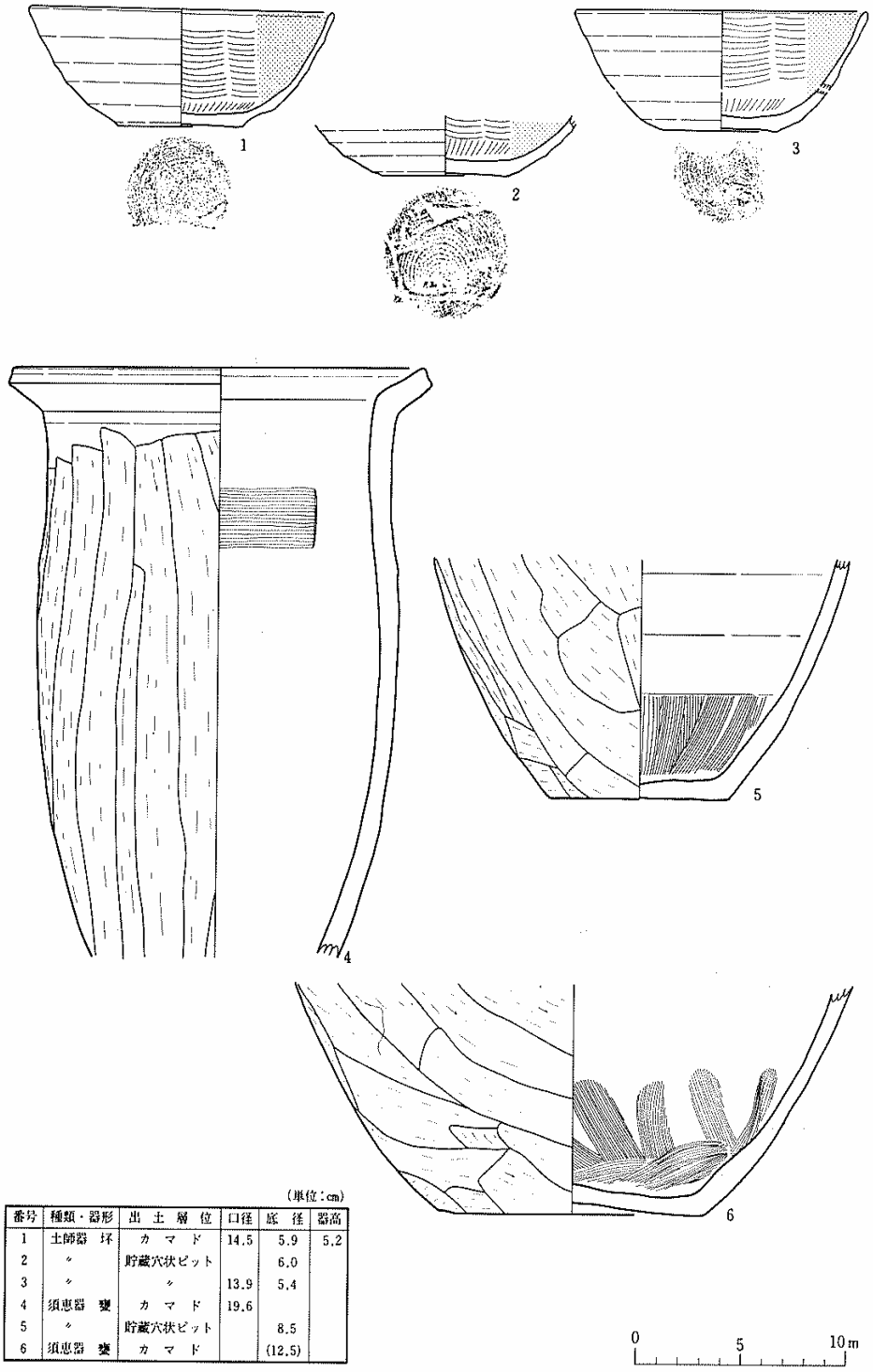
〔遺構の確認〕ＡＴ～ＡＬ・22・23区の第１号住居跡床面で検出された。

〔平面形・規模〕東西約4.5m、南北3.8mで、平面形は長方形であるが、南西隅が大きく張り出している。

〔壁〕地山を壁としている。残存壁高は最も高い南壁で約30cm、最も低い北壁で約５cmである。

〔床面〕地山を床面としており、ほぼ平坦で、北東方向に緩やかに傾斜している。

〔柱穴〕住居内から合計８個のピットが検出されている。そのうちP_8からは柱痕跡が検出さ



(単位：cm)

番号	種類・器形	出土層位	口径	底径	器高
1	土師器 坏	カマド	14.5	5.9	5.2
2	〃	貯蔵穴状ピット		6.0	
3	〃	〃	13.9	5.4	
4	須恵器 甕	カマド	19.6		
5	〃	貯蔵穴状ピット		8.5	
6	須恵器 甕	カマド		(12.5)	

第11図　第２号住居跡出土遺物

れており、同じく西壁ぎわで検出されたP_7と共に柱穴の可能性がある。しかし、それ以外のピットの配置には規則性は認められない。

〔周溝〕カマド左側、南壁中央から東壁・北壁下をへて西壁北端から約１㎜の所までのびている。幅約20㎝で、深さ10㎝である。

〔カマド〕住居跡南西隅から約１㎜離れた南壁に付設されている。燃焼部と煙道部からなり、燃焼部は幅50㎝、奥行50㎝で、側壁には両側壁とも角礫を３個並べ芯としている。右側壁の前端部には土師器甕の大破片が押えとして使用されている。奥壁は高さ約30㎝で急激に立ち上がって煙道部にと続いている。煙道部は一部第１住居跡の周溝に切られるが、1.1㎜ 住居跡外にのびて長径40㎝、短径30㎝、深さ約35㎝の煙出しピットへと接続している。底面は比較的急角度で昇っている。また、煙道天井部に裾えられた角礫か３個残存している。

〔その他の施設〕住居跡南西隅に住居外に張り出す形で長径 1.5㎜、短径 0.9㎜、深さ約 20㎝の大きなピットが検出された。カマドに隣接しており貯蔵穴状ピットと思われる。

〔堆積土〕２層認められる。いずれも第１住居跡構築時の貼り床土と思われる。

〔出土遺物〕貯蔵穴状ピット、カマド内や側壁から土師器(坏・甕)、須恵器（甕）が出土している。

土師器

坏（第11図１～３）２は口縁部を欠き、３は直接接合しないものであるが、いずれも製作にロクロを使用しており、底部は回転糸切り技法によって切離されている。１・３は体部から口縁部まで内弯気味に外傾する器形である。

甕（第11図４・５）４は底部を欠き、５は底部だけのものである。いずれも製作にロクロを使用している。４は口縁部に最大経があり、体部最大径は体部ほぼ中央に位置している。口縁部は強く外傾しており、端部がわずかに上方に屈曲している。器面調整はロクロ調整後、外面では縦位のヘラケズリが施され、内面には一部ヘラナデが認められる。５は外面体下半にヘラケズリが、内面にはロクロ調整と底部近くにナデ調整がみられる。

須恵器

甕（第11図６）大甕の底部破片で、外面には体部に斜方向のヘラケズリが、底部にナデ調整が施されている。内面にはナデ調整が施されている。

２．中世以降の遺構と遺物

今回の調査によって上部平場（平場Ⅰ)、下部平場（平場Ⅱ)、さらにその下の北・西斜面の段状遺構（小平場・通路）から発見された遺構には整地層、門跡、布掘り状遺構、通路状遺構段状遺構、竪穴状遺構、土壙、溝、ピット群などがある。発見された遺構についてはそれぞれ遺構ごとに説明をおこない、出土遺物については種類ごとにまとめて図示し説明を加える。

1) 遺　構

整地層（第12・13図）

整地層は平場Ⅰの北西部、平場Ⅱの北西部、東側小平場の西部、西側通路南半部に認められる。第12図は調査区北斜面に設定した南北セクションベルトの実測図を示したもので、平場Ⅰ、東側小平場の整地層の状態が知られる。平場Ⅱの整地層は北西部の縁辺にわずかに認められるだけで、このセクション図には現われていない。

平場Ⅰ整地層（第12図、第13図１・２）

平場Ⅰの北西縁辺部に認められる。最も厚い部分で約１㎜の積土を施した大規模な整地層でその範囲は約900㎡である（第14図)。

この整地層は大きくⅢ層に大別できる。

Ⅰ層ー整地層の分布範囲全体にみられる。東半では地山土のロームも混じるが、ほとんどが約５～10㎝の大きさの角礫の充満する層である。最も厚い部分で約60㎝ある。この整地層上面で布掘り状遺構、小ピット群、通路状遺構が検出されている。第１段状遺構の床面も、この整地層上面に及ぶと思われる。また、この整地Ⅰ層下からは畑の畝と思われる凹凸が発見された(第14図)。

Ⅱ層－Ⅰ層と同様の分布を示す。黄褐色土に多量の礫や地山土(ローム)を含む層で約30㎝の層厚をもつ。この整地層上面で第４・第５段状遺構の床面が検出されており、北半の上面は畑の畝となっている。この整地Ⅱ層下からは第７・８・９段状遺構が検出された（第15図)。また、多くの出土遺物（特に鉄製品、古銭、板碑）と炭化植物種子はこの層から出土している。

Ⅲ層ー第９段状遺構の北半に部分的にみられる。第10段状遺構上に、このⅢ層を積土して第９段状遺構の床面としているもので約10～20㎝の層厚がある。

平場Ⅱ整地層

平場Ⅱの北側縁辺の西端近くに褐色シルト層に小礫を多量に含む層が１層認められるが、その範囲は狭く、層厚もあまりない。

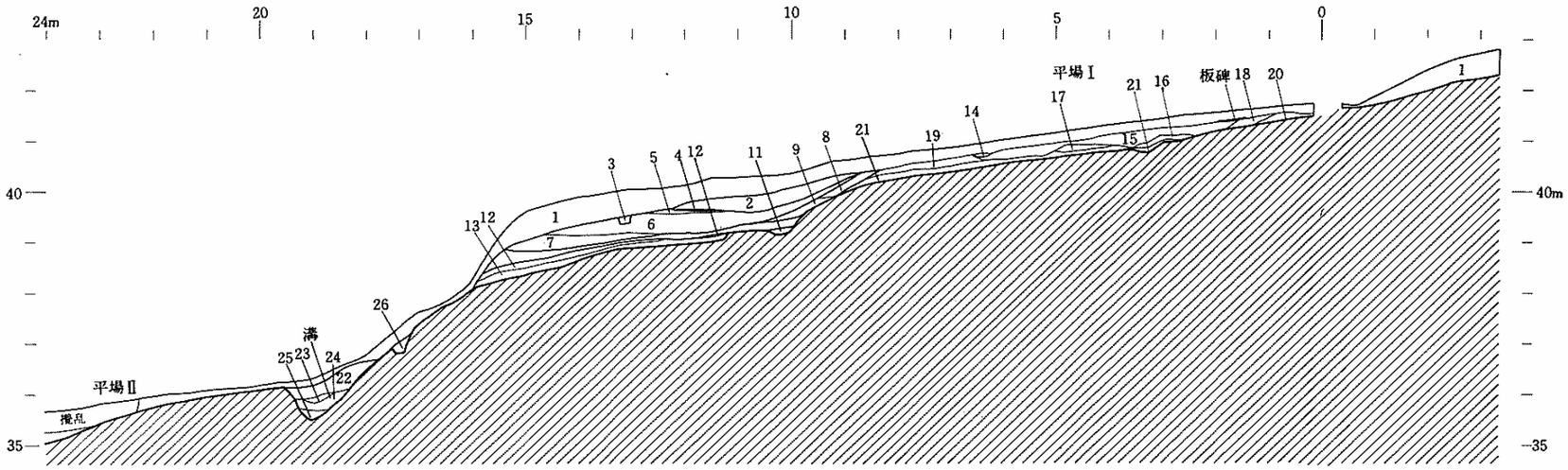
東側小平場整地層（第12図）

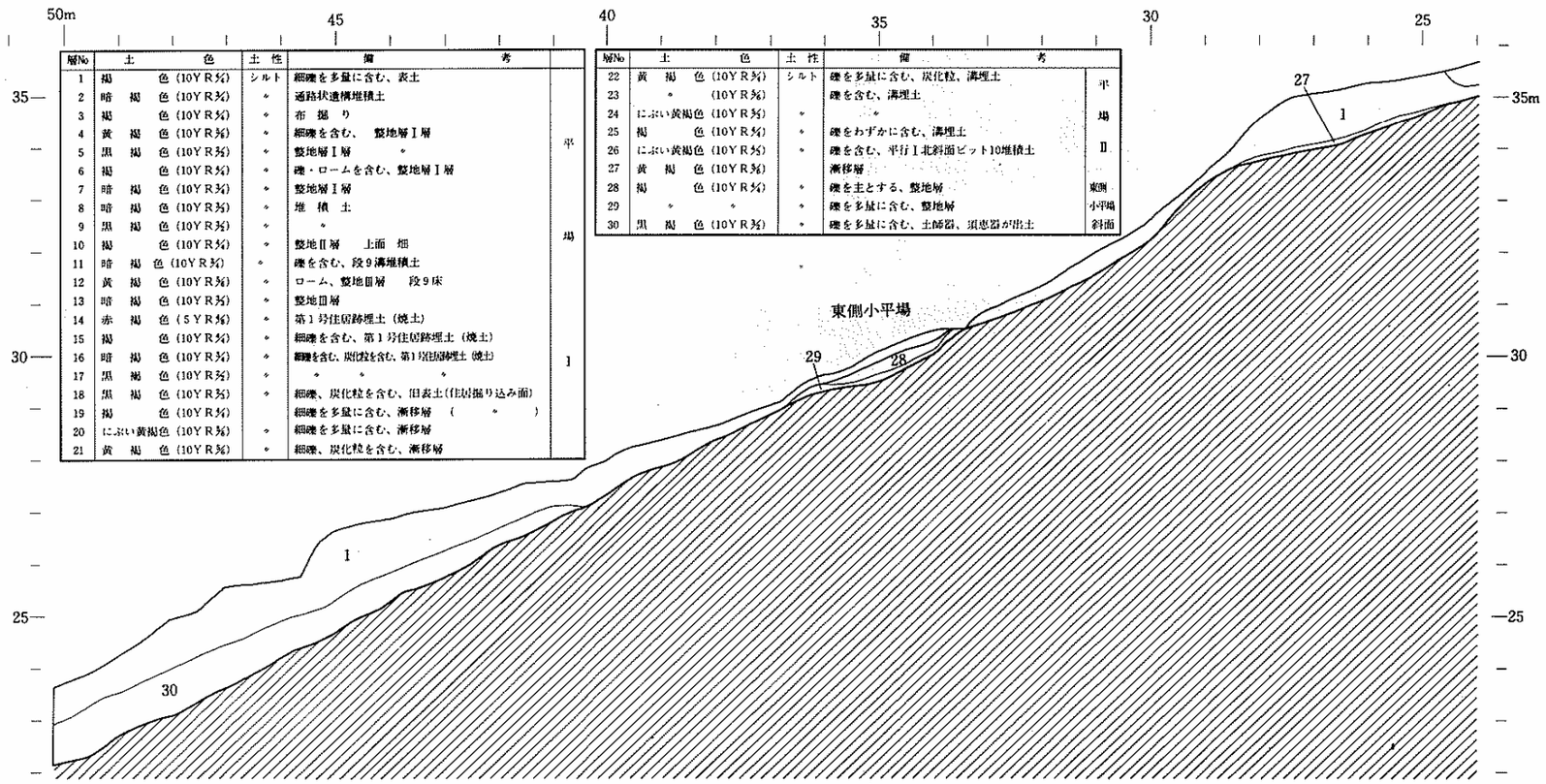
平場Ⅲの西端、南北セクション部分に認められるが、その分布範囲は狭い。

西側通路整地層（第13図３）

西側通路の南半、約30㎜の長さにわたって認められる。南に行くにしたがって厚く積土されており、調査区南端では約1.5㎜の層厚をもつ。この整地層は２層に大別される。

Ⅰ層ー表土下で検出された層で最も厚い所で約80㎝の層厚をもつ。ほぼ水平に積土されており、層中には多量の礫や地山土を含んでいる。特にその上面は多量の黄褐色地山土を含んでいて、固くしまっている。上面はほぼ平坦であるが、全体的に西にわずかに傾斜している。２の

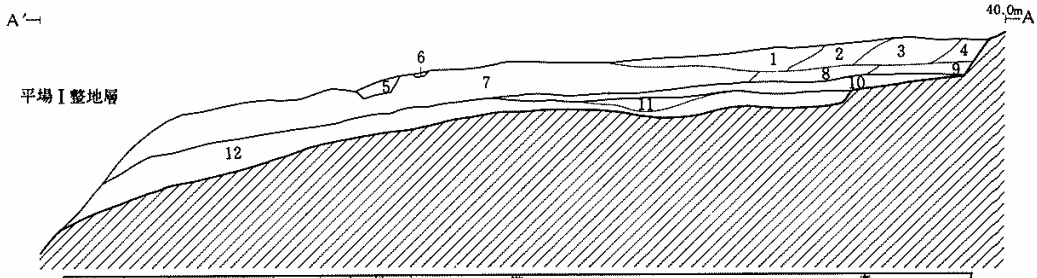




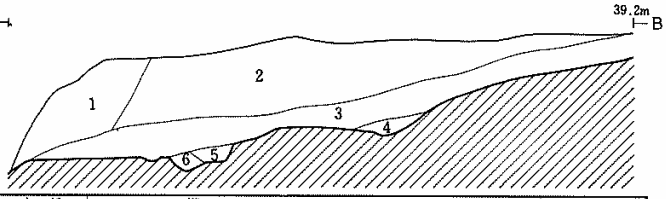
層No	土色	土性	備考	
1	褐色（10YR⅔）	シルト	細礫を多量に含む、表土	平場Ⅰ
2	暗褐色（10YR⅔）	〃	通路状遺構堆積土	
3	褐色（10YR⅔）	〃	布掘り	
4	黄褐色（10YR⅔）	〃	細礫を含む、整地層Ⅰ層	
5	黒褐色（10YR⅔）	〃	整地層Ⅰ層 〃	
6	褐色（10YR⅔）	〃	礫・ロームを含む、整地層Ⅰ層	
7	暗褐色（10YR⅔）	〃	整地層Ⅰ層	
8	暗褐色（10YR⅔）	〃	堆積土	
9	黒褐色（10YR⅔）	〃	〃	
10	褐色（10YR⅔）	〃	整地Ⅱ層 上面 畑	
11	暗褐色（10YR⅔）	〃	礫を含む、段9溝堆積土	
12	黄褐色（10YR⅔）	〃	ローム、整地Ⅲ層 段9床	
13	暗褐色（10YR⅔）	〃	整地Ⅲ層	
14	赤褐色（5YR⅔）	〃	第1号住居跡埋土（焼土）	
15	褐色（10YR⅔）	〃	細礫を含む、第1号住居跡埋土（焼土）	
16	暗褐色（10YR⅔）	〃	細礫を含む、炭化粒を含む、第1号住居跡埋土（焼土）	
17	黒褐色（10YR⅔）	〃	〃 〃 〃	
18	黒褐色（10YR⅔）	〃	細礫、炭化粒を含む、旧表土（住居掘り込み面）	
19	褐色（10YR⅔）		細礫を多量に含む、漸移層 （ 〃 ）	
20	にぶい黄褐色（10YR⅔）	〃	細礫を多量に含む、漸移層	
21	黄褐色（10YR⅔）	〃	細礫、炭化粒を含む、漸移層	

層No	土色	土性	備考	
22	黄褐色（10YR⅔）	シルト	礫を多量に含む、炭化粒、溝埋土	平場Ⅱ
23	〃（10YR⅔）		礫を含む、溝埋土	
24	にぶい黄褐色（10YR⅔）	〃	〃	
25	褐色（10YR⅔）	〃	礫をわずかに含む、溝埋土	
26	にぶい黄褐色（10YR⅔）	〃	礫を含む、平行Ⅰ北斜面ピット10堆積土	
27	黄褐色（10YR⅔）		漸移層	
28	褐色（10YR⅔）	〃	礫を主とする、整地層	東側小平場斜面
29	〃 〃	〃	礫を多量に含む、整地層	
30	黒褐色（10YR⅔）	〃	礫を多量に含む、土師器、須恵器が出土	

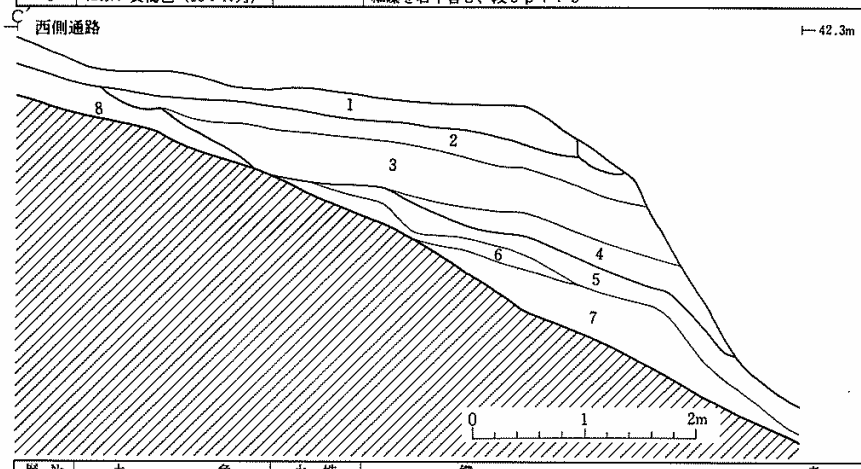
第12図　南北ベルト断面図



層 No	土色	土性	備考
1	褐色 (10YR5/4)	シルト	細礫を多量に含む
2	〃 〃	〃	〃 炭化粒を若干含む 整地Ⅰ層
3	〃 〃	〃	〃 〃 整地Ⅰ層
4	〃 (10YR5/6)	〃	細礫を含む 〃
5	〃 (10YR5/4)	〃	角礫を多量に含む、布掘り状遺構埋土
6	暗褐色 (10YR3/3)	〃	小ピット埋土
7	明黄褐色(2.5YR7/6)	礫	褐色 (10YR5/4) シルトを含む
8	〃 〃	〃	褐色 (10YR5/6) シルトを含む 整地Ⅰ層
9	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	細礫を多量に含む、炭化粒を含む 整地Ⅰ層
10	褐色 (10YR5/4)	〃	細礫と炭化粒を多量に含む、段5埋土（上面畑）
11	黒色 (10YR5/6)	〃	焼土を若干含む、段9埋土
12	黄褐色 (10YR5/6)	〃	礫を多量に含む、段9埋土 整地Ⅱ層

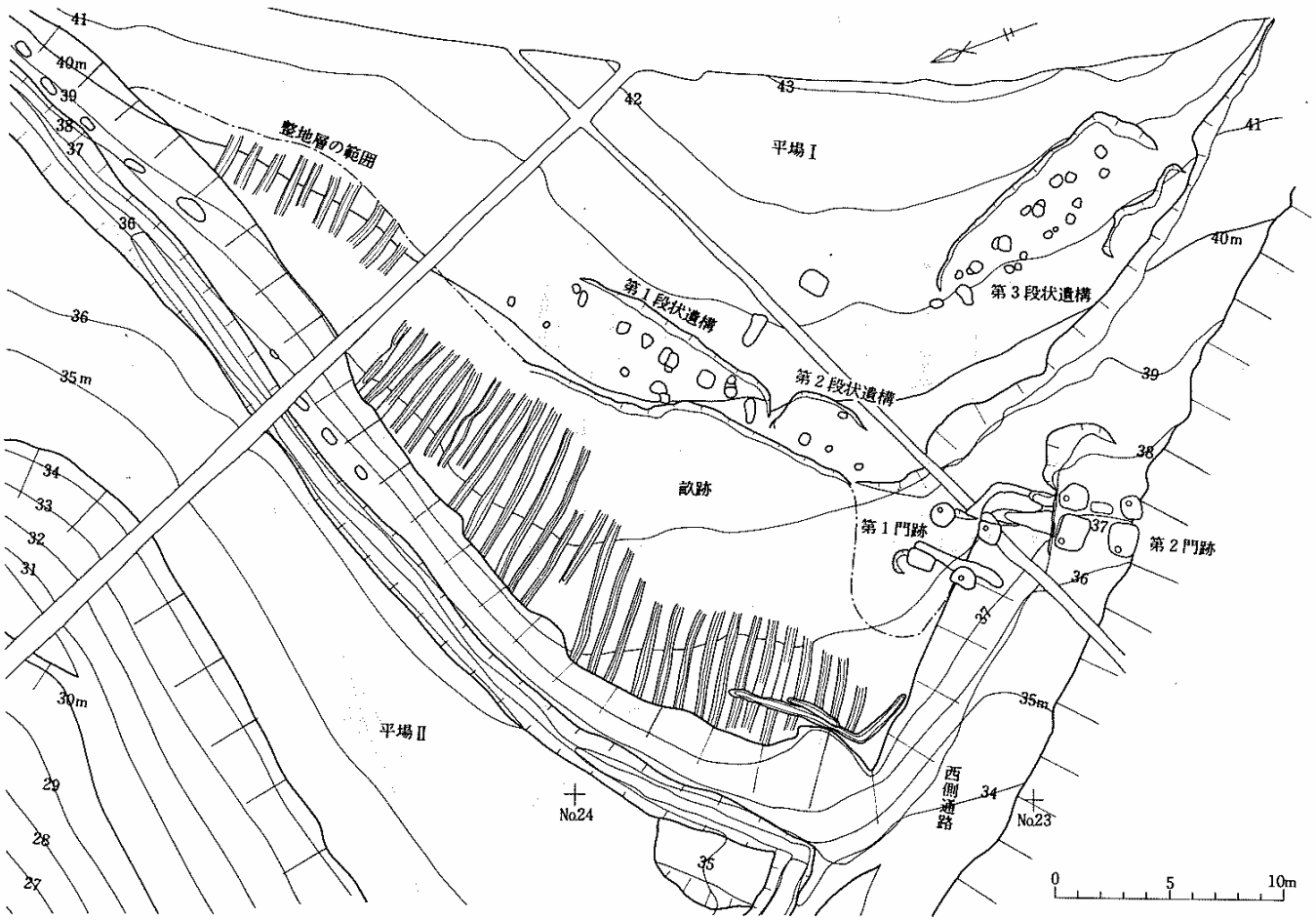


層 No	土色	土性	備考
1	明黄褐色(2.5YR7/6)	礫	褐色 (10YR5/6) シルトを含む 整地Ⅰ層
2	〃 〃	〃	〃 〃 整地Ⅰ層
3	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	礫を多量に含む、整地Ⅱ層
4	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	〃	礫を含む、炭化粒を若干含む、段7
5	褐色 (10YR5/4)	〃	〃 〃 、段8溝堆積土
6	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	〃	細礫を若干含む、段8 pit 3

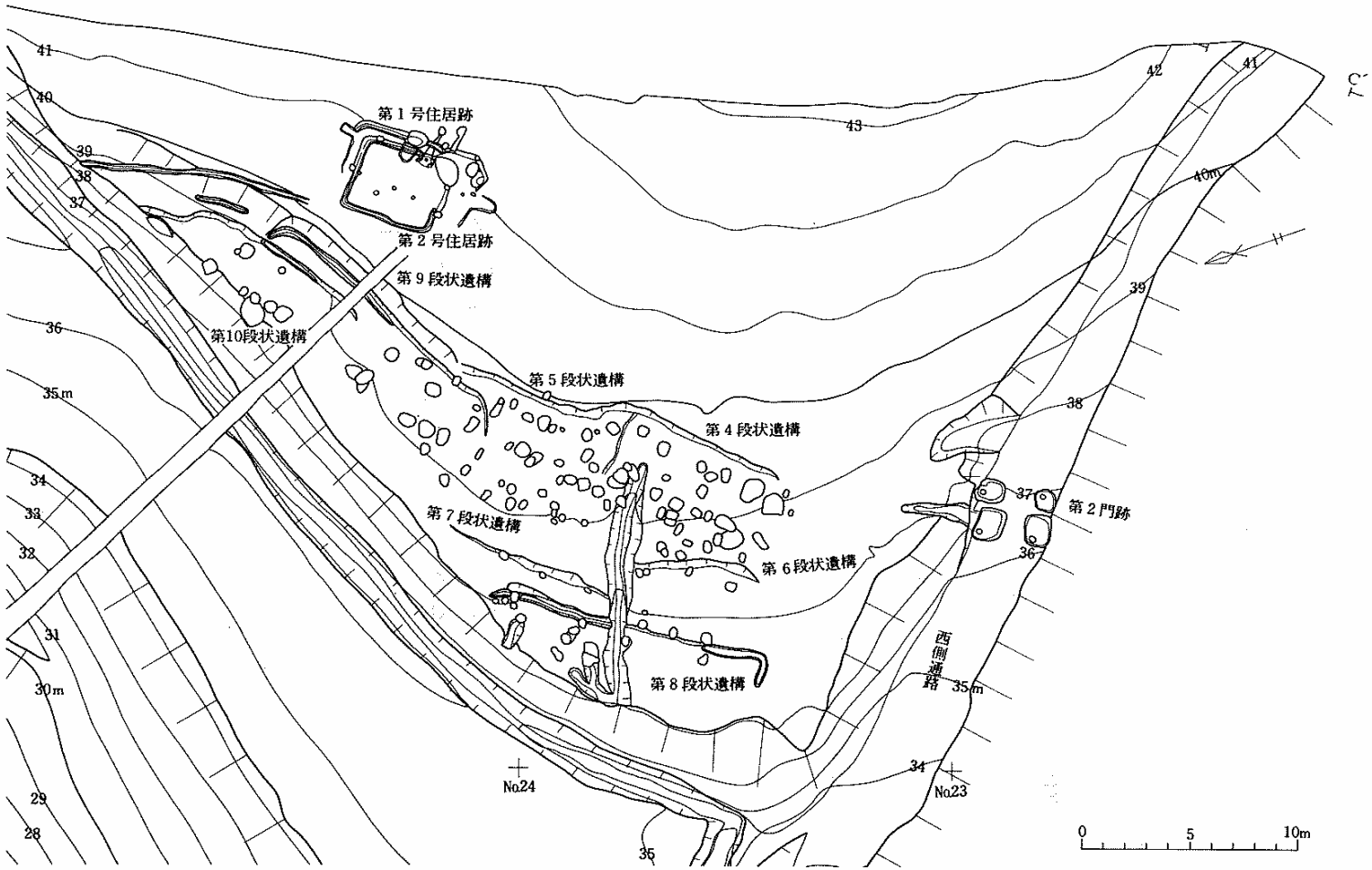


層 No	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	シルト	細礫を多量に含む、表土
2	〃 (10YR5/4)	〃	〃
3	褐色 (10YR5/4)	〃	〃 整地Ⅰ層
4	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	〃	〃
5	〃 (10YR5/4)	〃	〃 整地Ⅱ層
6	〃 (10YR5/3)	〃	〃
7	褐色(7.5YR5/4)	〃	〃 、旧表土
8	黒褐色 (10YR3/2)	〃	〃 、漸移層

第13図　整地層


整地層の範囲
平場Ⅰ
第1段状遺構
第2段状遺構
第3段状遺構
畝跡
第1門跡
第2門跡
平場Ⅱ
西側通路
No.24
No.23
40m
35m
30m
0
5
10m

第14図　畑の畝跡



第15図　整地層下遺構配置図

整地層の北端近くで、完形の板碑が通路に対して横位に、裏返しの状態で出土した。陶磁器古銭、石臼、鉄鏃、刃子などが出土している。

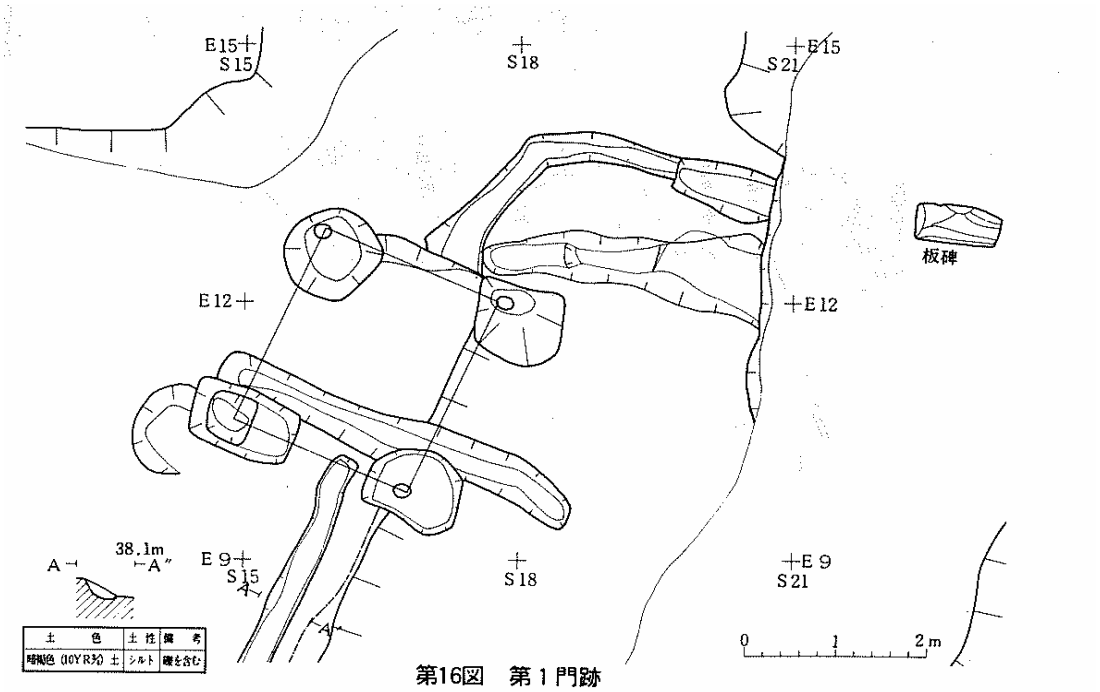
Ⅱ層－第４層下で検出された。地山面に約60㎝積土したもので、小礫を多量に含んでいる。その上面はほぼ平担であるが、南側では西へ傾斜している。また、この層の上面には多くの炭化物がみられた。

門 跡

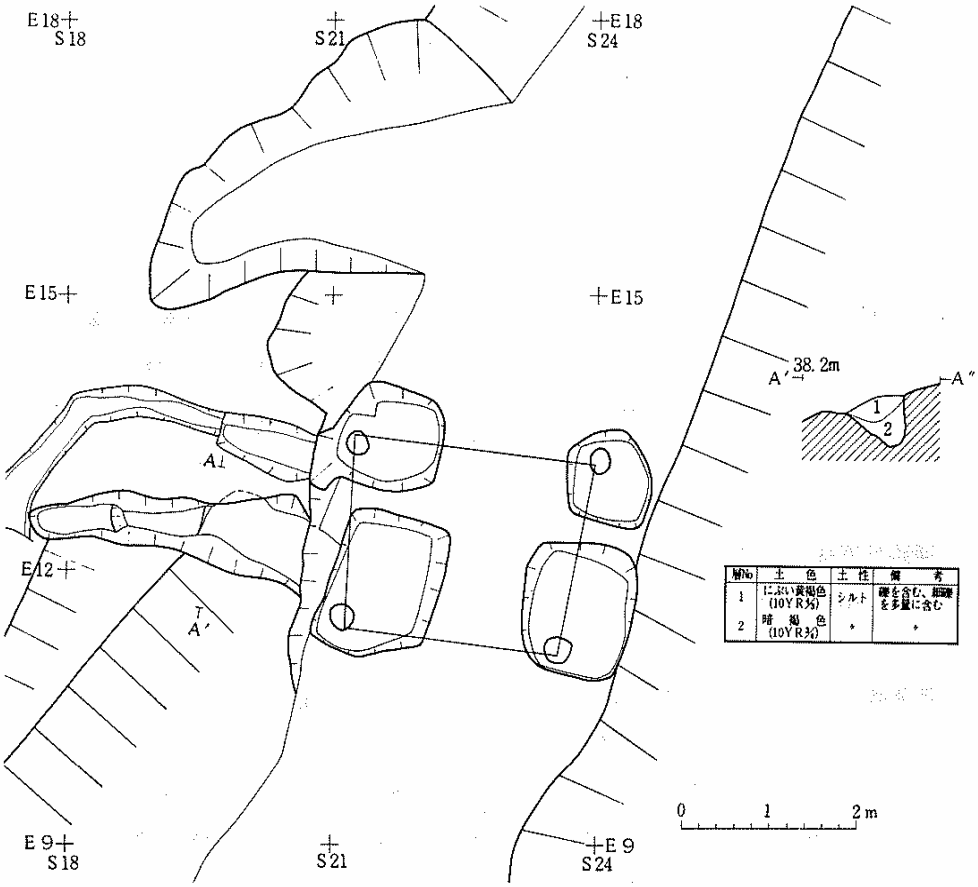
平場Ⅰの西部で検出された第１門跡と西側通路で検出された第２門跡とがある。

第1門跡（第16図）

ＡＰ・ＡＱ－14～16区の表土下の地山面で検出された。平場Ⅰの西辺で、北西隅から約10㎡南に位置しており、４個の柱穴と溝からなる。柱穴は一辺１ｍ前後の方形を基調とする大きな掘り方をもち、直径約15㎝の柱痕跡が３個の柱穴から見つかっている。柱痕跡の間隔は南北2.4ｍ、東西1.8ｍで、桁行１間(６尺)、梁間１間（８尺）の四脚門が想定できる。この門の北側に内接して東西にのびる幅約40㎝、深さ約10㎝の溝がある。この門は西側通路に面していたと思われるが、門の検出面と西側通路との間には約２ｍの標高差があり、門の前面は西側通路の急勾配の法面となっている。西側通路と門とを連絡する何らかの施設の存在が予想されるが、今回の調査では検出できなかった。また、この門の梁間ほぼ中央から南と北にのびる布掘り状遺構が検出されている。



第16図　第１門跡



第17図　第２門跡

第2門跡（第17図）

ＡＰ・ＡＱ－12･13区の西側通路整地Ｉ層下の地山面(岩盤)で検出された。第１門跡の南西約３mの所に位置している。一辺80～150cmの方形を基調とする大きな柱穴掘り方４個が検出されたが、北側の掘り方２個の規模が大きい。柱穴には直径30cmの柱痕跡が認められ、その間隔は南北では2.1m、東西では北側が2.4m、南側が2.7mあり、平面形は通路に対して逆台形となっている。桁行１間、梁間１間の北面する四脚門と思われ、この門によって西側通絡は完全に遮断される。この門の東側には西側通路から平場Ｉにかけて幅70cmの布掘り状遺構が約３mの長さでのびている。また、門の約２m南には西側通路から平場Ｉへ登る下幅約1.5mの通路がある。南の布掘り状遺構から白磁碗の破片が出土している。

布掘り状遺構（第４図）

門跡の項でも述べたが、第１門跡の北側と南側に接して布掘り状遺構が検出された。北側の布掘り状遺構は平場Ｉの西辺を約７m のびた所で東に曲がり、北辺に沿って断続的ではあるが

調査区東端まで約48㎜のびている。南側の布掘り状遺構は平場Ⅰの西辺に沿って約1.5㎜のびそこでほぼ直角に折れ曲がり、西側通路側に約3㎜のびている。幅20～40㎝で深さ10～20㎝の溝状の掘り方に、褐色シルトと多量の角礫が詰まっている。この布掘り状遺構は門付近と北辺東端部では地山及び地山漸移層を掘り込んでいるが、北辺の大部分と西辺の一部は整地Ⅰ層を掘り込んでいる。北辺中央部の布掘り状遺構に南隣する形で直径約10㎝の小ピットが16個一列に並んで検出されており、この遺構と一体のものである可能性がある。また、門南側の布掘りは西側通路部分では削平により検出されなかったが、本来は西側通路整地Ⅰ層上を通路を横断する形でのびていたと思われ、整地層中から発見された板碑はその基礎として据えられた可能性もある。さらにこの遺構は西側通路部分西辺にものびていたとも考えられる。

また、整地Ⅰ層下の畑の面で確認された布掘状遺構もある。平揚Ⅰ北西隅に部分的にみられるもので、西辺が約1.5㎜、北辺が3㎜のびる。

通路状遺構（第4図）

通路状遺構には西側通路とした比較的大規模なものと平場Ⅰ、平場Ⅱに認められる小規模なものがある。

西側通路　調査区の西端で検出された。館の北麓から館内に通じていたと思われる通路であるがその北側はすでに国道改修工事によって削平されている。調査区内では北西方向から南東方向に直線的に登ってくる。ＡＲ－13･14区付近までは地山の岩盤を削平して通路としているが、それ以南は整地が行なわれている。第２門跡の時期には第２門跡以南は平場内通路としてさらにのびていたが、第１門跡の時期には第１門跡からのびる布掘り状遺構によって遮断され、第１門跡を経て平場内に通じるようになったと考えられる。

平場Ⅰ通路状遺構（第4図）

第１門跡に伴う通路状遺構が、門跡の南と平場Ⅰ北辺ほぼ中央とで検出された。南側のものは門から南進して西側通路に通じるもので、西側通路整地Ⅰ層上を通路面としている。北辺中央部のものは、布掘り状遺構の約２㎜内側の整地層Ⅰ層上面で検出された。上幅約2.5㎜、下幅約1.5㎜の浅い溝状となっており、長さ約10㎜ある。東・西両端は不明となっているが、本来は第１門跡から布掘り状遺構の内側に沿ってのびていたものと思われる。この北辺中央部の通路から無釉の瓷器系陶器の甕口縁や青銅製香炉などが出土している。

平場Ⅱ通路状遺構（第4図）

平場Ⅱの南西隅と西辺にみられる。南西隅のものは平場南端を下幅約２㎜、長さ約５㎜ にわたって開削したもので、西からゆるやかに登っている。溝によって画されているが西側通路から平場Ⅱに通じる通路と思われる。西辺のものは西辺に沿って幅約３㎜、長さ約８㎜ の段がゆるやかに昇りながら南東方向にのびるもので、北半は明確ではないが西側小平場に続くと思わ

れる。この通路状遺構の東辺に沿ってと南端、昇り切った平場Ⅱの部分でピットが数個検出されているが、施設になるかどうかは不明である。

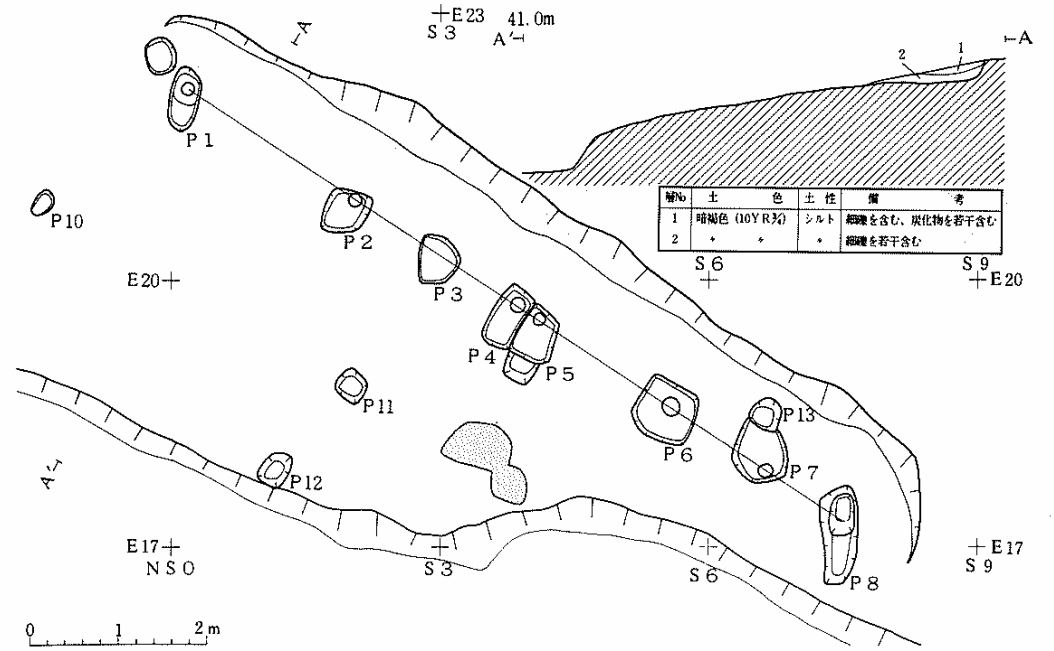
段状遺構

平場Ⅰの北辺近くと西辺で、ゆるやかな斜面に対して横に細長く、地山面を削り出した段状遺構が合計10基検出された。

この段状遺構には平場Ⅰ整地層が及ばない所で検出されたもの（第１～第３段状遺構）と整地層下の地山面で検出されたもの（第４～第10段状遺構）とがある。

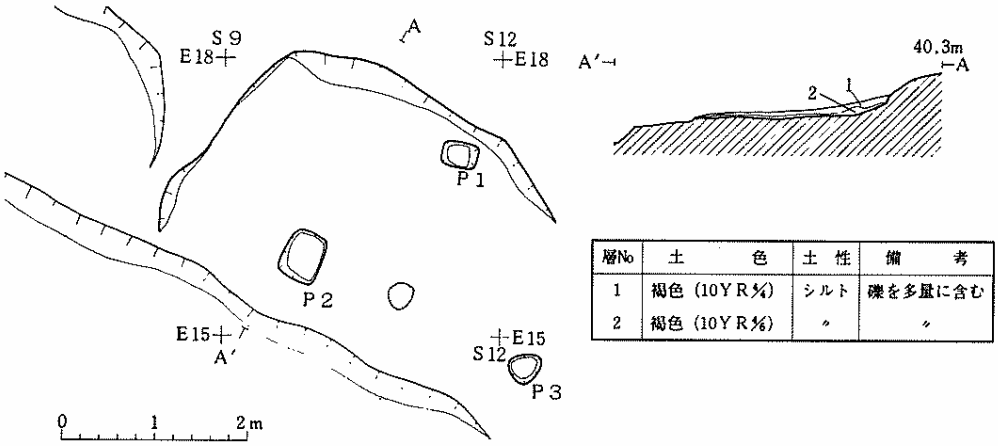
第１段状遺構（第18図）

AM～ＡＤ－18～21区で検出された。地山の岩盤を掘り込んでおり、南壁が約9.6m、西壁が約１m残るが、東壁はほとんどない。壁高は最も高い南壁で約50cmある。床面はほぼ平担で、ゆるやかに北に向って傾斜している。第４段状遺構と重複する北西部では積土を施して（整地Ⅰ層）床面としている（第21図)。この段状遺構は壁や床面などから東西約10.5m南北３m以上の規模をもつものと思われる。床面から計13個のピットと焼面１ヶ所が検出されている。ピットはP_1～P_8が南壁下端より0.9m離れて南壁に沿う形で並んでおり、P_3・P_8を除いては柱痕跡がみつかっている。これらは柱穴と考えられ、その間隔は東から2.25m＋1.2m＋0.9m＋0.3m＋1.8m＋1.2m＋1.05mとなっている。焼面は南壁から約2.5m離れた床面ほぼ中央に位置し、灰と焼土を伴い約１mの範囲で拡がっている。



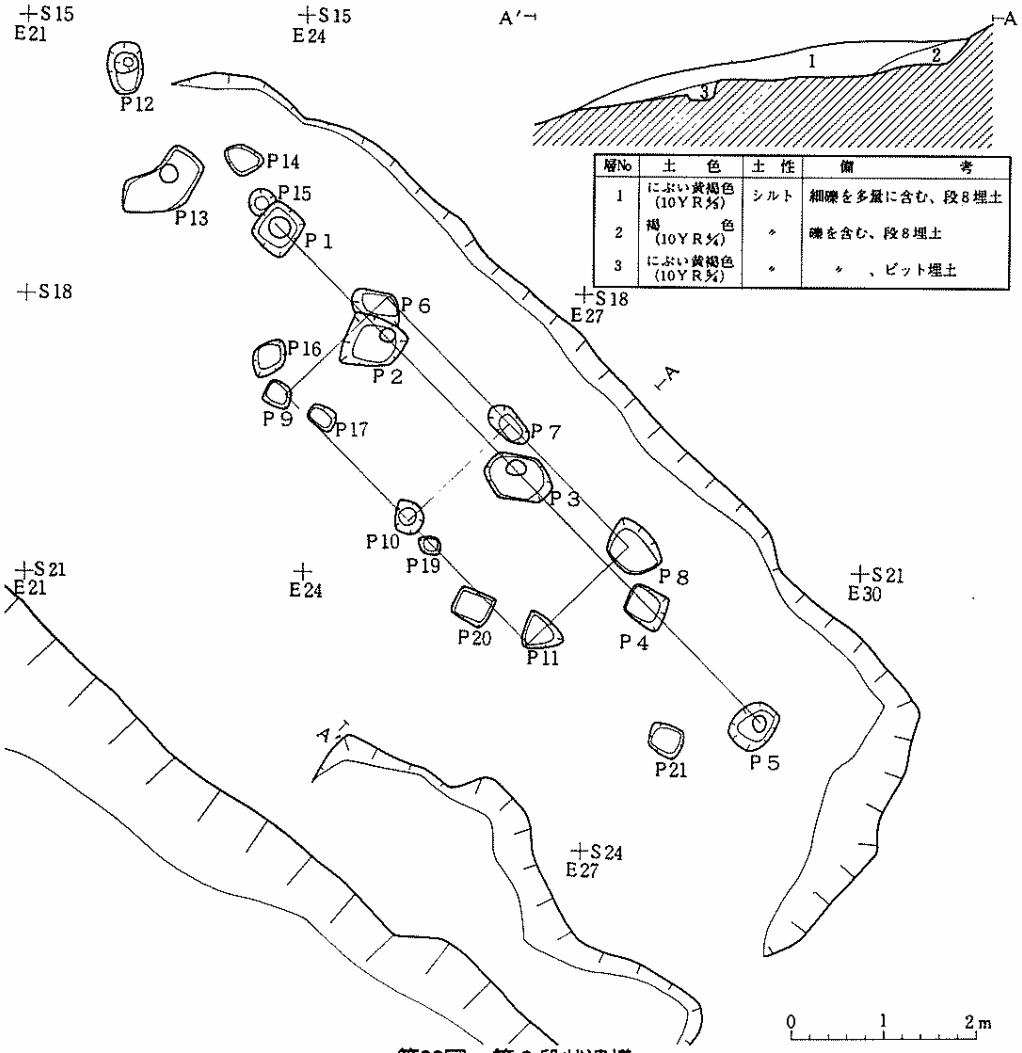
層No	土色	土性	備考
1	暗褐色（10YR3/4）	シルト	細礫を含む、炭化物を若干含む
2	〃	〃	細礫を若干含む

第18図　第１段状遺構



層No	土　　色	土 性	備　　考
1	褐色 (10YR5/4)	シルト	礫を多量に含む
2	褐色 (10YR5/6)	〃	〃

第19図　第２段状遺構



層No	土　色	土 性	備　　考
1	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	シルト	細礫を多量に含む、段８埋土
2	褐　色 (10YR5/4)	〃	礫を含む、段８埋土
3	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	〃	〃　、ピット埋土

第20図　第３段状遺構

第２段状遺構（第19図）

第１段状遺構に西接するＡＯ－16～18区で検出された。岩盤を掘り込んでおり、南壁が約3.3m、東壁が約2.5m残る。残存壁高は最も高い所で約30cmある。西壁や全体の規模は不明であるが、他の段状遺構に比して小規模のものと思われる。床面はほぼ平担で全体的に西側に傾斜している。床面上から３個のピット（P_1～P_3）と径約30cmの焼土ブロックが検出されている。

第３段状遺構（第20図）

平場Ｉの西辺、ＡＪ～AM－12～15区で検出された。地山の岩盤を削り出した東壁約10mと南壁約３mが残こるが北壁はあまり明瞭ではない。残存壁高は最も高い南東隅で約55cmある。床面はほぼ平担で西側にゆるやかに傾斜している。その範囲は東西約４mである。床面上から合計21個のピットが検出されている。このうちP_1、P_2、P_3、P_5、P_{13}からは直径15～20cmの柱痕跡がみつかっており、P_1～P_5は東壁から1.2m離れた所に一列に並ぶ。その間隅は東から1.65m＋1.95m＋2.1m＋1.8mとなっている。この他にP_6＋P_7＋P_8とP_9＋P_{10}＋P_{11}が梁間１間（1.5m）、桁行２間（3.9m）で組み合うが、他のピットの配置に規則性は認められない。堆積土は２層あり、この堆積土中から自磁碗２点、土師質陶器、刃子・鏃・石突・釘などの鉄製品が出土している。

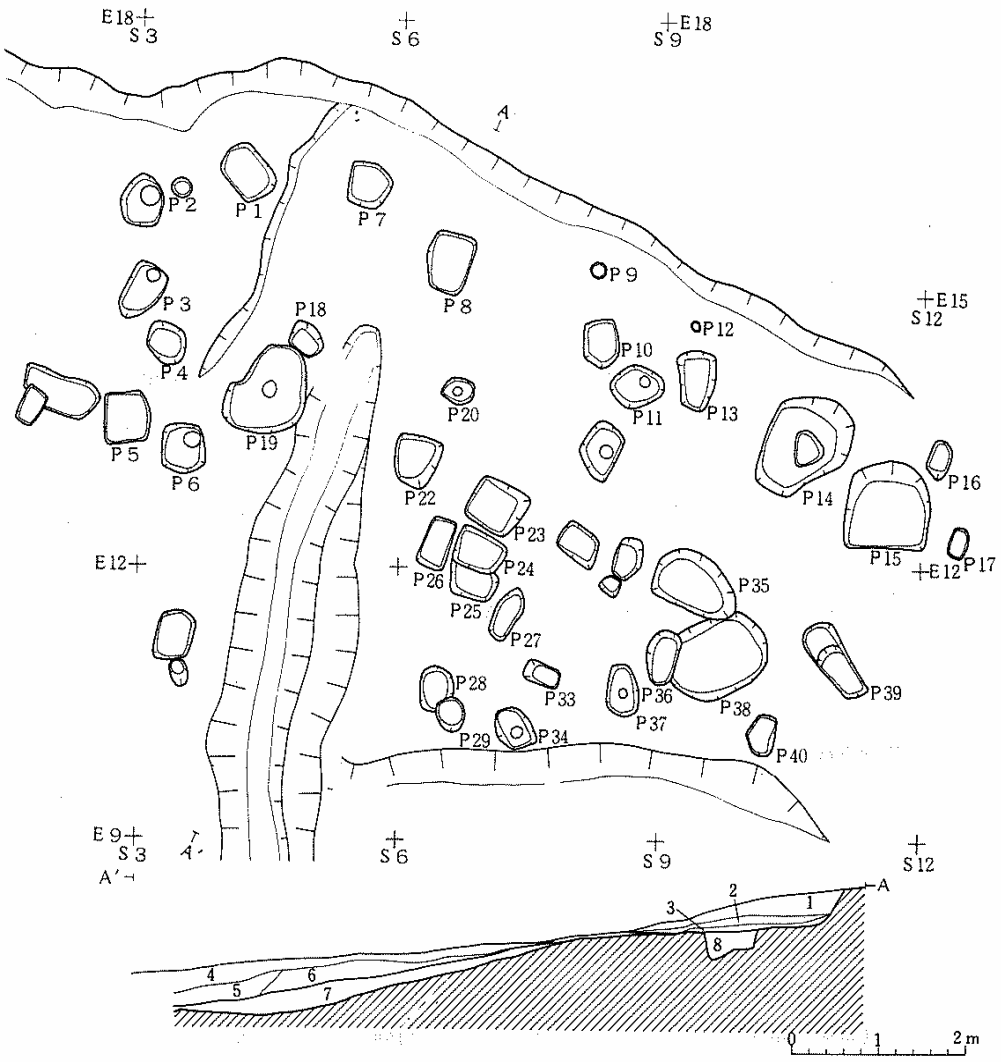
第４段状遺構（第21図）

第１・第２段状遺構に北接するＡＯ～ＡＱ－17～19区の整地Ｉ層下で検出された。南壁約８mが残り、約40cmの残存壁高をもつが、東壁は第５段状遺構と重複するため約50cmのびた所で不明となる。この東壁から1.2m西によった位置に高さ約10cmの段が南北方向に約35mのびるが、これが東壁である可能性もある。床南半は地山層の岩盤を床としているが北側は整地Ⅱ層を床としており、北にいくにしたがってその範囲は不明瞭となっている。

第４段状遺構の範囲と考えられる部分の床面上から計40個のピットが検出され、このうちP_3、P_6、P_{11}、P_{19}、P_{20}、P_{21}、P_{34}、P_{37}からは柱痕跡が発見されている。しかし、その位置関係に規則性はない。また、他のピット間にも規則性は認められなかった。P_{24}中から小札と洪武通宝が、P_{19}から開元通宝が出土している。

第５段状遺構（第22図）

第１段状遺構の北・第４段状遺構の東側ＡＮ～ＡＰ－19～22区の整地Ｉ層下で検出された。南壁約７mが残り、約35cmの壁高をもつが、東・西壁は検出できなかった。岩盤や地山層の黄褐色土を床面としているが、第９段状遺構と重複する部分では整地Ⅱ層を床面としている。床面はほぼ平担で北に向ってゆるやかに傾斜している。１枚認められる堆積土の上面は畑の畝となっており、層中には多量の炭化した植物種子が含まれている。古銭・鉄製品なども出土している。床面から合計31個のピットが検出され、このうちP_1、P_5、P_8、P_{14}、P_{22}、P_{24}、P_{27}

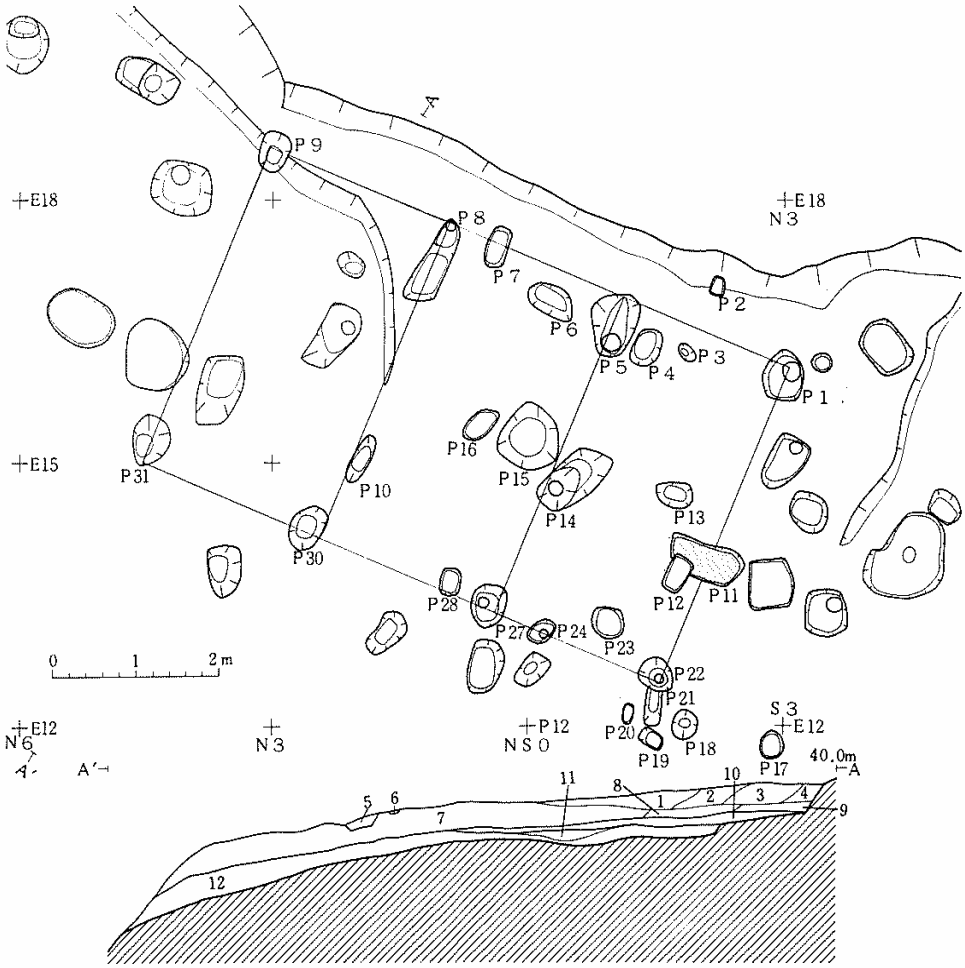


層 No	土	色	土 性	備 考
1	黄 褐	色 (10YR5/6)	シルト	角礫を多量に含む、整地Ⅰ層
2	褐	色 (10YR5/4)	〃	角礫・炭化物含む、畑
3	〃	(10YR5/6)	〃	角礫を多量に炭化物少量含む、畑
4	〃	〃〃	〃	〃 、整地Ⅰ層
5	〃	(10YR5/4)	〃	角礫を含む、整地Ⅱ層
6	〃	〃	〃	角礫を多量に含む、整地Ⅱ層
7	〃	〃	〃	小礫炭化物を含む、溝埋土
8	〃	〃	〃	小礫を含む、P8埋土

第21図　第4段状遺構

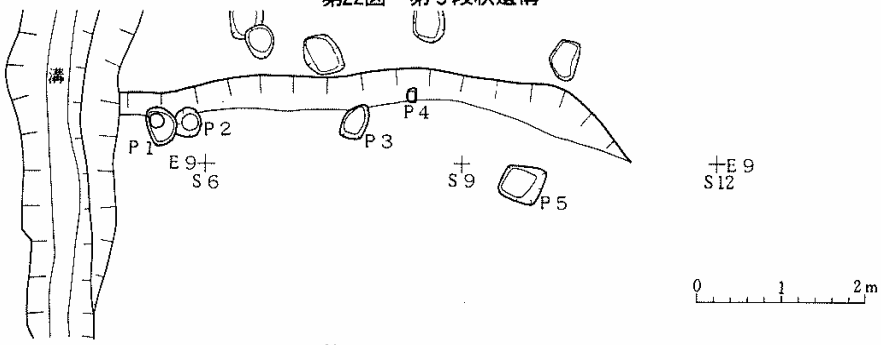
から柱痕跡が発見されている。これらの位置関係からP_1+P_5+P_8+P_9、P_{22}+P_{24}+P_{30}+P_{31}の組み合せが考えられ、桁行3間(6.6m)、梁間1間(3.9m)、の建物の可能性もある。P_{11}は堆積土に炭化物を多く含み、底面が焼けているピットである。この段状遺構の床面から灰釉の香炉破片が出土している。

第6段状遺構（第23図）

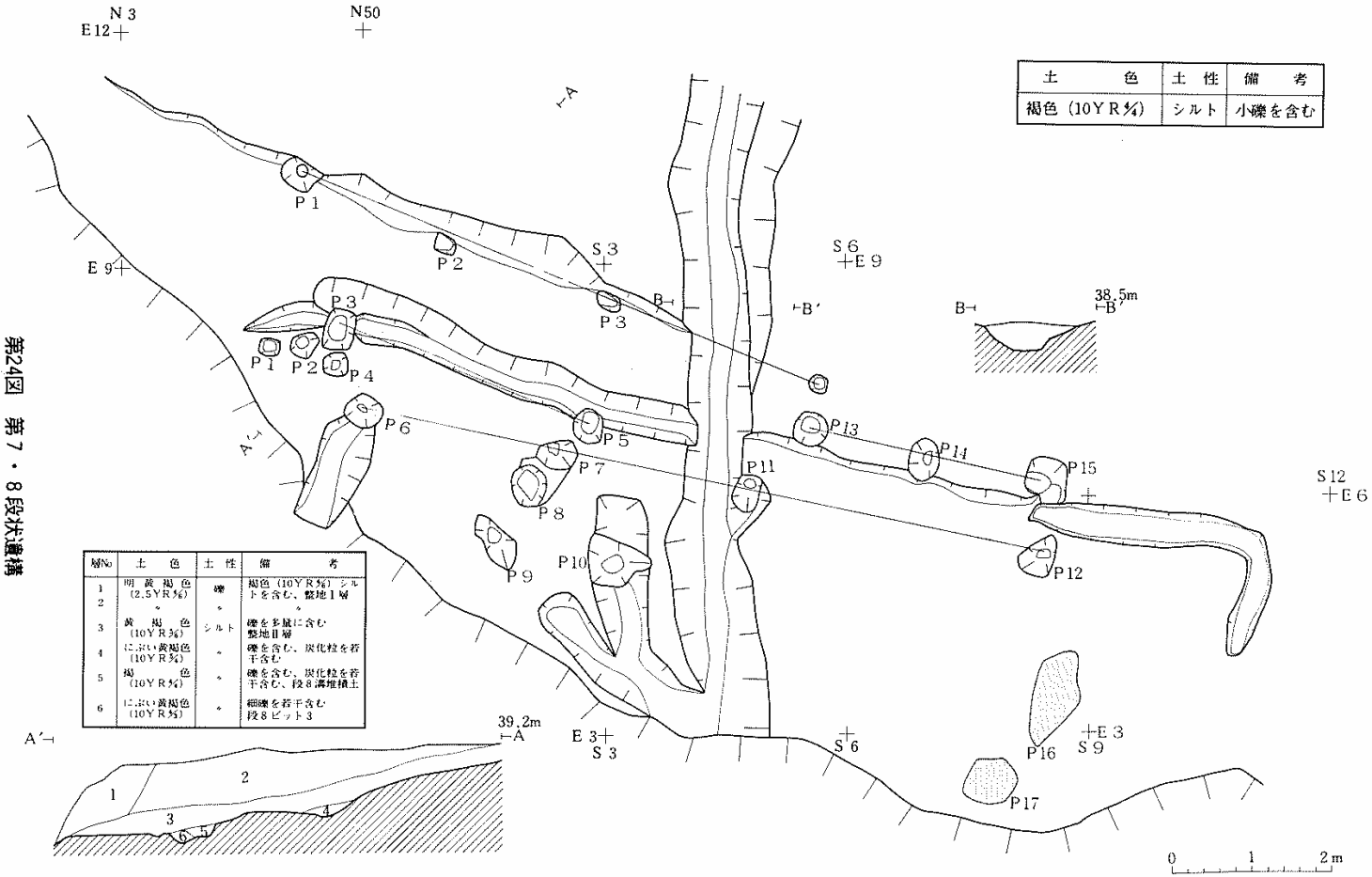


層No	土色	土性	備考
1	褐色 (10YR5/4)	シルト	細礫を多量に含む
2	〃 〃	〃	〃 炭化粒を若干含む
3	〃 〃	〃	〃 〃
4	〃 (10YR5/6)	〃	細礫を含む 〃
5	〃 (10YR5/6)	〃	角礫を多量に含む、布掘り状遺構埋土
6	暗褐色 (10YR3/3)	〃	小ピット埋土
7	明黄褐色 (2.5YR7/6)	礫	褐色 (10YR5/4) シルトを含む
8	〃 〃	〃	褐色 (10YR5/4) シルトを含む
9	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	細礫を多量に含む、炭化粒を含む
10	褐色 (10YR5/4)	〃	細礫と炭化粒を多量に含む、段5埋土（上面畑）
12	黒色 (10YR3/1)	〃	焼土を若干含む、段6埋土
11	黄褐色 (10YR5/6)	〃	礫を多量に含む、段6埋土、整地Ⅱ層

第22図　第５段状遺構



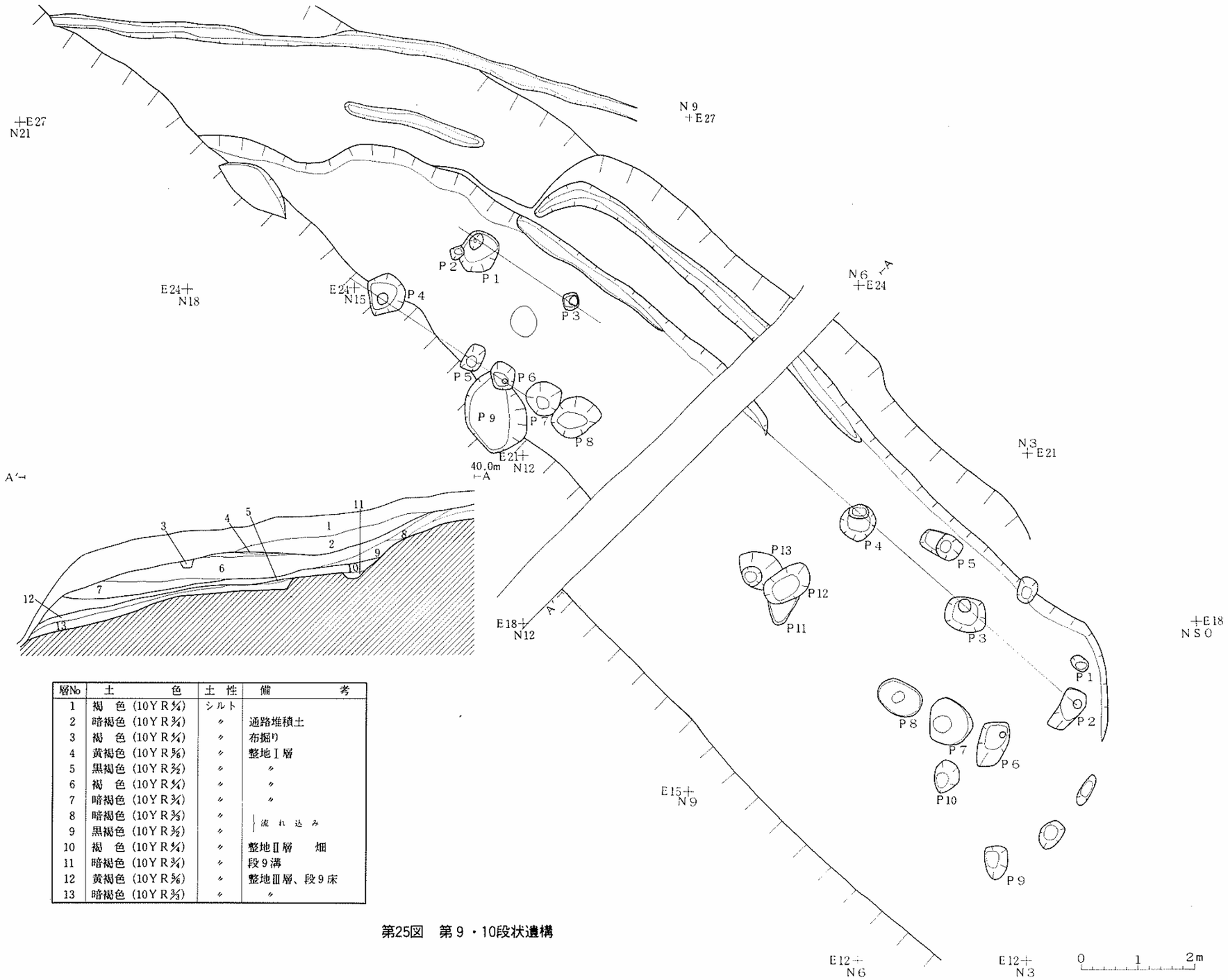
第23図　第６段状遺構



土色	土性	備考
褐色（10YR4/4）	シルト	小礫を含む

層No	土色	土性	備考
1	明黄褐色（2.5YR5/6）	礫	褐色（10YR5/4）シルトを含む、整地1層
2	〃	〃	〃
3	黄褐色（10YR5/6）	シルト	礫を多量に含む 整地II層
4	にぶい黄褐色（10YR5/4）	〃	礫を含む、炭化粒を若干含む
5	褐色（10YR5/4）	〃	礫を含む、炭化粒を若干含む、段8溝堆積土
6	にぶい黄褐色（10YR5/3）	〃	細礫を若干含む 段8ピット3

第24図　第7・8段状遺構



層No	土　　色	土 性	備　　考
1	褐　色（10YR4/4）	シルト	
2	暗褐色（10YR3/4）	〃	通路堆積土
3	褐　色（10YR4/4）	〃	布掘り
4	黄褐色（10YR5/6）	〃	整地Ⅰ層
5	黒褐色（10YR3/2）	〃	〃
6	褐　色（10YR4/4）	〃	〃
7	暗褐色（10YR3/4）	〃	〃
8	暗褐色（10YR3/3）	〃	流れ込み
9	黒褐色（10YR3/2）	〃	
10	褐　色（10YR4/4）	〃	整地Ⅱ層　畑
11	暗褐色（10YR3/4）	〃	段9溝
12	黄褐色（10YR5/6）	〃	整地Ⅲ層、段9床
13	暗褐色（10YR3/4）	〃	〃

第25図　第9・10段状遺構

第４段状遺構の北側、ＡＱ・ＡＲ－17～19 区で、整地Ⅱ層下の地山面（岩盤）で検出された。南壁約６㎜が残るが、東側は溝と重複しており、この溝の東側まではのびないと思われる。残存壁高は約 25㎝である。第２段状遺構と同様規模の小さいものである。床面はほぼ平担で、北西方向にやや強く傾斜している。床面から５個のピットが検出され、このうちP_1には柱痕跡がみられる。しかし、位置関係に規則性はない。

第７段状遺構（第24図）

第６段状遺構の北側ＡＱ～ＡＲ－19～22区で第８段状遺構に南接して整地Ⅱ層下の地山面(岩盤) で検出された。南壁約８㎜が残り、その西側は溝と重複し不明となる。壁の高さは最も高い所で約25㎝である。壁沿いにピットが３個並び（P_1－P_3)、溝をはさんだその延長線上にもピットが１個ある(P_4)。その間隔は東から2.1㎜＋2.1㎜＋2.85㎜である。

第８段状遺構（第24図）

第７段状遺構のすぐ北側のＡＲ～ＡＴ－17～21区で、整地Ⅱ層下の地山面（岩盤）で検出された。第４段状遺構付近から西北に直線状にのびる溝と重複するが、その新旧関係は不明である。溝東側の南壁は壁直下が幅約30㎝深さ約10㎝の溝となっており、この溝は約５㎜のびた所で北に約50㎝ほど曲がっている。溝西側の南壁は約6.6㎜のびるが、その立ち上がりは西にいくにしたがって不明瞭になる。約3.7㎜の所から溝を伴い、この溝は約2.9㎜のびた所で北に約1.5㎜ほど曲がってのびる。壁高は最も高い所で約25㎝である。この段状遺構の規模は東西約13㎜、南北４㎜以上と思われる。

床面はほぼ平担で、北西方向にゆるく傾斜している。南壁に接して３個のピットが、床面上からは14個のピットと３本の溝が検出されている。柱痕跡のみつかったピットはないが、その位置関係をみるとP_6、P_7、P_{11}、P_{12}は南壁に沿って並び、その間隔は東から2.55㎜－2.4㎜－3.9㎜となっている。P_{13}～P_{15}を結ぶ線もこの線に平行しており、その間隔は1.5㎜である。またP_3とP_5を結ぶ線は間隔が3.3㎜で第７段状遺構のピットを結ぶ線と平行となっている。P_{16}、P_{17}は堆積土に炭化物を多量に含んでおり、その壁や底面には火熱を受けた痕跡がある。P_{16}の堆積土中から鉄釘が３点出土している。溝にはP_6から北にのびる上幅約１㎜で、深さ約20㎝のものと縦断する溝に合流する幅約１㎜、深さ約15㎝のもの、幅約60㎝で深さ約15㎝のものの３本がある。

第９段状遺構（第25図）

第５段状遺構に東接してＡＬ～ＡＰ－21～24区の整地Ⅱ層下の黄褐色地山層で検出された。南壁と東・西壁の一部が残る。南壁は約13㎜あり、壁高は最も残りの良い所で約60㎝と高い。東壁は約1.5㎜、西壁は約２㎜検出された。南壁東半から東壁沿いに幅約30㎝、深さ約10㎝の溝が南壁ぎわで約6.8㎜、東壁ぎわで約１㎜の長さで周っている。床面はほぼ平担で、全体的に

北に向ってゆるく傾斜している。床面の大部分は地山面を床面としているが、第10段状遺構と重複する部分では整地III層上面を床面としている。床面から合計13個のピットが検出され、P_2、P_3、P_4、P_6から柱痕跡がみつかっている。このうちP_2～P_4は南壁にほぼ平行する線上に並び、その間隔は西から2.7m＋2.4mである。P_7、P_8、P_{10}は堆積土中に焼土、木炭を多量に含んでおり、P_7、P_9の底面は焼けている。P_7からは自磁小皿が、P_8からは政和通宝と咸平元宝が出土している。床面からは青磁・灰釉小皿・鉄製品・古銭などが出土している。この段状遺構の東側で検出された溝２本もこの遺構と関連する可能性がある。

第10段状遺構（第25図）

第９段状遺構と重複してＡＬ～ＡＮ－23～26 区で検出された。検出面は第９段状遺構の床面の地山面である。南壁は約4.5m東にのびた所で北に向って斜めに約1.5mのびる。この部分が東壁となる可能性がある。西壁は約20cm残るだけである。南壁中央部に幅約30cm、深さ約３cmの溝が長さ3.7mにわたってみられる。壁高は南壁で約20cmある。地山を床面としており、ほぼ平担で、北に向ってゆるく傾斜している。床面からは合計９個のピットが検出され、P_3から柱痕跡がみつかっている。このP_3とP_1を結ぶ線とP_4とP_6を結ぶ線は1.8mの間隔で平行しており、これらのピットは柱穴の可能性がある。P_7、P_8は堆積土に多量の木炭・焼土を含んでおり、P_3、P_6のほぼ中間の床面上に径約50cmの炭化物のブロックが認められる。P_8から洪武通宝が、床面から有孔石製品や鉄釘などが出土している。

竪穴状遺構

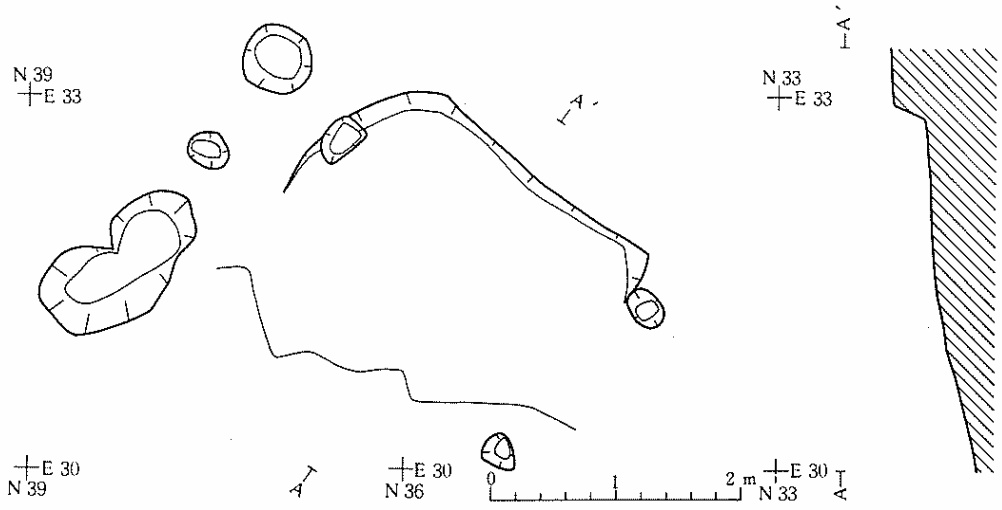
前述した段状遺構より規模が小さく、壁が全周もしくは三方に比較的良く残るものを竪穴状遺構とした。平場IIより２基検出されている。

第１竪穴状遺構（第26図）

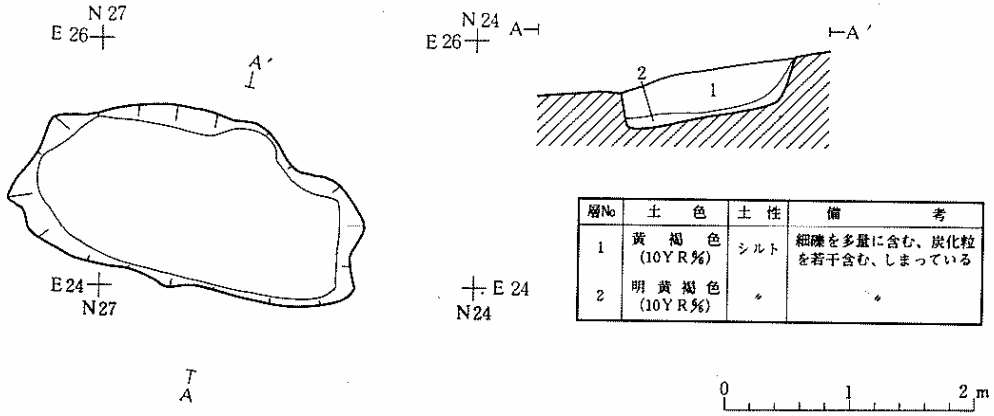
平場IIの最も高い部分から北西斜面にかけてのＡＴ－32・33 区に位置している。表土下の地山面（岩盤）で検出された。南壁約２m と東壁約1.5m、西壁0.5m が残る。壁高は最も高い南東隅で約25cm ある。床面はほぼ平担で、北に向ってわずかに傾斜している。平担な範囲は南壁から約２m 離れた所までである。床面から１個、周辺から２個のピットがみつかっているが、柱穴であるかどうか不明である。

第２竪穴状遺構（第27図）

第１竪穴状遺構の約10m 西、北西斜面のＡＫ・ＡＬ－19・20 区に位置しており、表土下の地山面(岩盤)で検出された。平面形は不整の長方形で、東西約2.7m、南北約1.5m ある。壁は全周し、最も高い南壁で約30cm ある。床面はほぼ平担であるが、北に傾斜している。堆積土は２層認められた。共に小礫を多く含み、しまりがある。１層は厚いが床面を覆うことはない。２層は南壁ぎわから床面を覆う層で、流入堆積土と思われる。



第26図　第１竪穴状遺構



層No	土　色	土 性	備　考
1	黄 褐 色 (10YR⅝)	シルト	細礫を多量に含む、炭化粒を若干含む、しまっている
2	明 黄 褐 色 (10YR⅝)	〃	〃

第27図　第２竪穴状遺構

土　壙

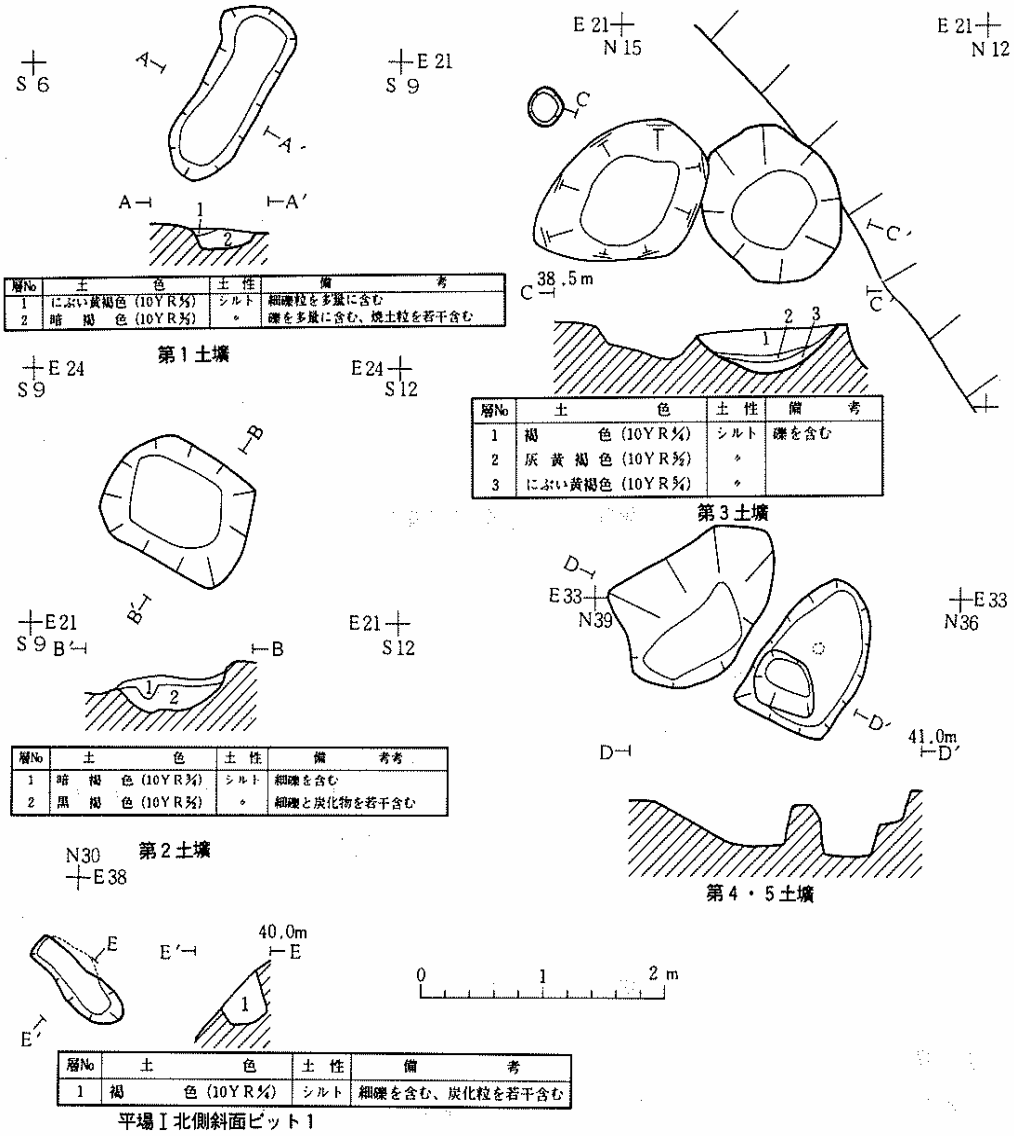
平場Ⅰで２基、平場Ⅱで３基、合計５基の土壙が検出された。

第1土壙（第28図）

平場ⅠのAM・AN－18区、第１段状遺構の南側で検出された。地山の岩盤を掘り込んでいる。南北約1.5m、東西約60cmの長楕円形で、深さは約15cmである。堆積土は２層あり、第２層には焼土粒が含まれている。

第2土壙（第28図）

平場Ⅰの第１段状遺構と第３段状遺構のほぼ中間、AM－17区の地山面(岩盤)で検出された。東西約1.2m、南北約１m、平面形は丸味をおびた長方形で、深さは30cmである。堆積土は２層ある。ほぼ水平の堆積状態で、第２層には炭化物を含んでいる。第２層から染付の小破片が出土している。



第1土壌

層No	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	シルト	細礫粒を多量に含む
2	暗褐色 (10YR3/3)	〃	礫を多量に含む、焼土粒を若干含む

第3土壌

層No	土色	土性	備考
1	褐色 (10YR4/4)	シルト	礫を含む
2	灰黄褐色 (10YR5/2)	〃	
3	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	〃	

第2土壌

層No	土色	土性	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	細礫を含む
2	黒褐色 (10YR3/2)	〃	細礫と炭化物を若干含む

第4・5土壌

平場Ⅰ北側斜面ピット1

層No	土色	土性	備考
1	褐色 (10YR4/4)	シルト	細礫を含む、炭化粒を若干含む

第28図　土壌・ピット

第3土壌（第28図）

平場Ⅱのほぼ中央、AN－26区の黄褐色地山層で検出された。平場Ⅱ溝の北側に位置しており、溝を切っている。平面形は長楕円形で東西総1.2m南北約1mである。北東の一部を根穴で欠いている。堆積層は3層あり、レンズ状の堆積状態を示している。

第4・第5土壌（第28図）

第1竪穴状遺構の約3m東側、AH・AL－33区の地山面(岩盤)で2つ並んで検出された。第4土壌は南北約1.2m、東西約80cm、平面形は一辺が強く丸味をおびた長方形で、深さ約30cmあ

る。底面北側に40×50㎝の楕円形ピットがあり、その深さは約30㎝である。第５土壙は南北約1.5㎜、東西約１㎜で平面形は不整形をしており、深さは約40㎝である。第４土壙の底面から元祐通宝１枚、洪武通宝３枚、永楽通宝２枚がまとまった状態で出土した。このうち、元祐通宝、洪武通宝、永楽通宝各１枚は銹着して出土した。

ピット群（第４図）

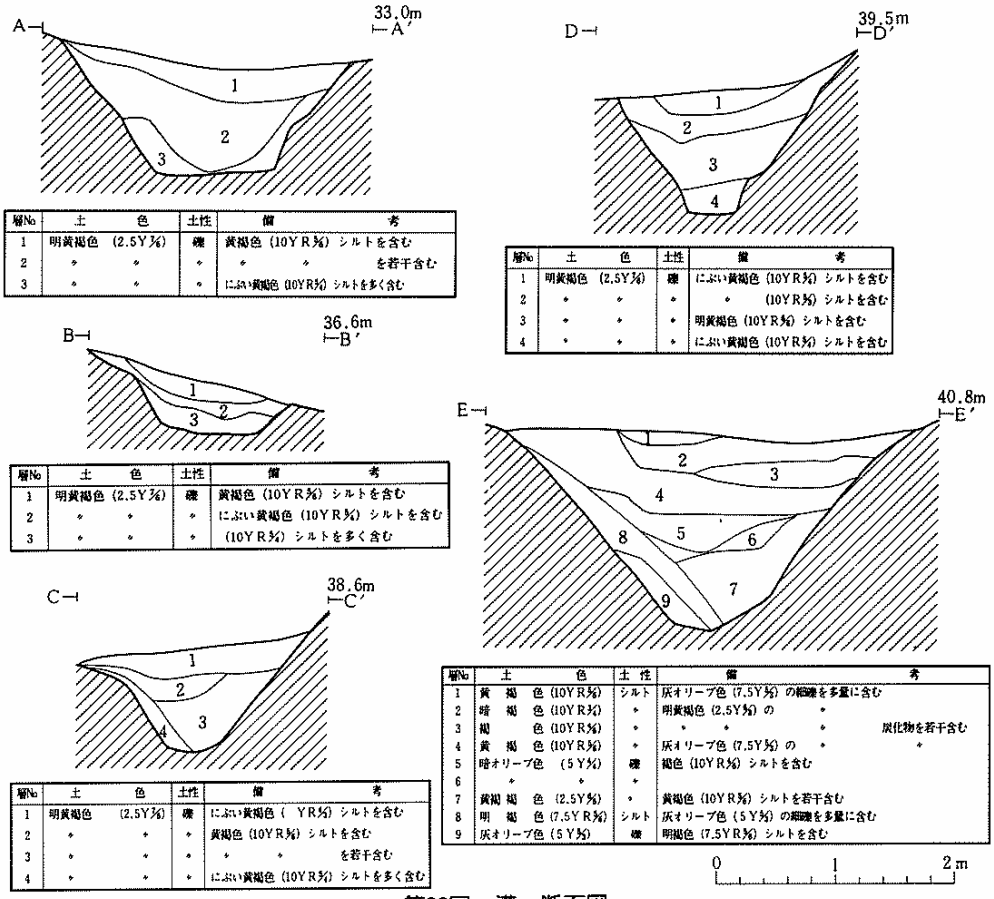
平場Ｉ、平場Ｉ北斜面などで、ピットが集中して検出されている。

平場Ｉピット群（第４図）

平場Ｉの調査区東端、ＡＴ・ＡＫ－18・19区の表土下の地山面(岩盤)で17個のピットが、同じくＡＩ－26～28区の表土下地山面で８個のピットが集中して検出されている。柱痕跡などをもつものはなく、その組み合せ関係などは不明である。

平場Ｉ北斜面ピット群（第４図・第28図）

平場Ｉの北斜面中腹、ＡＩ－31区からＡＰ－24区までの長さ33㎜の間に最小のもので幅約20



層No	土色	土性	備考
1	明黄褐色 (2.5Y⅗)	礫	黄褐色 (10YR⅗) シルトを含む
2	〃 〃	〃	〃 〃 を若干含む
3	〃 〃	〃	にぶい黄褐色 (10YR⅓) シルトを多く含む

層No	土色	土性	備考
1	明黄褐色 (2.5Y⅗)	礫	にぶい黄褐色 (10YR⅓) シルトを含む
2	〃 〃	〃	〃 (10YR⅓) シルトを含む
3	〃 〃	〃	明黄褐色 (10YR⅗) シルトを含む
4	〃 〃	〃	にぶい黄褐色 (10YR⅓) シルトを含む

層No	土色	土性	備考
1	明黄褐色 (2.5Y⅗)	礫	黄褐色 (10YR⅗) シルトを含む
2	〃 〃	〃	にぶい黄褐色 (10YR⅗) シルトを含む
3	〃 〃	〃	(10YR⅓) シルトを多く含む

層No	土色	土性	備考
1	明黄褐色 (2.5Y⅗)	礫	にぶい黄褐色 (YR⅓) シルトを含む
2	〃 〃	〃	黄褐色 (10YR⅗) シルトを含む
3	〃 〃	〃	〃 〃 を若干含む
4	〃 〃	〃	にぶい黄褐色 (10YR⅓) シルトを多く含む

層No	土色	土性	備考
1	黄褐色 (10YR⅗)	シルト	灰オリーブ色 (7.5Y⅓) の細礫を多量に含む
2	暗褐色 (10YR⅓)	〃	明黄褐色 (2.5Y⅗) の 〃
3	褐色 (10YR⅓)	〃	〃 〃 〃 炭化物を若干含む
4	黄褐色 (10YR⅗)	〃	灰オリーブ色 (7.5Y⅓) の 〃 〃
5	暗オリーブ色 (5Y⅓)	礫	褐色 (10YR⅓) シルトを含む
6	〃 〃	〃	
7	黄褐色 (2.5Y⅗)	〃	黄褐色 (10YR⅗) シルトを若干含む
8	明褐色 (7.5YR⅗)	シルト	灰オリーブ色 (5Y⅓) の細礫を多量に含む
9	灰オリーブ色 (5Y⅓)	礫	明褐色 (7.5YR⅗) シルトを含む

第29図　溝・断面図

㎝、長さ約40㎝、最大のもので幅約60㎝、長さ140㎝の斜面に対して横長のピットが12個並んで検出されている。このピットはほとんどが長さ１ｍ弱で、上方から掘り込まれており、最も深いもので約 30㎝ある。堆積土は褐色土１層で、少量の木炭が含まれている。平場Ⅱからみると高さ0.5～1.3ｍの所に位置して並んでおり、このピット群にはさらに西側に続いていた可能性もある。東側からピット番号を付したが、P_5から鉄釘が１点出土している。

溝

溝には平場Ⅰで検出された比較的小規模なものと平場Ⅱで検出された平場を区画する大規模なものとがある。

平場Ⅰ溝（第15図）

平場Ⅰの北西寄りＡＰ～ＡＳ－19区の整地Ⅱ層下で検出された。上幅80～150㎝、深さ20～35㎝で、Ａｂ－19 区から平場Ⅰ北斜面まで北西方向に直線的に約 12ｍ のびている。断面形は「Ｕ」字形に近いが底面はほぼ平担である。堆積土は１層で地山の小礫を含む褐色土である。第５・第７・第８段状と重複しているが、検出面は同じで、新旧関係は不明である。堆積土上層から灰釉陶器小皿が出土している。

平場Ⅱ溝（第４図・第29図）

平場Ⅰ北斜面下の平場Ⅱ南辺から平場Ⅱ西辺下を『 ￣l 』形に巡る溝で、南辺は65ｍ、西辺は26ｍ の長さをもつ。その東端と北端は調査区外にさらにのびている。上幅1.7～3.5ｍ 下幅0.6～1.4ｍ、深さ0.6～1.8ｍ で、断面形は逆台形となっている。南辺東端部約10ｍ は上幅・深さとも他の部分に比して大きく、底面もわずかに東側傾斜している。この部分より西では上幅は約２ｍ 前後とほぼ同じ幅で、底面も西に傾斜する。最も上幅の狭いのは南辺から西辺に移行する部分で、西辺南半は深さもあまりないが西辺北半にいくにしたがって上幅、深さともに大きくなる。堆積土は１～９層認められる。いずれも礫を多量に含んでおり、礫が層主体となる層もある。いずれも流入堆積状態を示している。堆積土中からは陶器、青磁香炉、白磁皿、染付碗・皿や石臼、石鉢、硯、鉄鏃や洪武通宝、鹿の角や骨などが出土している。表土からは寛永通宝２枚が出土している。

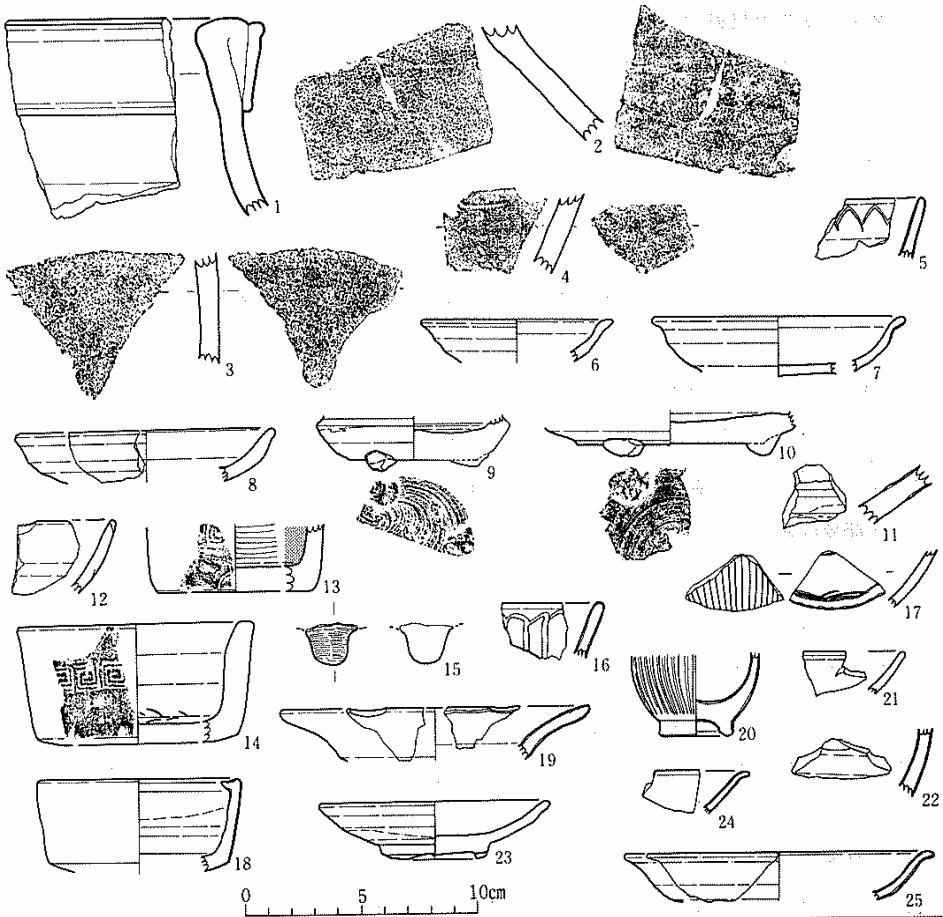
2）出土遺物

出土遺物には陶磁器、硯・石臼などの石製品、板碑、鉄鏃・釘などの鉄製品、古銭などの青銅製品や炭化した植物種子、角・骨などの自然遺物がある。

陶磁器

陶磁器には国内産の無釉の瓷器系陶器・施釉の瓷器系陶器と土師質陶器があり、磁器には中国産と思われる青磁・白磁・染付がある。

国内製陶器



番号	グリット	遺構	層位	種類	器形	部位	産地	時期	釉	備考
1	AN−22	通路		無釉陶器	甕	口縁〜体部	常滑	15c		
2	AN−11	西側通路	整地Ⅰ層	〃	〃	体部	〃	〃		1と同一個体
3	AO2222		整地Ⅱ層	〃	〃	〃	不明	不明		
4	AN−26	平場Ⅱ、溝	最下層	〃	〃	〃	〃	〃		
5	AK·AJ-10	西側通路	整地層	施釉陶器	碗	口縁部	美濃	16c	灰釉	
6	AL−24		整地Ⅱ層	〃	小皿	〃	〃	〃	〃	
7	AQ−19	平場Ⅰ溝	上面	〃	〃	口縁〜底部	〃	〃	〃	
8	AL−10		1	〃	〃	口縁〜体部	〃	〃	志野釉	貫入あり
9	AO−22	第5段上遺構	床	〃	香炉	体部〜底部	〃	15c	灰釉	
10	AP−15		1	〃	〃	底部	〃	?	〃	
11	AI−28		3	〃	深皿	体部	〃	?	〃	
12	AL−14	第3段状遺構		土器質陶器	碗	口縁部	不明			
13	AS−16		整地Ⅱ層	〃	香炉	体部〜底部		15〜16c		
14	AK−21	第1住	1	〃	〃	口縁〜底部		15〜16c		
15	AP−34		1	〃	〃	脚	〃	〃		
16	AI−9	西側通路	整地層	青磁	碗	口縁部	中国産	15〜16c		
17	AM−24		整地Ⅱ層	〃	〃	体部下半	〃	〃		
18	AM−27	平場Ⅱ、溝	2	〃	香炉	口縁〜底部	〃	〃		
19	X−X			〃	皿	口縁〜体部	〃	15c		貫入あり
20	AL−14	第3段状遺構	埋1	白磁	碗	体部〜底部	〃	15〜16c		
21	AP−15	布掘り状遺構		〃		口縁部	〃	〃		貫入あり
22	AK−13	第3段状遺構	埋1	〃	〃	体部	〃	〃		
23	AO−22	第9段状遺構P7	〃	〃	小皿	口縁〜底部	〃	15〜16c		
24	AH−32	平場	埋5	〃	〃	口縁〜体部	〃	16c		
25	AM−27	平場Ⅱ、溝	最下層	〃	皿	〃	〃	〃		

第30図　陶・磁器（1）

１．無釉の瓷器系陶器（第30図１～４）

１は甕の口縁部破片で、折り返しによる幅広い口縁帯がめぐっている。２～４は体部破片で２は１の口縁部と同一個体である。

２．施釉の瓷器系陶器（第30図５～11）

碗・小皿・香炉・深皿などの器種があるが、いずれも小破片である。

５は碗の口縁部破片で、蓮弁の先端が浅く線刻され、オリーブ黄色の灰釉が施されている。

６～８は小皿で、６・７は口縁端が外反する灰釉小皿である。８は釉が白濁し、貫入の入った志野小皿である。

９、10は香炉で、９は体部下半から底部にかけての、10は底部の破片である。いずれも底部外面に回転糸切り痕が残り、外周に瘤状の小さな脚がつく。９は袴腰の灰釉香炉と思われる。

11は深皿の体部下半の破片で、内・外面に灰釉が施されている。

３．土師質陶器（第30図12～15）

皿と香炉がある。

12は皿の口縁部破片である。ロクロ整形されたもので、口縁端が凹む部分もある。

13～14は香炉で、13は体部から底部にかけての、14は口縁部から底部にかけての破片である。焼成は軟質で、体部には刻印による雷文が並ぶ、13は体部下端に半円文が加えられ、内面はヘラミガキ・黒色処理されている。いずれも短い脚をもつと思われる。15は14の脚である可能性がある。

中国製陶磁器（第30図・31図）

青磁４点、白磁６点、染付６点、合計16点の磁器が出土している。

１．青磁（第30図16～19）

碗が２点、皿が１点、香炉が１点ある。

16は碗の口縁部、17は体部下半の破片で、ともに外面にくずれて平行線状になった蓮弁文をもつ。17の内面、みこみに近い所には刻線文がある。色調はオリーブ灰色である。

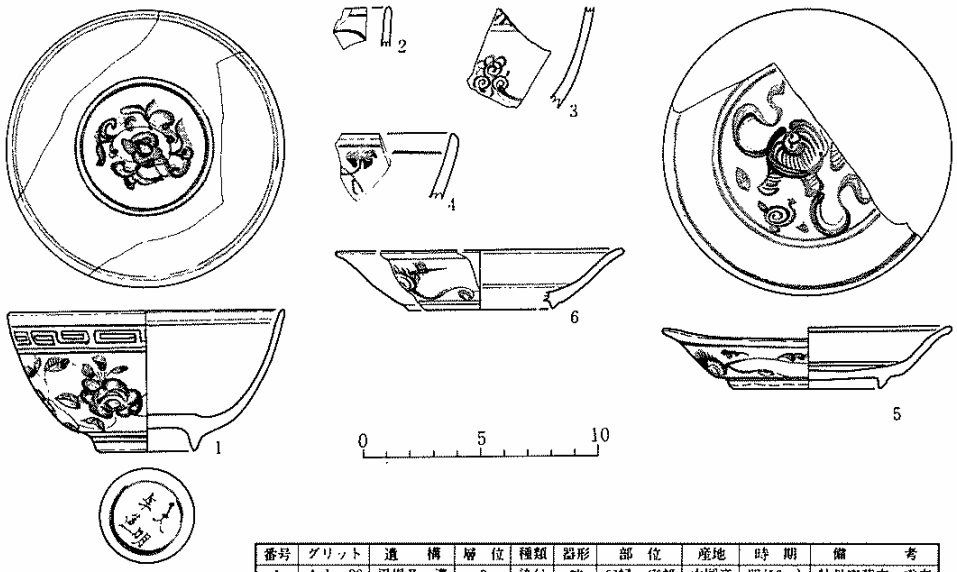
19は口縁が稜花となり、体部下端に段をもつ皿の破片である。内面の口縁下に２条の沈線がめぐっている。

18は口縁端部内側に折り、平担な口唇部をつくりだした香炉である。底部はわずかしかないが、短い脚をもつと思われる。釉は内面の体部下半から底部にかけては施されていない。

２．白磁（第30図20～25）

碗が３点、皿が３点ある。

20は口縁部を欠く碗で、外面に平行線化した蓮弁文をもつ。高台の畳付部は釉を削りおとしている。釉はやや青味をもつ。21は口縁部、22は体部破片で、21の釉は貫入の著しい白濁釉で



番号	グリット	遺　構	層　位	種類	器形	部　位	産地	時　期	備　考
1	ＡＪ－30	平場Ⅱ・溝	3	染付	碗	口縁～底部	中国産	明(16ｃ)	牡丹唐草文、雷文
2	ＡＪ－10	西側通路	整地層	〃	〃	口縁部	〃	〃（〃）	
3	ＡＲ－16		整地層	〃	〃	体　部	〃	〃（〃）	
4	ＡＭ－17	土　壙　2	2	〃	〃	口縁～体部	〃	〃（〃）	
5	ＡＭ－27	平場Ⅱ・溝	最下層	〃	皿	口縁～底部	〃	〃（〃）	牡丹唐草文、鄭子文
6	ＢＡ－15		1	〃	〃	〃	〃	〃（〃）	牡丹唐草文

第31図　陶・磁器（２）

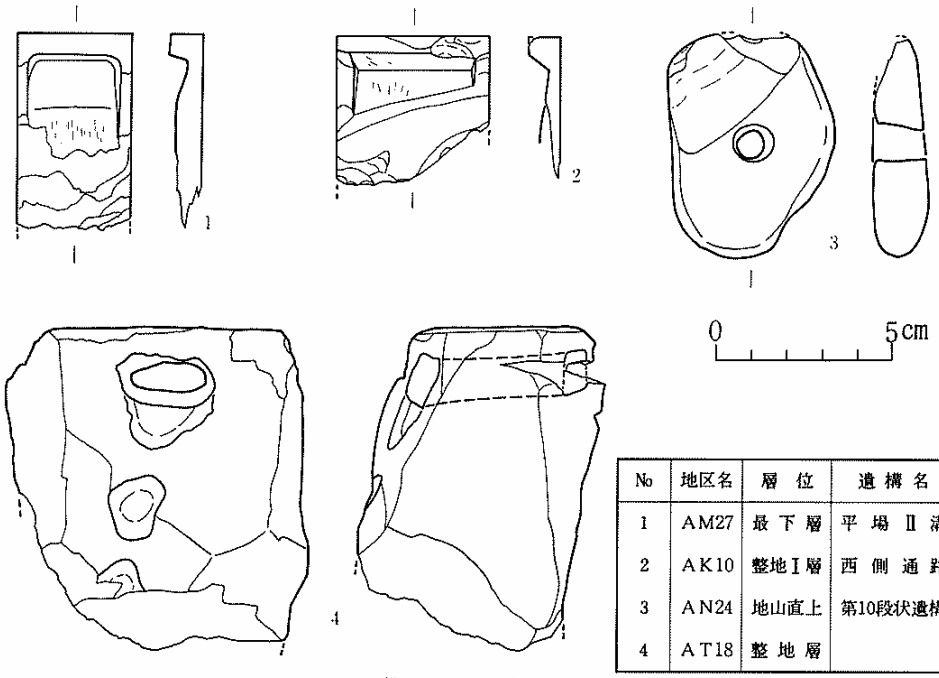
ある。22の釉も貫入が著しく褐色味をおびている。

23は高台付の浅い小皿で、胎土は磁器というより陶器質である。底部は削り出し高台で、しかも畳付部を４ヶ所浅く削りとった切り高台となっている。釉は内面と外面の上半に施され、下半から底部にはない。内面に重ね焼でついた目途跡があり、高台の削りとっていない部分にわずかに釉が附着しているので、この小皿は間にトチンなどを使用せず直接重ねて焼成したものと思われる。24・25は口縁端が外弯する皿で、24は口縁部小破片である。25は他の皿類より口縁径が大きいもので、器形は染付皿に類似すると考えられる。

３．染付（第31図１～６）

碗が４点、皿が２点ある。碗・皿ともに器形と全体の文様が推察できるものが各１点ある。

１は体部から口縁部にかけて内弯ぎみに立ち上がる碗で高台をもつ。高台の畳付部をのぞいてすべて釉が施されている。外面の口縁部に沿って雷文がめぐり、体部には４ヶ所に牡丹花を配し、それを葉のついた枝で連続するいわゆる牡丹唐草文が描かれている。体部下端から高台にかけて３条の線がめぐる。高台内面にも円を描き、その中に「大明年造」の文字を記している。内面の口縁には２条の線がめぐる。みこみには２条の線で円が描かれ、その内部に１個の牡丹花を中心に唐草文が描かれている。２・４は碗口縁部、３は体部の小破片である。いずれ



No	地区名	層位	遺構名
1	AM27	最下層	平場Ⅱ溝
2	AK10	整地Ⅰ層	西側通路
3	AN24	地山直上	第10段状遺構
4	AT18	整地層	

第32図　石製品

も外面には植物文の一部と思われる文様が描かれている。

５は体部がやや内弯し、口縁端で小さく外弯する皿で、低い高台をもつ。高台は外周の釉を削り落しているため、断面三角形となっている。高台外面を除いて全体に施釉されている。外面は体部上端に１条、下端に２条の線がめぐり、その間に花文様をいくつか配し、唐草文で連結している。牡丹唐草文のくずれた文様と思われる。内面は体部上端に１条の線がめぐる。みこみには２条の線で大きく円が猫かれ、その中にはくずれた形の獅子文が描かれている。釉はやや褐色味をおびている部分がある。６は５と同様の器形の皿で、外面文様も同一であるが、内面のみこみは欠損のため不明である。

石製品（第32・33図）

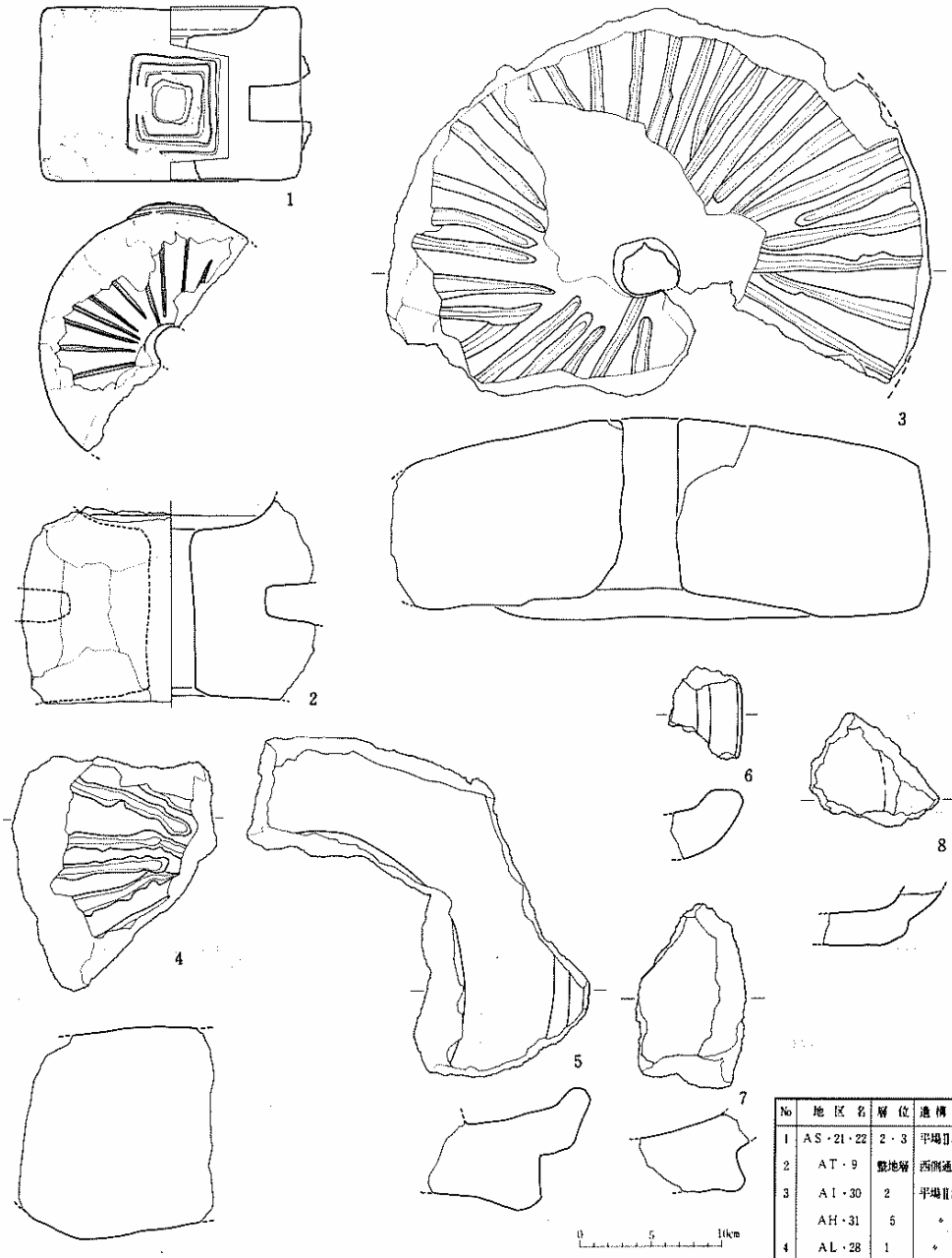
石製品には硯・有孔石製品、石臼、石鉢などがある。

硯（第32図１・２）

小形の硯が２点ある。ともに粘板岩製で、欠損しているが長方形のものと思われる。１の陸部はやや磨滅しなめらかである。２は海部の破片で、その左縁は欠損したのち再び加工された痕跡をもつ。

有孔石製品（第32図３・４）

２個ある。３は扁平な粘板岩の円礫の中央に径８～10㎜の孔があいている。この孔は人工の



No	地区名	層位	遺構名
1	AS・21・22	2・3	平場Ⅱ溝
2	AT・9	整地層	西側通路
3	AI・30	2	平場Ⅱ溝
	AH・31	5	〃
4	AL・28	1	〃
5	AS・21・22	2・3	〃
6	AS・17	整地層	平場Ⅰ
7	AR・28	1	平場Ⅱ
8	AK・28	1	平場Ⅱ溝

第33図　石製品

ものではなく、貝によってあけられた可能性がある。表面に若干の擦痕が認められるが、使用目的などは不明である。

４は泥岩の角礫の上端近い部分に楕円形の孔を両方向から貫通させたものである。孔は先の尖ったもので突きあけたもので、孔の周囲や側面に刺突痕が数多くみられる。また、孔の下にも同じ工具で突いた浅い凹みが２ヶ所ある。上部の平担面にも削った痕跡がある。ぶら下げて使用したものと思われるが用途などは不明である。

石臼（第33図１～７）

７点あるがいずれも破片である。材質は石英安山岩と思われる。

１・２は上臼で径はともに20㎝前後である。１は挽手孔の部分を３段の方形の段で装飾している。下面に細かい目が刻まれている。２は挽手孔が２個所にみられるが、装飾などは表面の剥落のため不明である。下面に目が刻まれておらず、内弯気味に滑らかになっている。３～７は下臼である。３は大形で径 40㎝ あり、上面にあらい目が刻まれており、周辺部には磨滅によって光沢をもつ部分がある。４も大形品の破片で、上面にあらい目が刻まれている。５～７は下臼の縁の部分である。５の臼部の径は約 22㎝ であったと推定できる。大形品の３・４は粉引臼の、小形品および縁を有する破片は茶引臼の可能性がある。

石鉢（第33図８）

体部下半から底部にかけての破片で材質は石臼と同様の石英安山岩と思われる。

板碑（第34・35図）

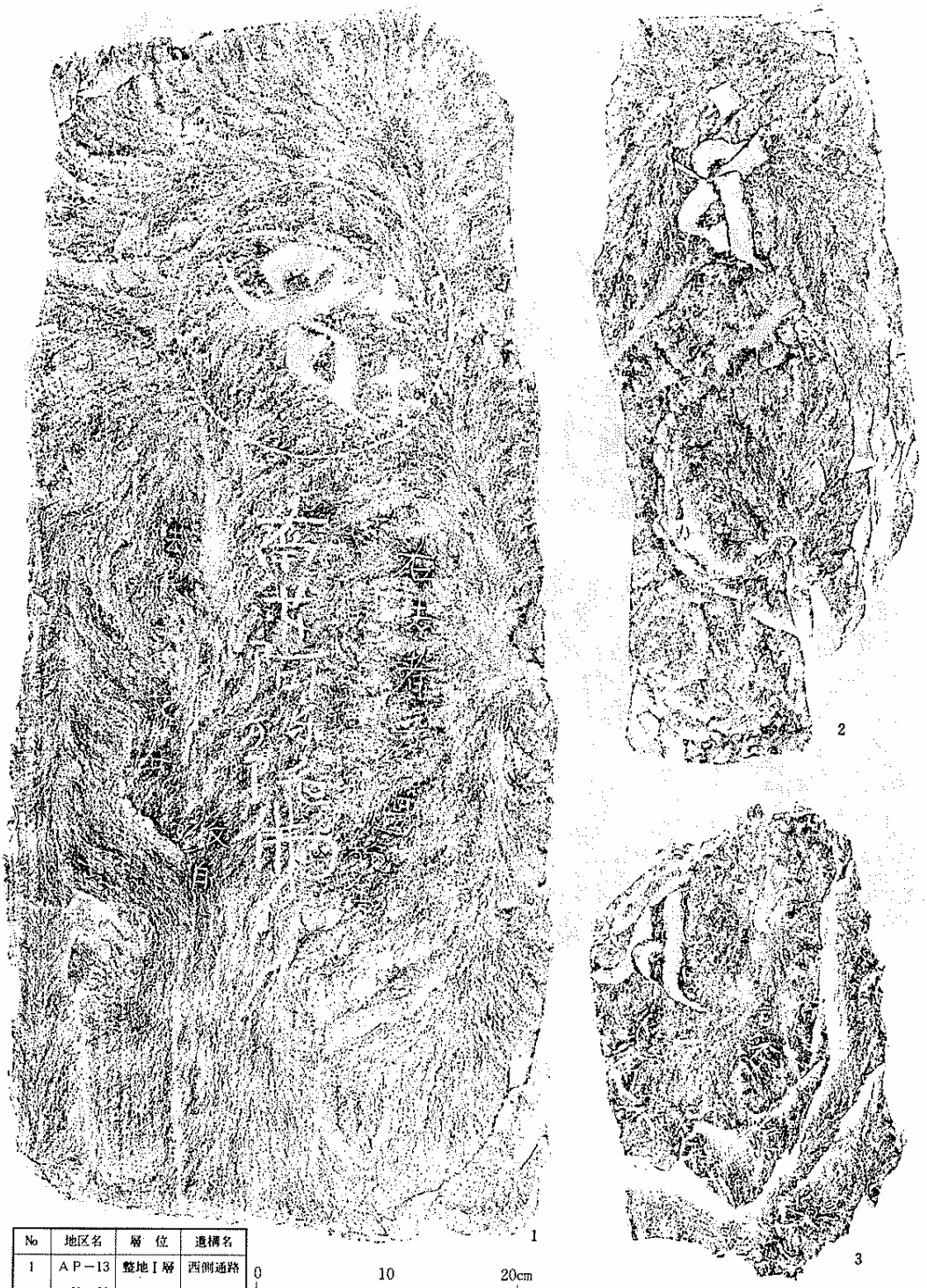
８点出土している。いずれも粘板岩製で、うち３点が完形品である。第 34 図３・第 35 図１・２・４・５はＡＴ・ＡＫ－27 区の整地層中から、集中して発見されたものである。

第34図１は、西側通路の整地Ｉ層中から発見された。完形品で碑面上方中央に線刻された１重の円相の中に仏種子「バク」(釈迦)が刻まれ、その下に「南無阿弥陀仏」の名号が縦位に配される。その両側に「右志者為過去玆悲父母　施主　敬白」の願文が記される。年紀銘・干支などはない。

第34図２は、ＡＫ－21 区の表土下で発見されたもので完形品と思われる。仏種子 「バン」(金剛界大日) だけが薬研彫りで刻まれており、種子の一部に金泥が残っている。

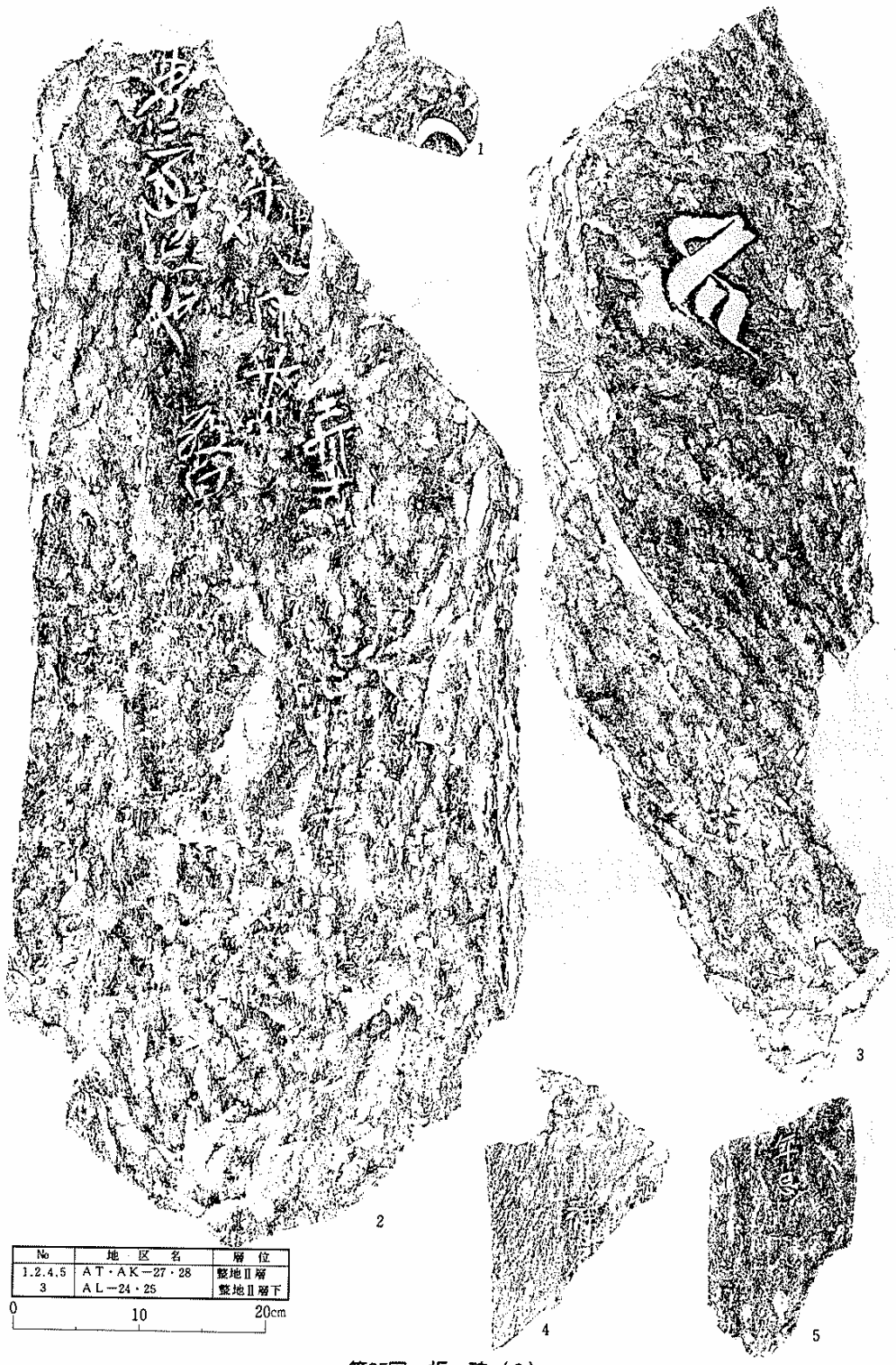
第34図３は、頭部と下半部、左側縁を欠くもので碑面の剥離も著しい。仏種子「サク」(観音)の下に「応永」の年紀名を中心に梵字状の文字が２行記されている。しかし、この梵字状のものは真言や陀羅尼、多尊種子のいずれにも該当しないとの御教示を柴田町在住の板碑研究者、加藤政久氏から得た。

第35図２は上半を欠くもので、仏種子などは不明であるが、年紀銘の下半の 「年甲戌八月廿日」と願文下半の「三年忌也　孝子　敬白」が記されている。



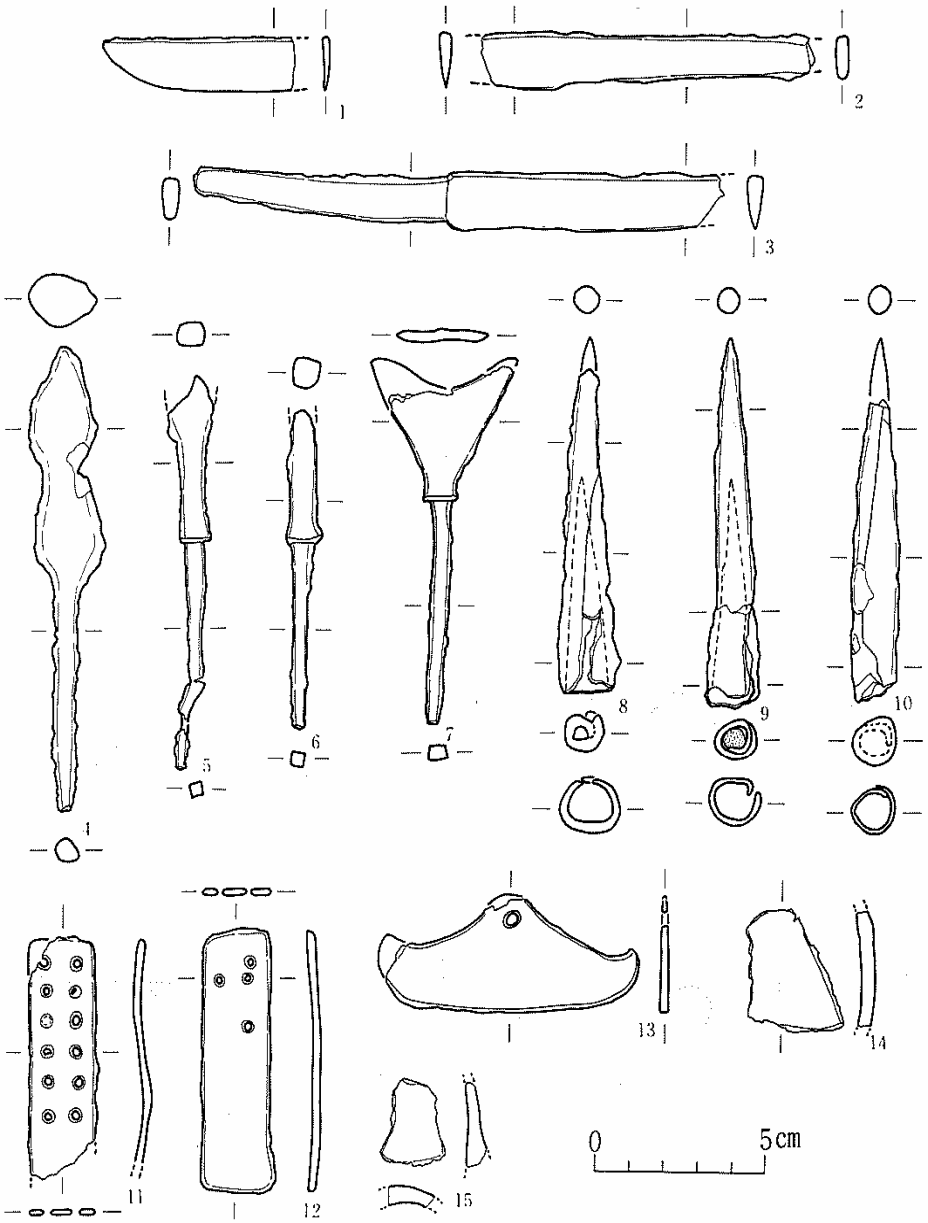
No	地区名	層　位	遺構名
1	ＡＰ－13	整地Ⅰ層	西側通路
2	ＡＫ－21	２層	
3	ＡＫ－28	整地Ⅱ層	

第34図　板　碑（1）



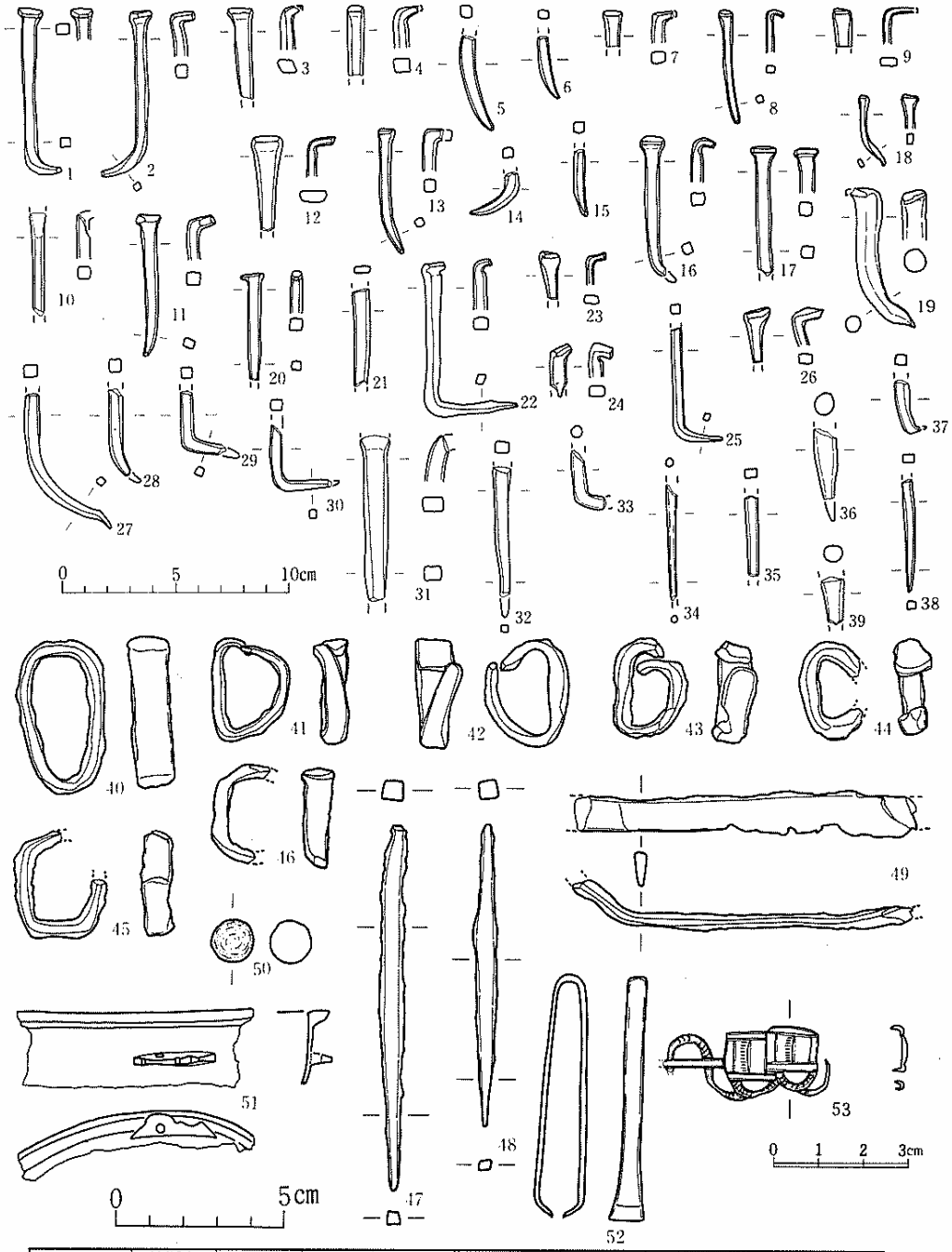
No	地　区　名	層　位
1.2.4.5	AT・AK－27・28	整地Ⅱ層
3	AL－24・25	整地Ⅱ層下

第35図　板　碑（2）



No	地区名	層　位	遺構名	No	地区名	層　位	遺　構　名
1	AL−14	1	第3段状遺構	9	AM−15	1	第3段状遺構
2	AN−21	整地Ⅰ層		10	AM−15	1	第3段状遺構
3	AM−27	3	平場Ⅱ溝	11	AP−18	1	第4段状遺構P24
4	AM−24	整地Ⅱ層		12	AR−16	整地層	
5	AG−33	x	平場Ⅱ溝	13	AJ−20	2	
6	AL−14	2	第3段状遺構	14	AO−22	整地Ⅰ層	
7	AI−10	整地層	西側通路	15	AO−21	整地Ⅱ層	
8	AN−24	整地Ⅱ層					

第36図　鉄製品



No	地区名	層位	遺構名	No	地区名	層位	遺構名
1～7	AS－18	整地Ⅱ層		18	AO－13	1	
8～10	AS－17	整地Ⅱ層		19	AO－24	整地Ⅱ層	
11	AT－17	整地Ⅱ層		20・21	AK－10	整地層	西側通路
12	AO－12	整地層		22～25	AS－18	1	第8段状遺構P16
13～15	AS－20	整地下		26～30	AS－19	整地Ⅱ層	
16	AL－26	整地Ⅱ層		31	AK－24	2	
17	AT－17	整地Ⅱ層		32・33	AR－18	整地Ⅱ層	

第37図　鉄製品

No	地区名	層　位	遺　構　名	No	地区名	層　位	遺　構　名
34		1	平場Ⅰ北斜面Pit5	45	ＡＯ－21	整地Ⅱ層	
35	ＡＭ－11	整 地 層		46	ＡＯ－22	整地Ⅰ層	
36・37	ＡＲ－21	整地Ⅱ層		47	ＡＯ－19	整地Ⅰ層	
38	ＡＱ－21	整 地 層		48	ＡＭ－15	1	第３段状遺構
39	ＡＭ－24	整地Ⅱ層		49	ＡＬ－25	整地Ⅱ層	
40	ＡＳ－18	1	第４段状遺構	50	ＡＫ－10	1	西側通路
41	ＡＰ－23	整地Ⅱ層	第９段状遺構	51	ＡＱ－19	整地Ⅰ層	平場Ⅰ通路
42	ＡＰ－17	整地Ⅰ層		52	ＡＱ－19	整地Ⅱ層	平場Ⅰ
43	ＡＳ－20	整地Ⅱ層		53	ＡＱ－19	整地Ⅱ層	
44	ＡＰ－17	床	第５段状遺構				

第35図３は、ＡＬ－24・25区の整地Ⅱ層下から検出されたもので完形品と思われる。碑面には仏種子「カ」（地蔵）だけが薬研彫りで刻まれている。

第35図１・４・５はいずれも小破片で、１には仏種子の一部が、４には「禅尼」と年紀銘の頭と思われる「永」の字が、５には「年忌」が刻まれている。

鉄製品（第36・37図）

鉄製品には刀子、鉄鏃、石突状鉄製品、小札、火打金、鉄鍋、釘などの武器・生活用品や用途不明のものがある。

刀子（第36図１～３）

３点あるがいずれも破片で、１は刀身の先端部分である。２・３は刀身から茎にかけての部分で２は刃関、３は両関である。ともに目釘穴はない。

鉄鏃（第36図４～７）

４は銹膨れが著しく、５は鏃身先端部を欠くが、平根式もしくは尖根式の鏃と思われる。６は鏃身部分を欠くが、５とほぼ同じ大きさである。７は雁又である。４点とも比較的大形である。

石突状鉄製品（第36図８～10）

３点ある。３点とも約10㎝と揃った長さを示し、最大直径1.5～1.8㎝ある。下端に盲孔をもち、基部で鉄板をあわせた状況がわかる。９の孔には木質部が残る。槍などの柄の端につけた石突もしくは鉄鏃の１種と思われる。目釘穴はない。

小札（第36図11・12）

鎧の小札である。２枚とも縦約７㎝、横約２㎝ほどの大きさである。11には小孔が二列に計12個みられる。12は小孔が４個しかないが銹のためつぶれている可能性がある。

火打金（第36図13）

１点ある。銀杏の葉の形をしたもので両端が上にのびる。中央の山形の上端に一孔がある。

鉄鍋（第36図14・15）

小さな破片が２点ある。口縁部はない。厚さ0.5㎝あり、銹化の状態から鋳造したものとみ

られる。不明のものとした37図49はあるいは鉄鍋の柄かもしれない。

鉄釘（第37図１～39）

鉄釘は出土点数が多い。破片が大部分であるが完形品近いものでみると長さ６㎝～10㎝である。断面は四角形で頭部を横に折り曲げてつくりだしている。真直ぐなものは少なく、「く」の字形に曲がっているものが多い。

鉄環（第37図40～46）

40は幅約１㎝で、平面形が卵形に近いものである。41～46は幅１㎝弱で、40に比してやや幅がせまい。41～43は半円形で両端がくいちがっている。44～46は欠けているが、45は平面が長方形に近いと思われる。40は刀の責金具の可能性がある。それ以外は巻きつけて使用したものと考えられる。

用途不明品（第37図47～50）

47・48は一端が鋭く尖がる棒状製品である。他端は欠損により全体の大きさは不明である。

49は幅約１㎝の細長い板状製品である。鉄鍋の柄となる可能性がある。50は直径約1.2㎝の鉄製の玉で、鉄砲の玉の可能性がある。

青銅製品（第37図51～53、第38図）

青銅製品は種類が少ない。香炉・毛抜き・目貫各１点に古銭が42枚ある。

香炉（第37図51）

口縁部の破片である。口縁径は約14㎝と推定される。口縁端部は外側に短く折れ、平担な口唇となっている。口縁の下には形式化した龍の形と思われる小さな耳が横位につく。耳には縦方向の小孔があけられている。

毛抜（第37図52）

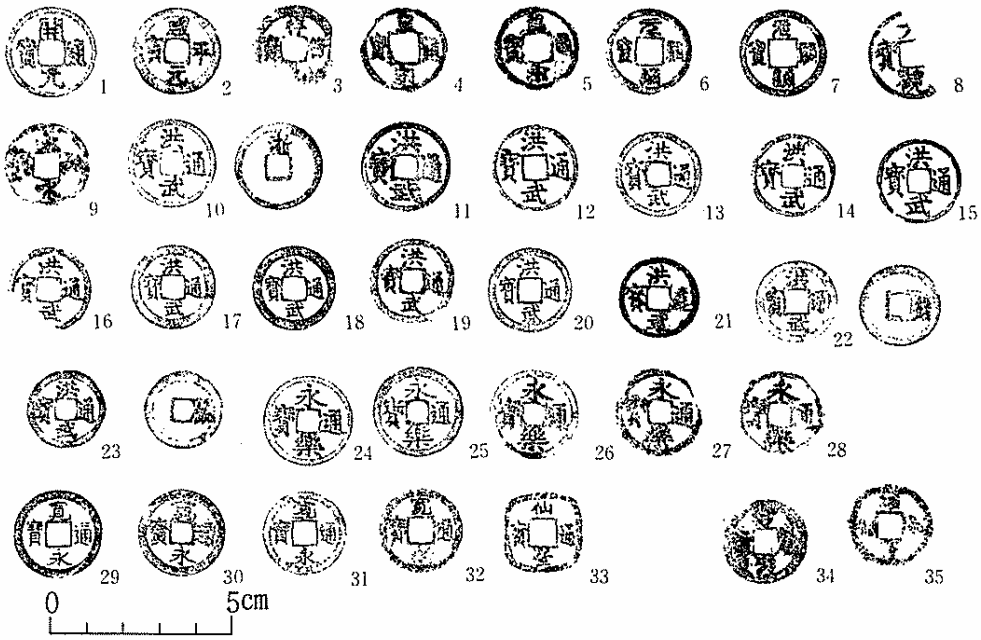
１枚の薄い板を折りまげてつくったもので、咬合部は幅広くなっている。整地Ⅰ層の上面で発見されたもので、新しい時期の可能性もある。

目貫（第37図53）

縦1.5㎝、横3.8㎝の大きさで一部欠損している。図柄は２枚の板状のものに１本の棒がつき、それに紐が絡んでいるのを表現している。方形の板状のものは周囲を縁どりし、上半に簾状の線刻がみられる。紐には刻目がつき撚りをあらわしている。図柄の内容は判然とはしないが、田畑を荒す鳥をおどかす「鳴子」を表現したものと思われる。製作は型で打出して形をつくり、さらに表面に若干の線刻を加えたものである。きわめて薄く表面に鍍金されている。刀の柄の目貫と考えられる。

	銭名	初鋳年代		
1	開元通宝	唐高祖	621	1
2	咸平元宝	宋真宗	998	1
3	祥符元宝	〃	1008	1
4	皇宋通宝	宋仁宗	1039	2
5	元豊通宝	宋神宗	1078	1
6	元祐通宝	宋哲宗	1086	2
7	大観通宝	宋徽宗	1107	1
8	政和通宝	〃	1111	1
9	洪武通宝	明太祖	1368	14
10	永楽通宝	明成祖	1408	5
11	寛永通宝	寛永３年（1626）		4
12	仙台通宝	天明４年（1784）		1
13	不明			8
計				42

古銭（第38図）



番号	出土地点・層位			銭名	枚数	図版番号	番号	出土地点・層位			銭名	枚数	図版番号
	地区名	層位	遺構名					地区名	層位	遺構名			
1	AI−9	1		寛永通宝	1	30	20	AL−23	整地Ⅱ層		元豊通宝	1	
2	AK−8	1		〃	1	31	21	AN−23	〃		永楽通宝	1	28
3	BD−20	1	平場Ⅱ	〃	1	29	22	〃	〃		皇宋通宝	1	5
4		1	平場Ⅱ、溝	〃	1	32	23	〃	〃		不　明	3	34
5	AQ 26	1	平場Ⅱ	仙台通宝	1	33	24	AR 18	〃		〃	1	35
6		1	平場Ⅰ	不　明	1		25	AT 20	〃		洪武通宝	1	21
7	AM 27	1	平場Ⅱ、溝	洪武通宝	1	14	26	AL−26	〃		永楽通宝	1	24
8	AH 23	2	平場Ⅱ、溝	〃	1	20	27	〃	〃		不　明	1	
9	AI−33	底　面	平場Ⅱ、土壙4	洪武通宝	3	11,13,16	28	AN 24	〃		洪武通宝(一銭)	1	23
10		〃	〃	永楽通宝	2	25・26	29	AQ 19	〃		永楽通宝	1	27
11		〃	〃	元祐通宝	1	6	30	AJ 18	〃		洪武通宝（浙）	1	10
12	AQ 28	整地層	平場Ⅱ	祥符元宝	1	3	31	AN 23		段 9	元祐通宝	1	7
13	AO 19	〃	平場Ⅰ	洪武通宝	1	19	32	〃		〃	不　明	1	
14	〃 〃	〃	〃	大観通宝	1	8	33	AM 24	1	段10、P8	洪武通宝	1	18
15	AO 20	4	〃	洪武通宝	1	12	34	AO 22		段9、P8	政和通宝	1	9
10	AN 11	整地層	西側通路	洪武通宝(一銭)	1	22	35	〃		〃 〃	咸平元宝	1	2
17	AN 20	〃	平場Ⅰ	洪武通宝	1	15	36	AO 19	1	段4、P19	開元通宝	1	1
18	AK 24	〃	〃	皇宋通宝	1	4	37	AQ 18	1	段4、P24	洪武通宝	1	17
19	AL 26	〃	〃	不　明	1								

第38図　古　銭

古銭は合計42枚出土している。銭名や出土地区、層位については一覧表に付してある。内訳をみると中国銭は唐銭１枚、北宋銭８枚、明銭19枚があり、最も枚数の多いのが洪武通宝14枚で、永楽通宝５枚がそれに次いでいる。日本銭は寛永通宝４枚と仙台通宝（鉄銭）１枚がある。日本銭は江戸時代のもので、出土層位は表土に近い部分に限られており、館跡の使用時のものではない。館跡に伴うのは唐銭・北宋銭・明銭などの中国銭である。

自然遺物

自然遺物には平場Ⅰ整地層Ⅰ層下の畑の面や整地Ⅱ層中から検出された植物種子と小量の動物遺体がある。植物種子については附章で触れているので、ここでは動物遺体について述べる。

動物遺体

平場Ⅱの溝と東側斜面のＢＡ－31区で少量の角・骨が出土している。いずれもシカである。

ＡＫ－28区溝２層：シカの角と骨が各１点ある。角は角座の一部が残る破片であるが、左右の別は不明である。骨は右脛骨の近位端の関節部に近い骨幹部破片である。

ＢＨ－21区溝２層：シカの右下顎骨が１点ある。M_3が残る下顎体と脱落したP_2、M_1とがある。

ＢＡ－31区－２層：シカの左上腕骨破片が１点ある。遠位端の関節部に近い部分である。

Ⅵ. 考　　察

１．中世以前の遺構と遺物

1）出土遺物の年代

中世以前の遺物としては第１・２号住居跡より出土した土師器・須恵器・赤焼土器・砥石・鉄製品などがある。

１．出土土器の特徴と年代

第１号住居跡から出土した土器には土師器坏５点、高台付坏３点、甕６点、羽釜、鉢各１点、須恵器坏１点、甕１点、赤焼土器坏１点が、第２号住居跡から出土した土器には土師器坏３点、甕２点、須恵器甕１点がある。これらの土器は第１号住居跡堆積土出土の土師器坏１点を除いては住居跡床面、周溝、貯蔵穴状ピット、カマド、煙道内などから出土しており、住居跡に伴う遺物で共伴関係にあると思われる。また、第２号住居跡出土土器は第１号住居跡出土土器に比して器種、数量ともに少ないが、土師器坏・甕の特徴は第１号住居跡のものと共通しており第２号住居跡が第１号住居跡の拡張前の住居跡であることを勘案すれば、第１号住居跡の共伴関係が本遺跡における器種の組み合せを示しているものと思われる。これら、出土土器の特徴をまとめると次のようになる。

１－第１住居跡から出土したロクロ不使用の甕１点を除いて土師器・須恵器・赤焼土器はすべて製作にロクロを使用している。

２－土師器坏・須恵器坏・赤焼土器坏はいずれも底部は回転糸切り技法で切り離されており、底部や体部外面に再調整が加えられるものは全くない。土師器坏の内面にはヘラミガキ・黒色処理が施されている。

３－土師器羽釜・鉢は内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。

１・２のような特徴をもつ土師器は東北地方南部における編年において、塩釜市表杉ノ入貝塚出土資料（加藤：1954）を標式として設定された表杉ノ入式（氏家：1957）に比定することができる。また、これらの土師器と共伴関係をもつロクロ使用の土師器羽釜・鉢、須恵器坏・

甕、赤焼土器坏、ロクロ不使用の土師器甕についても同時期と考えられる。

２．出土土器に関する問題点

本遺跡の住居跡から出土した土器は、いずれも表杉ノ入式に比定することができた。そして本遺跡においては底部が回転糸切りで切り離され再調整をもたない土師器坏と土師器高台付坏・甕・羽釜・鉢、須恵器坏・甕、赤焼土器坏が共伴関係をもっていることが知られた。本遺跡の土器群と最近報告例の増えてきた表杉ノ入式期の集落での土器のあり方とを比較検討して、その問題点について考えてみたい。

底部が回転糸切りで切り離され、再調整をもたない回転糸切り無調整の土師器坏と須恵器、赤焼土器坏とが共伴する例は古川市藤屋敷遺跡第13号住居跡（加藤：1980)、仙台市安久東遺跡第２号住居跡（土岐山：1980）に認められるがその数は少ない。安久東遺跡第２号住居跡出土土器は伴出した灰釉陶器埦の年代から11世紀に位置づけられている。しかし、この灰釉陶器埦に器形、施釉方法等が類似するとされる折戸53号窯式期の年代はその後10世紀後半に変更されており（樁崎・斎藤：1983)、安久東遺跡第２号住居跡出土土器の年代は10世紀後半以降と考えられる。この安久東遺跡第２号住居跡ではロクロ使用の土師器甕が共伴しているが本遺跡で共伴するロクロ不使用の土師器甕、内面ヘラミガキ、黒色処理されるロクロ使用の土師器羽釜、鉢などは出土していない。内面がヘラミガキ、黒色処理されるロクロ使用の鉢は同じような器形・調整をもつ類例は今の所わかっていないが、築館町佐内屋敷遺跡第５号住居跡にロクロ不使用の鉢が回転糸切り無調整の土師器坏、赤焼土器と共伴して１点出土している（森：1983)。第５号住居跡出土土器は佐内屋敷遺跡第２～第４段階の第３段階の土器群とされ、第２段階以降の土器群は９世紀中葉以降の年代が考えられている。

以上のことから本遺跡の土器群は安久東遺跡第２号住居跡出土土器より古い要素をもち、佐内屋敷遺跡第５号住居跡出土土器に対応すると考えられる。佐内屋敷遺跡第３段階の土器群は第２段階の土器群より後出するものとされており、本遺跡の土器群は明確ではないが10世紀前半を中心とする年代に位置づけられると思われる。

土師器羽釜は県内での類例は少ない、七ヶ宿町小梁川遺跡（新庄屋：1982)、仙台市安久東遺跡、山口遺跡に各１例、中田畑中遺跡に２例ある（青沼・長島：1983)。本遺跡の羽釜が外面にロクロ調整と手持ちヘラケズリが、内面から外面鍔上面までヘラミガキ・黒色処理が施されるのに対して、いずれも内外共ロクロ調整されており、形態的にも若干異なっている。共伴関係をみると小梁川遺跡第10号住居跡では手持ちヘラケズリの再調整をもつ回転糸切り土師器坏、回転糸切り無調整と回転ヘラ切り無調整の須恵器坏と共伴している。中田畑中遺跡の１例は第１号住居跡床面から回転糸切りで無調整や再調整をもつ土師器坏、回転糸切り無調整の須恵器坏などと共伴して出土したものである。中田畑中遺跡では羽釜を伴った土器群を10世紀前後に

位置付けており、小梁川遺跡はまだ報告書が刊行されていないが中田畑遺跡と同時期かそれに先行する時期と考えられる。本遺跡の羽釜は形態的、技法的にこれらのものより古い可能性もあるが、前述した土師器坏の特徴や年代と矛盾する点もあり、今後の類例の増加に待ちたい。

３．その他の遺物の年代

土器以外の遺物としては軽石製の砥石、鋤先・刀子がある。砥石、鋤先は床面から、刀子は貯蔵穴状ピットから出土したもので、表杉ノ入式とされた土器群と共伴しており、表杉ノ入式期のものと考えられる。平安時代（表杉ノ入式期）の鋤先の例としては豊里町沼崎山遺跡第 15 号住居跡（遊佐：1980)、名取市清水遺跡第７号住居跡、第18 号住居跡（丹羽、小野寺、阿部：1981）などから出土している。

2）遺構の年代と特徴

２軒の竪穴住居跡が検出された。第１号住居跡は第２号住居跡を南壁で 0.6㎜、東壁で 0.5㎜、西壁で 1.2㎜ 拡張し、第２号住居跡部分には貼床を施して構築されていた。この竪穴住居跡の年代は出土遺物から平安時代（表杉ノ入式期）と考えられ、第２号住居跡と第１号住居跡の間にはあまり時間差をもたないことが知られた。本遺跡周辺で平安時代の住居跡が調査されているのは豊里町長根浦貝塚(平・志間・白鳥、太田：1974)、沼崎山遺跡、津山町平形遺跡(千葉：1981) などである。これらの住居跡の平面形が方形を基調とすることや規模など本遺跡のものに類似しているが、特に平形遺跡と本遺跡は距離も 400㎜ しか離れていないこともあり、共通点が多い。平形遺跡では長根浦貝塚や沼崎山遺跡のカマド燃焼部が粘土で構築されるのに対して角礫と粘土で構築されている。本遺跡の第２号住居跡カマド燃焼部も角礫と粘土で構築され、煙道部天井部にも角礫が使用されている。第１号住居跡カマドの側壁は残っていなかったが、カマド左脇に角礫が集積されており、この角礫が側壁の構築に使用されていた可能性は強い。

次に第１号住居跡堆積土１層の上面に認められた灰白色火山灰のブロックについて触れておく。この灰白色火山灰は沼崎山遺跡住居跡堆積土から採集された資料も含めて東北大学農学部で分析、検討され、宮城県北西部の活火山を噴出源とする火山灰で、宮城県北部を中心に広く分布しており、その降下年代は古川市蓑口沼のこの火山灰直下の泥炭のＣ14 年代からＡＤ800 年以降とされている（庄子、山田：1979)。さらに、陸奥国分寺七重塔焼失年代との関係から 10 世紀前半頃の年代を与える見解が出されている（白鳥：1980)。本遺跡で確認された灰白色火山灰のブロックもこの火山灰と同一のものと思われる。平形遺跡住居跡堆積土にもこの火山灰は認められることから津山町付近がその分布の東限になるものと思われる。

２．中世以降の遺構と遺物

1）出土遺物の年代

中世以降の遺物には陶磁器、硯・石臼などの石製品、板碑、刀子、鉄鏃などの鉄製品、古銭などの青銅製品などがある。それらの特徴などについては前章ですでに述べた。ここでは陶磁器、板碑などについてその年代を検討する。

陶磁器

陶磁器には国内産の無釉の瓷器系陶器、施釉の瓷器系陶器、土師質陶器と中国産の青磁・白磁・染付とがある。

国内産の無釉の瓷器系陶器には甕口縁部破片１点と体部破片３点がある。体部破片１点は口縁部破片と同一個体である。口縁部破片には折り返しによる幅広い口縁帯がめぐっており、このような口縁形態をもつ甕は常滑産の甕に類例を求めることができる。そして常滑編年図（赤羽一郎：1977）によれば、このような特徴の甕は第５段階とされており、年代は15 世紀後半～16 世紀前半とされている。他の体部破片は小破片でもあり、産地、年代は不明である。

国内産の施釉の瓷器系陶器には碗・小皿・香炉・深皿など７点がある。志野小皿が１点で、他は灰釉が施されている。いずれも瀬戸・美濃地方の産と思われる。碗には退化した蓮弁が浅く線刻されており、小皿は口縁が外反する器形である。同様の碗・小皿は一乗谷朝倉氏遺跡などで出土している。香炉のうち小形のものは袴腰香炉で、瀬戸窯出土遺物編年図で古瀬戸後期に位置付けられているものに類似している（瀬戸市史編纂委員会：1981)。年代は15 世紀中葉とされている。その他の灰釉は年代不明であるが、志野小皿は16 世紀後半以降と考えられる。

土師質陶器には皿と香炉がある。産地・年代などは不明であるが、大和町八谷館、御所館跡などで出土しており、中世のものと思われる。

青磁には碗・皿・香炉がある。碗はくずれて平行線状になった蓮弁文をもつ。このような碗は山梨県八代郡一宮町新巻本村出土のものなどに類例があり、15 世紀～16 世紀のものとされている（東京国立博物館：1978)。皿は小被片であるが稜花皿で、熊本県城南町から出土し、15 世紀初めから16 世紀中葉まで製作使用されたものに類似すると思われる（亀井：1981)。

白磁には碗と小皿がある。碗には青磁同様平行線化した蓮弁文をもつものがあり、15 世紀～16 世紀のものと思われる。小皿は削り出し高台の畳付部を４ヶ所削りとった切り高台となっている。釉は内面と外面上半に施され、内面に重ね焼きによる目途跡をもつ。この小皿は多くの遺跡から出土し、従来は16 世紀のものと考えられていた（東京国立博物館：1978)。近年、青森県尻八館調査報告書などで14～15 世紀の年代が与えられている。口縁端が外弯する皿は同じく尻八館調査報告書では15 世紀後半～16 世紀のものとされている。

染付には碗・皿があり、器形・文様の推定されるものが各１点ある。一乗谷朝倉氏遺跡出土遺物を中心に染付碗・皿の分類をしている小野正敏氏によれば、碗は染付碗Ｅ群Ⅵ類、皿は染付皿Ｂ１群Ⅶ類に相当すると思われる。碗は16 世紀後半の、皿は15 世紀中葉～16 世紀の年代に

位置付けられている(小野：1982)。

石製品

石製品には硯・有孔石製品・石臼・石鉢などがあるが、いずれも形態的特徴などによって年代を明らかにすることはできない。硯・石臼・石鉢は大和町御所館・八谷館、仙台市今泉城跡など県内の城館跡から一般的に出土している。挽手孔部分に装飾がみられる上臼は御所館から出土している。

板　碑

板碑は断片を含めて８点出土しており、すべて粘板岩製である。仏種子のわかるものは４点あり「バク」(釈迦)、「バン」(金剛界大日)、「カ」(地蔵)、「サク」(観音) などが薬研彫りで刻まれている。いずれの種子もア点は明確である。「バク」が記されているものには「南無阿弥陀仏」の名号も残る。願文が記されているものは４点で、年紀名が残るものには「応永」と年紀名の頭の「永」が読みとれるものと「甲戌」の干支が残るものがある。応永年間は1394～1427年で「永」が頭に来る年記名には永仁（1293～1298)、永和（1375～1378)、永徳（1381～1383)、永享(1429～1440)、永正（1504～1520)、永禄（1558～1569）などがある。また「甲戌」は建武２年(1334)、応永元年（1394)、享徳３年（1454）などが相当する。記年名をもつものは少ないが、これらの板碑は14世紀～15世紀前半のものと考えられる。出土状態からこれらの板碑は館の構築改築に伴って部材として転用されたものと思われる。

鉄製品

鉄製品には刀子・鉄鏃・石突状鉄製品・小札・火打金・鉄鍋・釘・鉄環などと用途不明のものがある。これらも形態的特徴などから年代を明らかにすることはできないが、出土状況や伴出遺物から中世のものと考えられる。石突状鉄製品としたものに類似するものが仙台市今泉城跡（佐藤：1983）から出土し、鉄鏃とされている。火打金は形態的に若干異なるが青森県尻八館などから出土している。

青銅製品

青銅製品には香炉・毛抜・目貫・古銭がある。毛抜と古銭のうち寛永通宝・仙台通宝は出土状況から館の時期より新しい可能性がある。その他は館に伴うと思われる。古銭のなかで最も枚数の多いのが明銭の洪武通宝で、永楽通宝がそれに次ぐ。対明貿易が始まるのが、15 世紀前半であることから、これらはそれ以降に輸入され、流通したものと思われる。

2）遺構の検討

発見された中世以降と考えられる遺構には整地層・門跡・布掘り状遺構・通路状遺構・段状遺構・竪穴状遺構・土壙・溝・ピット群などがある。また整地層中からは畝状遺構も検出されている。これらの遺構の特徴や性格、年代について検討する。

整地層

平場Ⅰ、平場Ⅱ、東側小平場、西側通路に整地層が検出されている。平場Ⅰと西側通路の整地層は大規模なもので、平場Ⅰ整地層はⅠ～Ⅲ層に、西側通路整地層はⅠ・Ⅱ層に大別することができた。

西側通路整地層のうち、整地Ⅰ層はその上面に第１門跡に伴う布掘り状遺構がのびていたと推定されることから、第１門跡構築時に積土された整地と考えられる。整地Ⅱ層は整地Ⅰ層下で検出された第２門跡の南側に認められ、その上面が第２門跡期の通路であると思われる。この西側通路整地層の年代は整地Ⅰ層は層中から16世紀のものと考えられる灰釉碗や染付碗などが出土しており、16世紀でも新しい時期の可能性がある。整地Ⅱ層は不明である。

平場Ⅰ整地層は整地Ⅲ層が第10段状遺構の上に積土されて第９段状遺構の床面となっていることや、整地Ⅱ層上面が第４、第５段状遺構の床面となっていることなどから、平場Ⅰの部分的な改築に伴って積土されたもので、整地Ⅰ層はその最終的な改築に伴うものである。この整地Ⅰ層下から畑の畝状の遺構が検出されたことから整地Ⅰ層が積土される直前にはこの調査区部分が畑として使用されていた事が知られる。また、畑の面となった第４・第５段状遺構堆積土や整地Ⅱ層中から多量の炭化した植物種子が検出され、それらは米・大麦・小麦・大豆・小豆・ソバなどの食用穀物と比定されたことから、畑になる前の段階に食用穀物の入った倉庫などが火災にあっている可能性がある。この整地層の年代は整地Ⅱ層から、15世紀～16世紀と考えられる青磁碗や16世紀初頭の灰釉小皿が出土しており、整地Ⅰ層中からは16世紀の染付碗などが出土していることから、整地Ⅰ・Ⅱ層は16世紀の整地と考えられる。整地Ⅲ層は不明である。

門　跡

平場Ⅰ西辺で検出された第１門跡と西側通路部分で検出された第２門跡の２つがある。両者は近接しており、その検出位置から城外からのびる西側通路と平場Ⅰを区画する門と考えられる。第２門跡は第１門跡に続く布掘り状遺構がその上面にのびていたと推定される西側通路整地Ⅰ層下で検出されており、第１門跡よりも古いものである。どちらも柱穴を４個もつ。
門の形態としては、本柱２本を建て、その背面に控柱２本をおいて桁と梁でつなぎその上に、切妻屋根をかけるいわゆる薬医門のようなものと思われる。また第１門跡の時期には西側通路は第１門跡からのびる布掘り状遺構によって遮断され、第１門跡を経て平場Ⅰに入るように変更されている。この第１門跡と西側通路との間には約２ｍの標高差があるため、この部分に階段状の遺構が設置されていた可能性がある。

布掘り状遺構

第１門跡の梁間から南北方向にのびる布掘り状遺構と北辺布掘り状遺構に南接して並ぶ小ピット群は門に取り付いて平場Ⅰの西辺および北辺にめぐっていた塀の基礎事業と思われる。こ

の布掘り状遺構は大部分の検出面が平場Ⅰの整地層Ⅰ層上面であることから、この館の最終時期のものと考えられる。

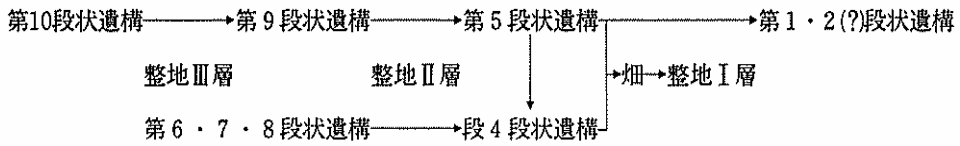
第２門跡の東側に約３㎜の長さで検出された布掘り状遺構も第２門跡に伴う塀の基礎と思われ、15～16 世紀と考えられる自磁碗の破片が出土している。平場Ⅰ北西隅の畑の面で部分的に検出された布掘り状遺構も塀の基礎と考えられるが、第１門跡に伴うものか第２門跡に伴うものかは明らかではない。

段状遺構

10 基検出されたが、斜面に対して横に細長く地山面を削り出して平坦面を形成したもので、長さ５㎜ 前後のもの（第２・第６段状遺構)、長さ 10㎜ 前後のもの(第１・３・４・５・７・10 段状遺構)、長さ 14㎜ 位のもの（第８・９段状遺構）がある。幅は明確ではないが３～５㎜ の間と思われる。床面からピット、焼け面や焼土・木炭のブロック（第１・２・５・８・９・10 段状遺構)、壁ぎわに沿う溝（第８・９・10 段状遺構）などが検出されている。ピットに柱痕跡が認められ、それが組み合うもの（第１・３・５・７・８・９・10 段状遺構）もある。

その配置をみると壁に沿う形で１列に並ぶものが多いが、第３段状遺構では梁間１間（1.5㎜）×桁行２間（3.9㎜）の、第５段状遺構では梁間１間（3.9㎜）×桁行３間（6.6㎜）の組み合わせが考えられた。

この段状遺構としたものに類似する例は県内では今の所、白石市羽山館跡で本遺跡のものより小規模なものが５基検出されているだけである(白石市教育委員会：1983)。その性格などについては不明な点が多いが、山城における平場構築に際して全体的な平坦面の形成を省いて、斜面に部分的な平坦面を形成して建物基礎とした可能性が高いと思われる。しかし、今回多く検出された１列の柱穴列で、どのような構造の建物が建つかなど不明である。また、この段状遺構は重複関係や検出面の違いによって、次のような関係が成り立つ。



最も古い段階の第 10 段状遺構Ｐ８から洪武通宝が出土しており、その年代は 15 世紀以降と考えられる。第９段状遺構のＰ７から 14 世紀後半～15 世紀の白磁小皿、Ｐ８から咸平元宝、政和通宝、床から元祐通宝が出土している。第５段状遺構の床面から 15 世紀中頃の灰釉袴腰香炉が、第４段状遺構のＰ19 から開元通宝、Ｐ24 から洪武通宝が出土している。第３段状遺構堆積土から 15 世紀～16 世紀の自磁碗破片２点が出土している。

竪穴状遺構

平場Ⅱで２基検出された。段状遺構より規模が小さく、壁が全周もしくは比較的良く残って

いるものを竪穴状遺構とした。遺物の出土はなく、その年代や性格は不明である。

土　壙

平場Ⅰで２基、平場Ⅰで３基、合計５基検出された。平面形には長楕円形、丸味を帯びた長方形、不整形のものがある。第４土壙の底面からは元祐通宝１枚、洪武通宝３枚、永楽通宝２枚、計６枚が出土しており15～16世紀の墓壙と思われる。第２土壙からは16世紀の染付碗破片が出土している。

平場Ⅰ北斜面ピット群

平場Ⅰ北斜面に長さ40～140㎝位で上方から掘り込まれた横長のピットが12個横方向に一線状に並んで検出された。平場Ⅰ北斜面下には平場Ⅱ溝が存在するが、このピットは平場Ⅱの面から０.５～１.３ｍ高い所に位置しており、あるいは平場Ⅱ溝掘削以前に平場Ⅱに付随して機能していたピット群の可能性がある。

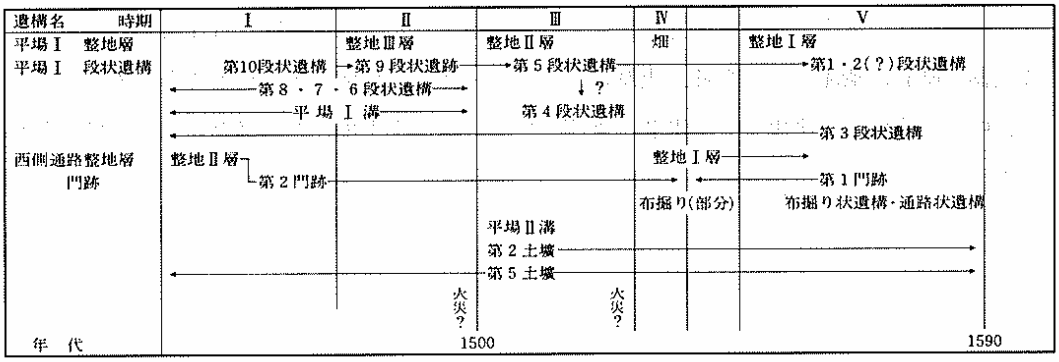
平場Ⅱ溝

平場Ⅰ北斜面下の平場Ⅱ南辺から平場Ⅱ西辺下を「⌐」状に巡る溝で、総長は91ｍ、さらに両端は調査区外にのびている。この溝は平場Ⅱを画すると同時に底面の傾斜から、平場Ⅰなどから流れる水を流下させる機能をもっていると思われる。

この溝の堆積土は自然流入堆積土で、層中からは多くの遺物が出土している。最下層からは15世紀中葉～16世紀の染付皿、16世紀の自磁皿が、その上部から16世紀に位置付けられる染付碗青磁香炉、自磁皿や洪武通宝、石臼４点、石鉢、硯などが出土している。これらの遺物からこの溝の溝築年代は16世紀初頭で、最上層から洪武通宝と寛永通宝が出土していることから17世紀には埋まり切っていたと思われる。

3）遺構の変遷

検出された各遺構には出土遺物から、その年代が明らかになったものと所属時期の明確でないものとがある。また、平場Ⅰの段状遺構や門跡のように検出面の違いや重複関係などによって遺構の変遷が考えられるものもある。年代が明らかなものと変遷が認められる遺構についてまとめてみると次のようになる。



Ⅰ～Ⅴ期の変遷が考えられたが、この変遷は平場Ⅰの北西部に集中して検出された段状遺構の改築とそれに伴う整地層を軸としたもので、部分的なものである可能性や短期間での変遷の可能性がある。そして各遺構から出土した無釉陶器、施釉陶器、中国産の青磁・白磁・染付や古銭などの年代が15～16世紀と考えられたこと、Ⅰ期の第10段状遺構のＰ８から出土した洪武通宝により、この遺構の上限が15世紀初頭と考えられたことなどから、この館の存続期間は15～16世紀と考えることができ、所属時期の明らかでない遺構もこの期間のなかに包括されるものと思われる。同じく出土遺物からⅢ期以降が16世紀代に相当すると考えられる。

以上のことからこの館の構築時期は前述した存続期間をさらに、さかのぼる可能性があり、調査区内の平場Ⅰ、平場Ⅱ、小平場、西側通路の基本的な構造は構築時以降大きな変換はないものと思われる。そして15～16世紀の使用期間中に平場Ⅰの北西部を中心に改築やそれに伴う整地など、小規模な改造が頻繁に行なわれ、Ⅳ期には畑として使用されている、また、Ⅳ期以前に火災にあっている可能性も考えられる。終末期には第２門跡から第１門跡への門の位置の変更や平場Ⅰの周囲に塀を周らすなど館としての機能の増強が計られている。

この館の存続期間の下限は16世紀後半で、豊臣秀吉による天正18年の奥羽仕置によって葛西、大崎氏が滅亡した時期に廃棄された可能性がある。

Ⅴ．まとめ

今回の調査の成果をまとめると次のようになる。

１．柳津館山跡は北上山地から北西方向にのび、北上川左岸に臨む丘陵上に立地している。丘陵の狭隘部を空掘で画して館としており、その範囲は南北600㎜、東西450㎜である。丘陵屋根を占地する５ヶ所の中心的な平場とそれを取り巻く腰郭、段状遺構、通路などからなる複郭式の山城で、最も高い所は標高約110㎜で、四周に眺望がひらけている。

２．調査の対象となったのは館山館の北西端で、今回の調査によって平安時代と中世の遺構と遺物が発見され、複合遺跡であることが知られた。

３．平安時代の遺構としては竪穴住居跡２軒が検出された。出土遺物には土師器、須恵器、赤焼土器、砥石、鋤先などがある。土師器には羽釜・鉢など類例の少ないものも含まれていた。

４．中世の遺構は、平場Ⅰ・平場Ⅱ・東側小平場・西側小平場・西側通路によって構成される調査区内の平場Ⅰ・平場Ⅱ・西側通路を中心に発見された。検出された遺構には門跡２棟、段状遺構10基、竪穴状遺構２基、土壙５基、溝２本、整地層、布掘り状遺構、通路状遺構、ピット群などがある。出土遺物には国内産の陶器と中国産の磁器、石製品、板碑、鉄製品、古銭などがある。

５．出土遺物の検討から館跡は15～16世紀に使用されたもので、構築時期はそれを遡る可能性がある。

６．段状遺構の改築やそれに伴う整地などから平場Ⅰの北西部を中心にⅠ～Ⅴ期の変遷が考えられた。これは15～16世紀の館の使用期間に小規模な改造が頻繁に行なわれていたことを示しており、Ⅳ期には平場Ⅰ北端部は畑として使用されている。また炭化した食用穀物種子が多量に発見されたことから火災にあった可能性も考えられる。

７．館の使用期間の終末期には門の位置の変更や平場Ⅰの周囲に塀を巡らすなど館としての機能の増強が計られている。この館が廃棄されたのは16世紀後半であることから、天正18年の奥州仕置によって葛西・大崎氏が滅亡した時期の可能性がある。

８．この館の館主は文献資料によれば黒木紀伊守で、のち葛西氏の家臣千葉太郎左衛門が居館したとされている。しかし、柳津館山跡の成立から廃絶までの間にどのような歴史的背景があったのかや15～16世紀の使用期間のどの段階でどのような要因で館主の交替があったのかなど不明な点は多い。

引用・参　考　文　献

青沼・長島（1983．３）：「中田畑中遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第53集　仙台市教育委員会

赤羽一郎（1771．１）：「常滑・渥美」『日本陶磁全集』第８巻　中央公論社

朝倉氏遺跡調査研究所：「一乗谷朝倉氏遺跡Ⅷ」福井県教育委員会

阿部正光（1983．３）：「大境山遺跡」『瀬峰町文化財調査報告書』第４集　瀬峰町教育委員会

石垣　宏（1982．４）：「寺池（登米）要害―仙台城と仙台城と仙台領の城・要害」『日本城郭史研究叢書』第２巻

氏家和典（1957：３）：「東北土師器の形式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会

小野正敏（1982．８）：「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』№２　日本貿易陶磁研究会

小野正敏（1981．８）：「山梨県東八代郡一宮町新巻本村出土の陶磁器」『貿易陶磁器研究』№１　日本貿易陶磁研究会

小野寺祥一郎（1979．８）：「五輪C遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第61集　宮城県教育委員会

加藤・佐藤（1980．３）：「藤屋敷遺跡―東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ」『宮城県文化財調査報告書』第63集　宮城県教育委員会

加藤　孝（1954．７）：「塩釜市表杉ノ入貝塚の研究」『宮城学院女子大学研究論文集』Ⅴ宮城学院女子大学

河北町　（1975．10）：「河北町史・上」

亀井明徳（1981．８）：「熊本県城南町出土の青磁資料」『貿易陶磁研究』№１　日本貿易陶磁研究会

小井川和夫（1981．３）：「上新田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第78集　宮城県教育委員会

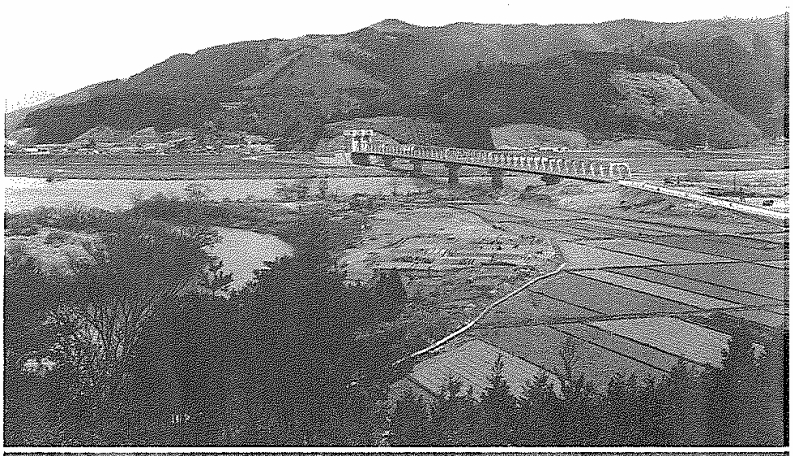
小井川・手塚（1978．３）：「糠塚遺跡―宮城県文化財発掘調査略報（昭和52年度分）」『宮城県文化財調査報告書』第53集　宮城県教育委員会

埼玉県教育委員会（1981. 3）:『埼玉県板石塔婆調査報告書』
斉藤吉弘（1983. 3）:「八谷館跡；御所館跡；駒場館跡ー東北自動車道遺跡調査報告書Ⅷ」
『宮城県文化財調査報告書』第93集　宮城県教育委員会
佐藤　洋（1983. 3）「今泉城跡」『仙台市文化財調査報告書』第58集　仙台市教育委員会
渋谷正三（1982. 10）:「館山館跡」『松島有料道路関連遺跡調査報告書』Ⅰ　宮城県教育委員会
庄子・山田（1980. 3）:「宮城県に分布する灰白色火山灰について」
『多賀城跡ー昭和54年度発掘調査概報』宮城県多賀城研究所
白鳥良一（1980. 3）:「多賀城出土土器の変遷」『研究紀要』Ⅶ. 宮城県多賀城研究所
尻八館調査研究所（1981. 3）:『尻八館調査報告書』
白石市教育委員会（1983. 12）:「羽山館跡（第１次調査）」現地説明会資料
新庄屋元晴（1982. 3）:「小梁川遺跡ー宮城県文化財発掘調査略報（昭和56年度分）」
『宮城県文化財調査報告書第90集　宮城県教育委員会
瀬戸市史編纂委員会（1981. 3）:『瀬戸市史・陶磁史篇二』
平・志間・白鳥・太田（1974. 7）:「豊里町長根浦貝塚発掘調査報告書」『豊里町史・下』
千葉宗久（1981. 3）:「平形遺跡（館山館跡B地区）ー東北地建バイパス関係遺跡調査報告書」
『宮城県文化財調査報告書』第76集　宮城県教育委員会
東京国立博物館（1979. 6）:『日本出土の中国陶磁』　東京美術
土岐山武（1980. 9）:「安久東遺跡ー東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ」
『宮城県文化財調査報告書』第72集　宮城県教育委員会
楢崎彰一（1976）:「瀬戸・美濃」『日本陶磁全集』第９巻　中央公論社
楢崎彰一（1982. 4）:「16世紀の美濃陶」『島根県立博物館調査報告』第３冊　島根県立博物館
楢崎・斎藤（1983. 3）:「猿投窯編年の再検討について」『研究紀要』２　愛知県陶磁資料館
丹羽・小野寺・阿部（1981. 3）:「清水遺跡ー東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ」
『宮城県文化財調査報告書』第77集　宮城県教育委員会
早坂・阿部（1980. 3）:「西手取・手取遺跡ー東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ」
『宮城県文化財調査報告書』第63集　宮城県教育委員会
宮城県教育委員会（1981. 2）:「宮城県遺跡地名表」『宮城県文化財調査報告書』第73集
〃　〃　（1991. 2）:「宮城県遺跡地図」『宮城県文化財調査報告書』第74集
森　貢喜（1983. 3）:「佐内屋敷遺跡ー東北自動車道遺跡調査報告書Ⅶ」『宮城県文化財調査報告書』
第93集　宮城県教育委員会
遊佐五郎（1980. 3）:「沼崎山遺跡」『豊里町文化財調査報告書』第２集　豊里町教育委員会

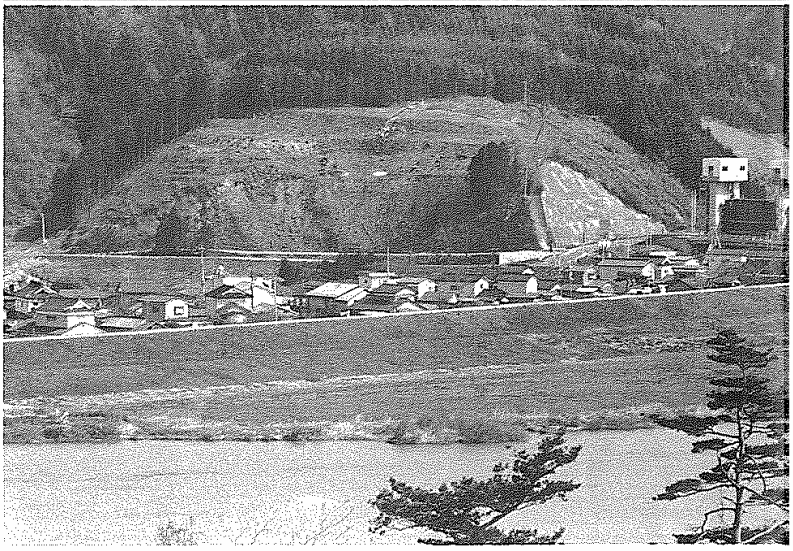
写　真　図　版

図版 1

遺跡遠景
（西より）

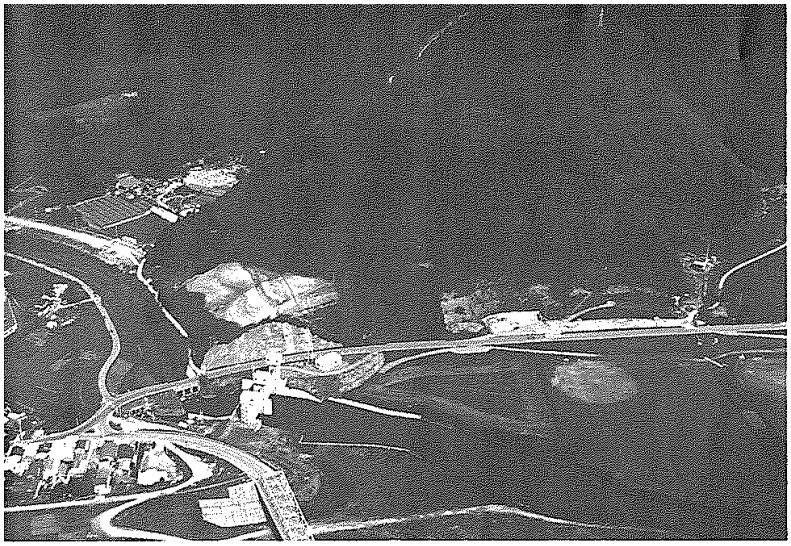


調査区全景
（北西より）

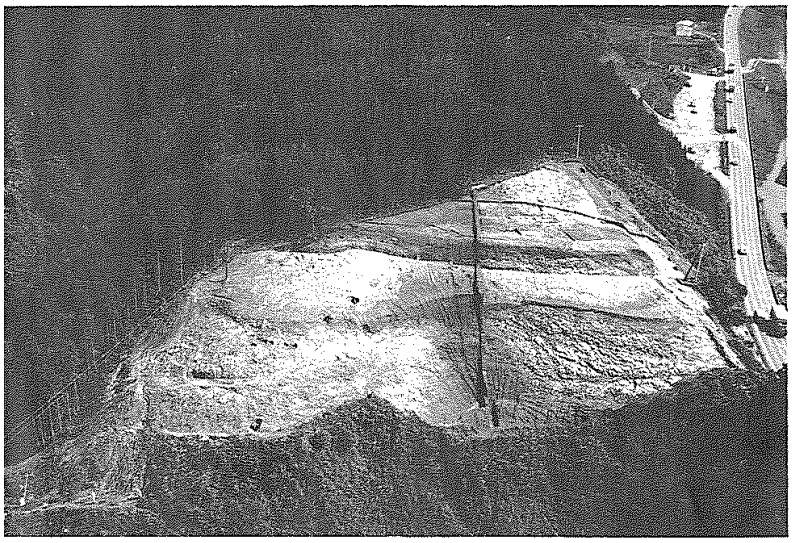


調査区全景
（北より）

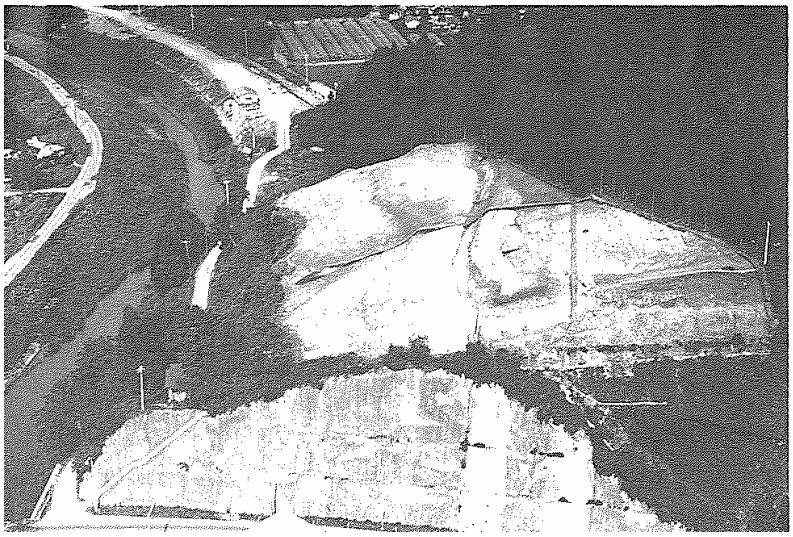
図 版 2



遺 跡 全 景
(西より航空写真)



調 査 区 全 景
(北より航空写真)



調 査 区 全 景
(西より航空写真)

図 版 3

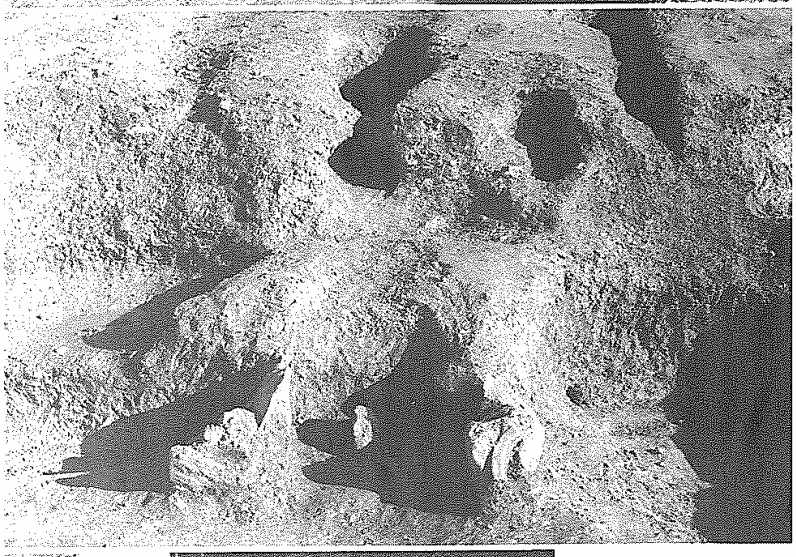
第１号住居跡

第１号住居跡
カ マ ド

第１号住居跡
鋤先出土状況

図 版 4

第２号住居跡

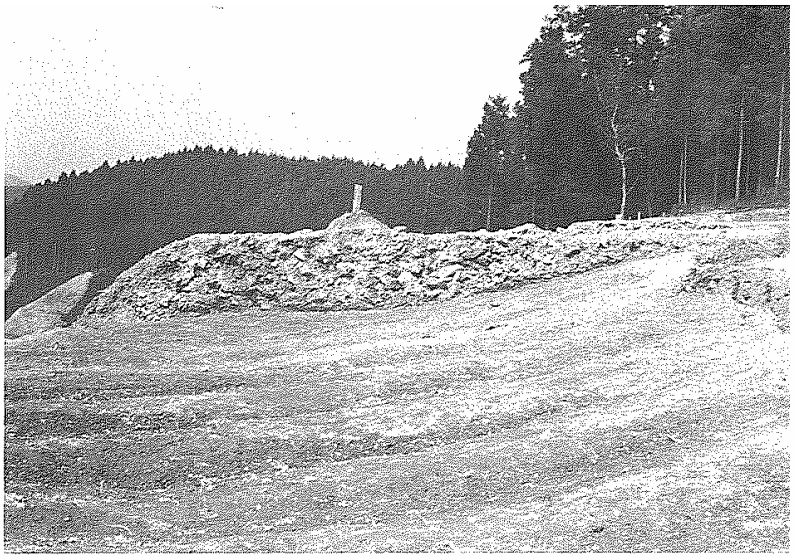


第２号住居跡
カ マ ド

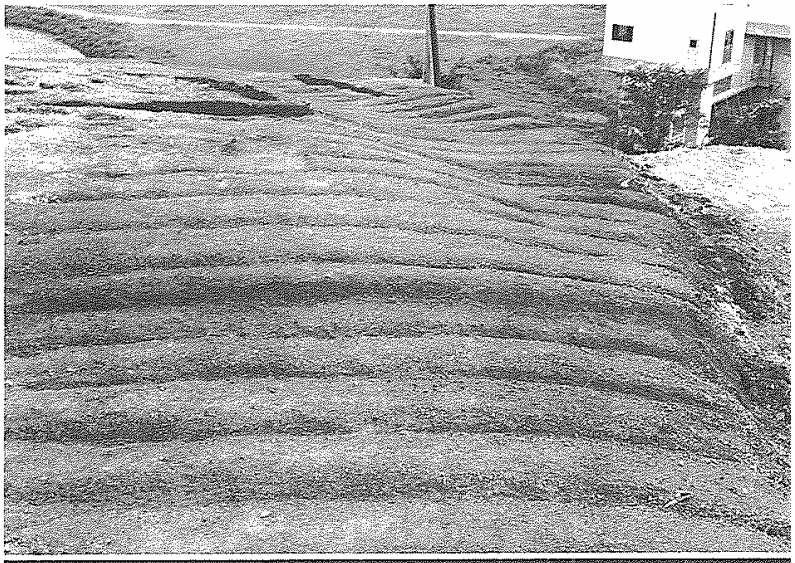
布掘り状遺構

図 版 5

整地Ⅰ層と畑跡



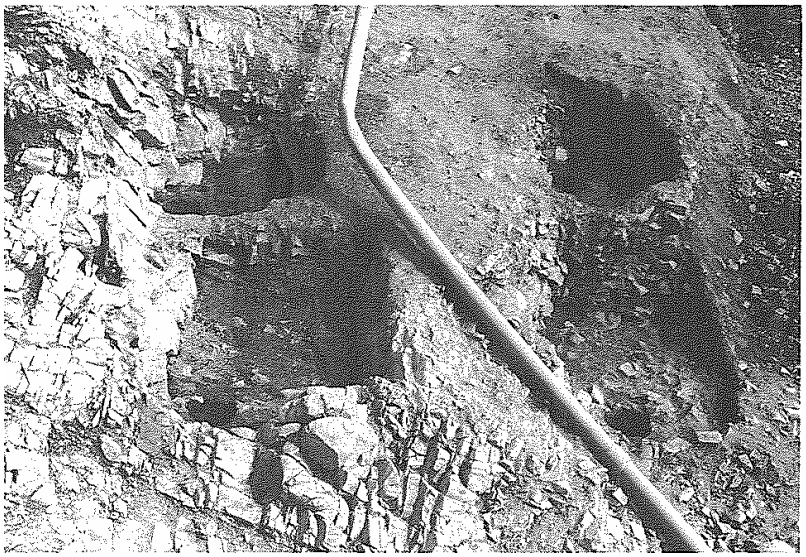
平場Ⅰ畝状遺構



南北ベルトセクション

図 版 6

第 1 門 跡
(西 よ り)

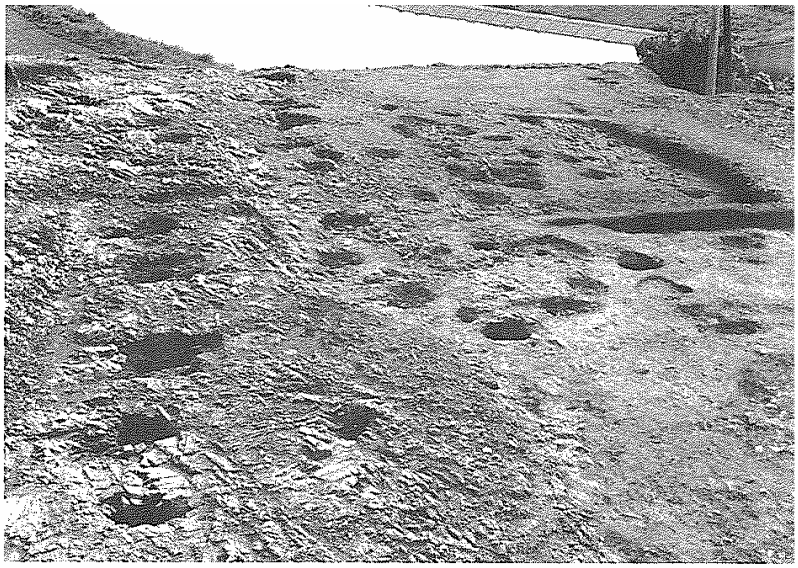


第 2 門 跡

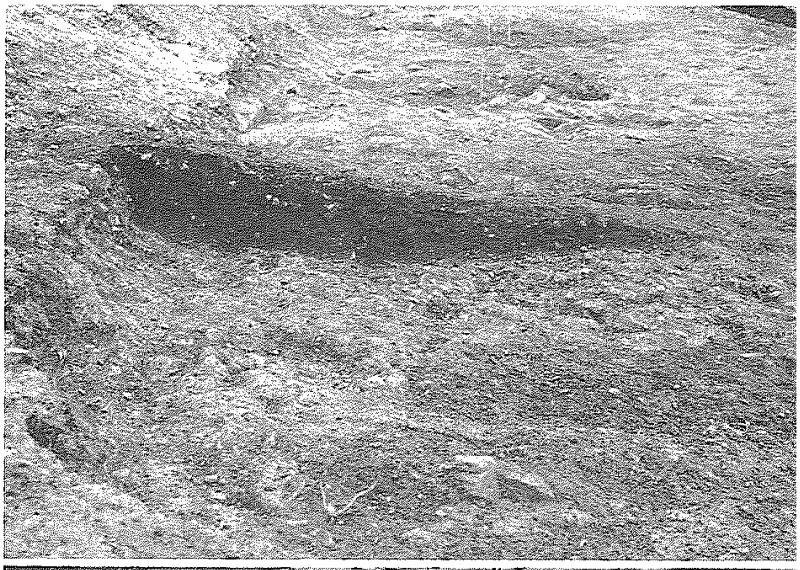
西 側 通 路

図 版 7

第１・第４段状遺構

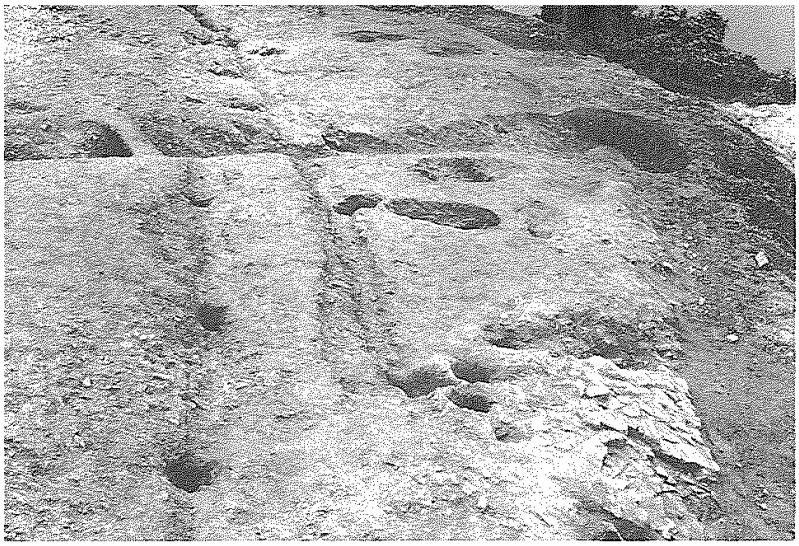


第１段状遺構堆積土



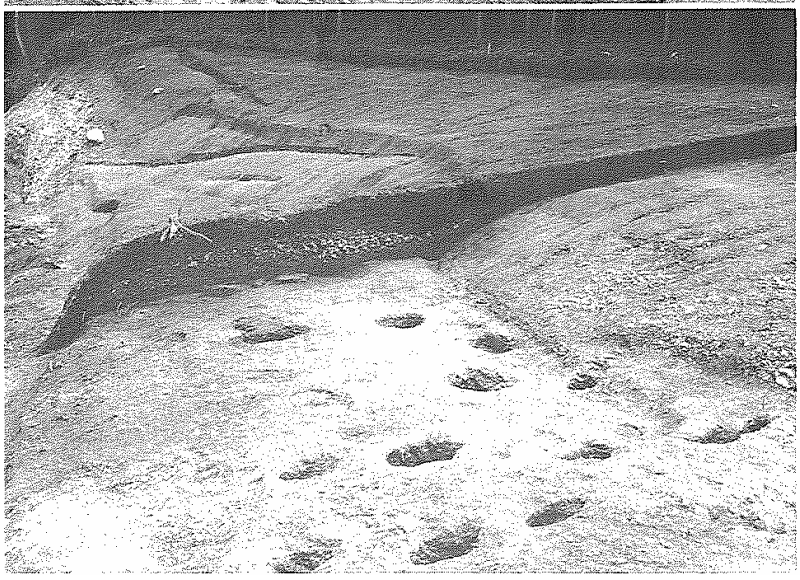
第３段状遺構

図 版 8



第7・8段状遺構

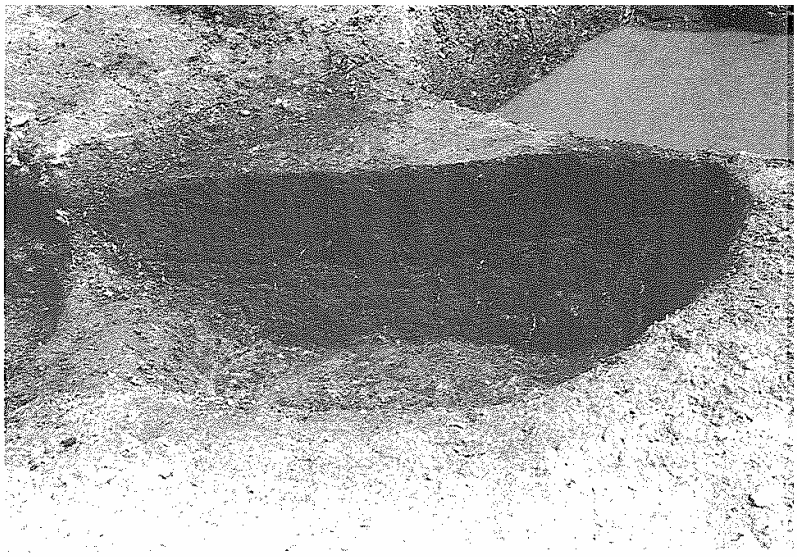
第9段状遺構



第9・10段状遺構

図 版 9

土 壙 3



平場Ⅰ北斜面ピット群

平場Ⅰ北斜面ピット

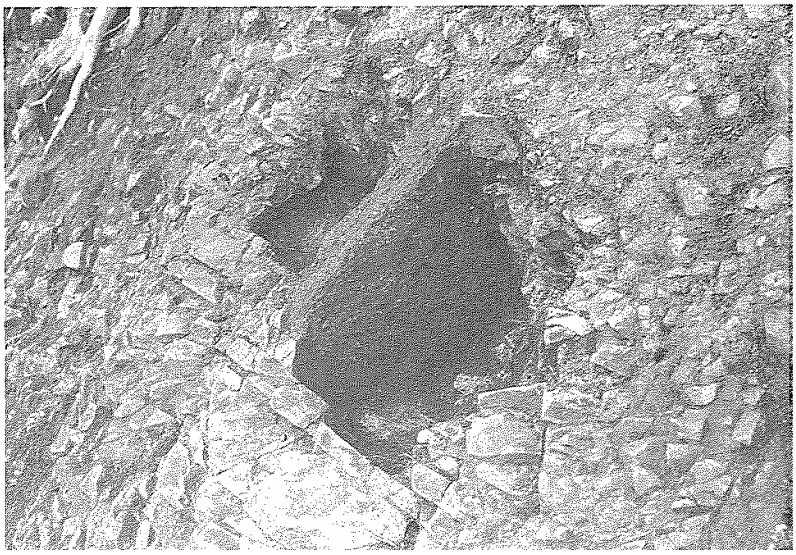
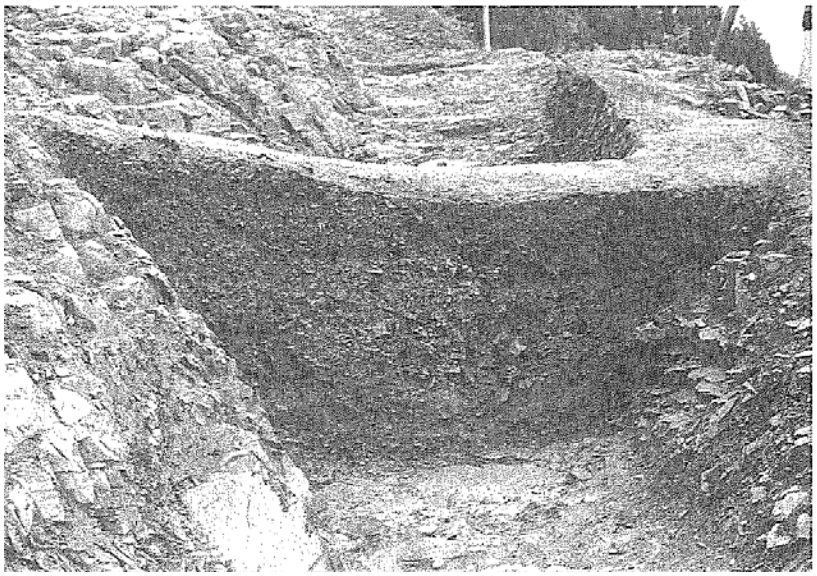


図 版 10

平 場 II 溝

平場II溝堆積土



平場II溝堆積土

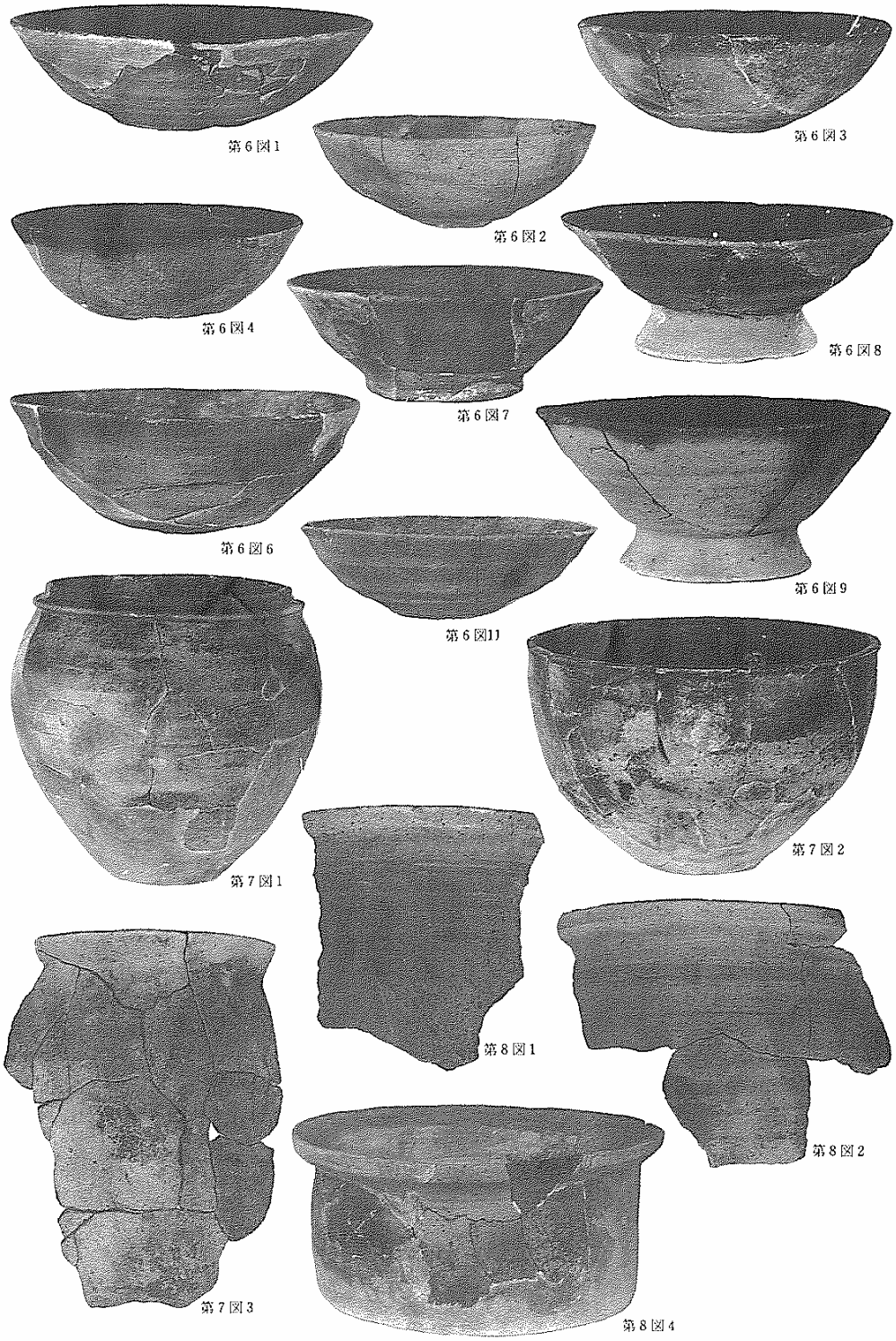

第6図1
第6図2
第6図3
第6図4
第6図7
第6図8
第6図6
第6図9
第6図11
第7図1
第7図2
第8図1
第8図2
第7図3
第8図4

図 版 11 出土遺物(1)

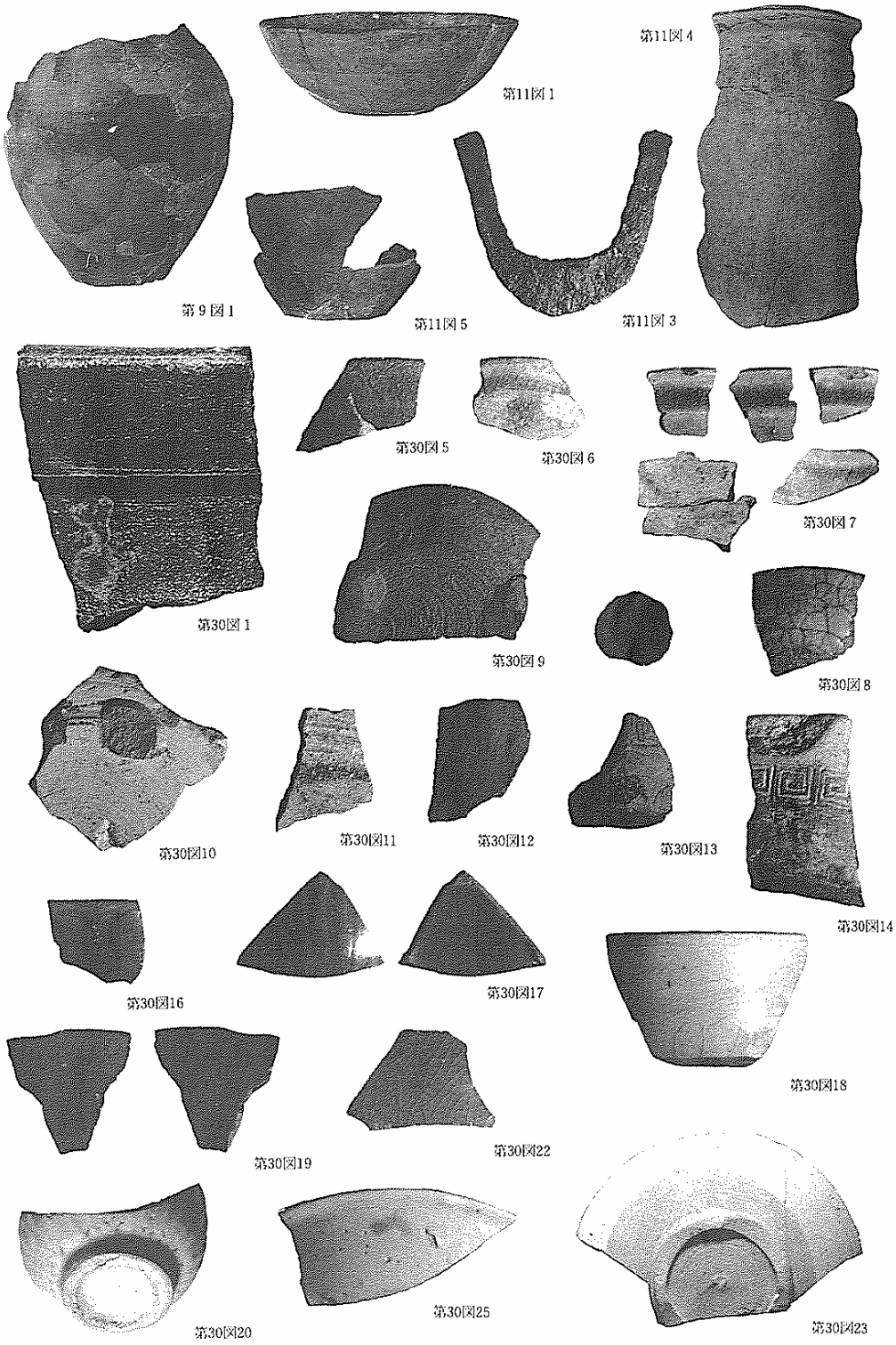
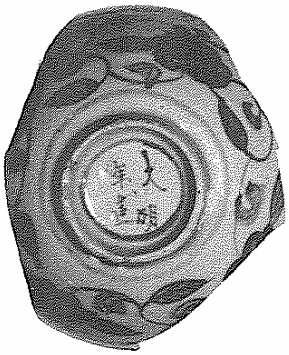
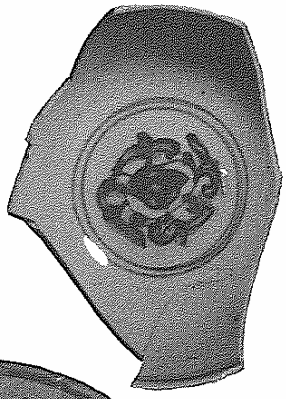
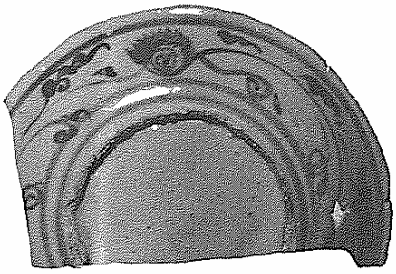

第11図4
第11図1
第9図1
第11図5
第11図3
第30図5
第30図6
第30図7
第30図1
第30図9
第30図8
第30図10
第30図11
第30図12
第30図13
第30図14
第30図16
第30図17
第30図18
第30図19
第30図22
第30図20
第30図25
第30図23

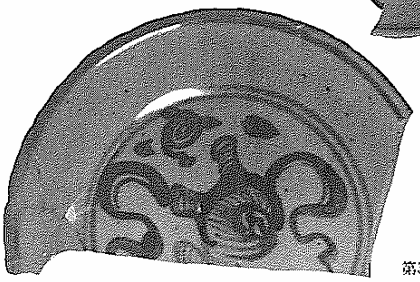
図 版 12 出土遺物(2)



第31図 1







第31図 5

第31図 2

第31図 4

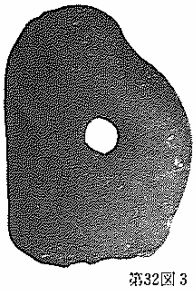
第31図 3

第31図 6

第32図 1

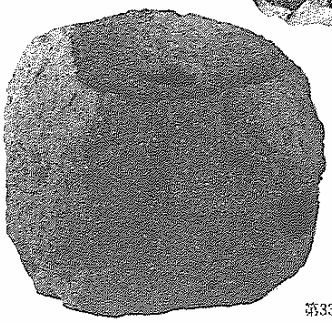
第32図 2

第32図 4

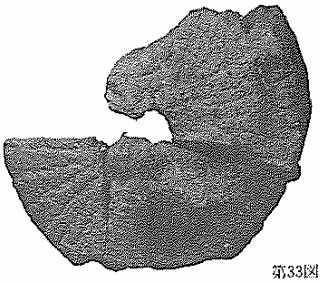


第32図 3

第33図 1



第33図 2



第33図 3

図 版 13 出土遺物(3)

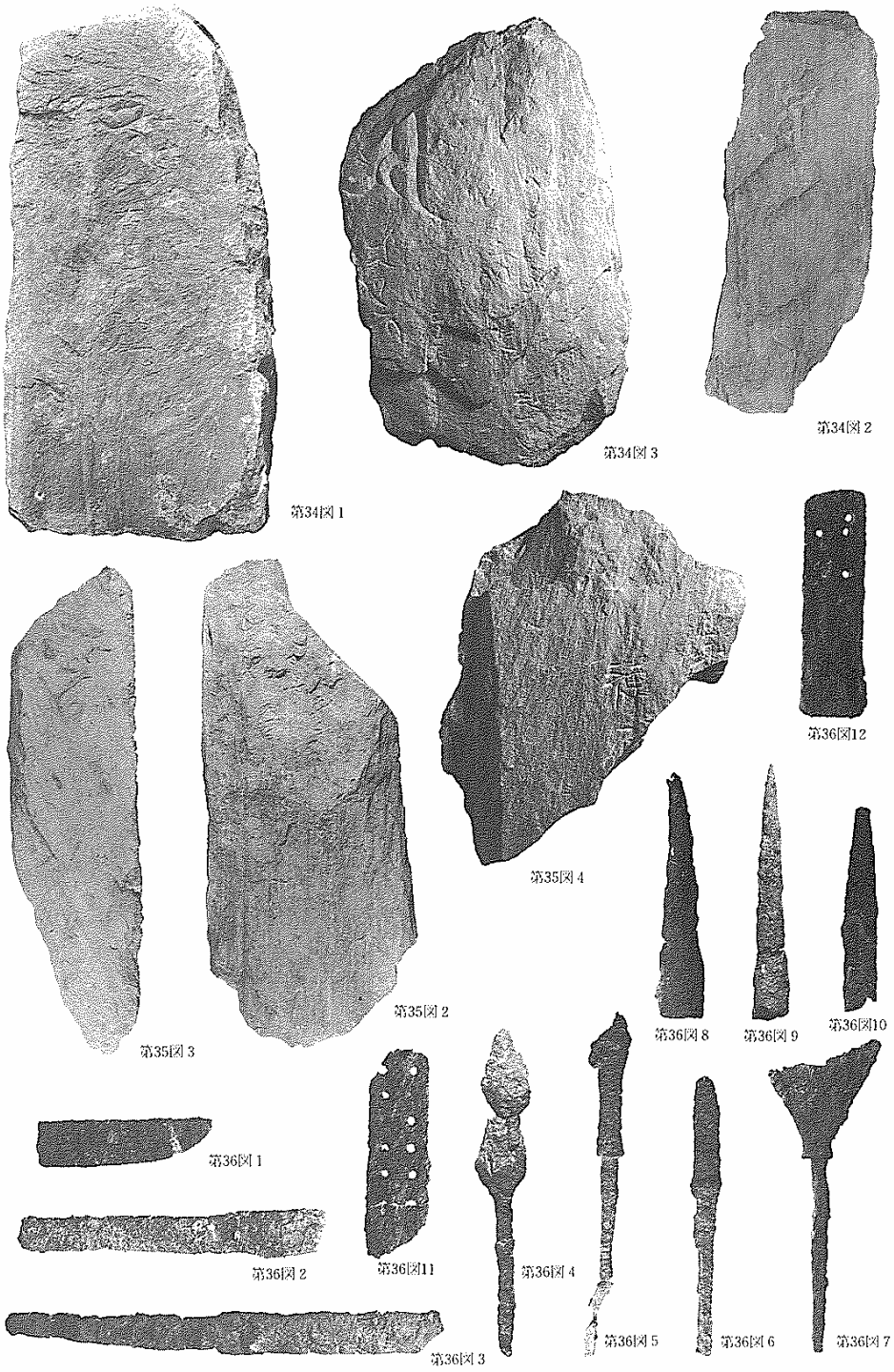

第34図 1
第34図 3
第34図 2
第35図 4
第36図12
第35図 3
第35図 2
第36図 8
第36図 9
第36図10
第36図 1
第36図 2
第36図11
第36図 4
第36図 5
第36図 6
第36図 7
第36図 3

図 版 14 出土遺物(4)

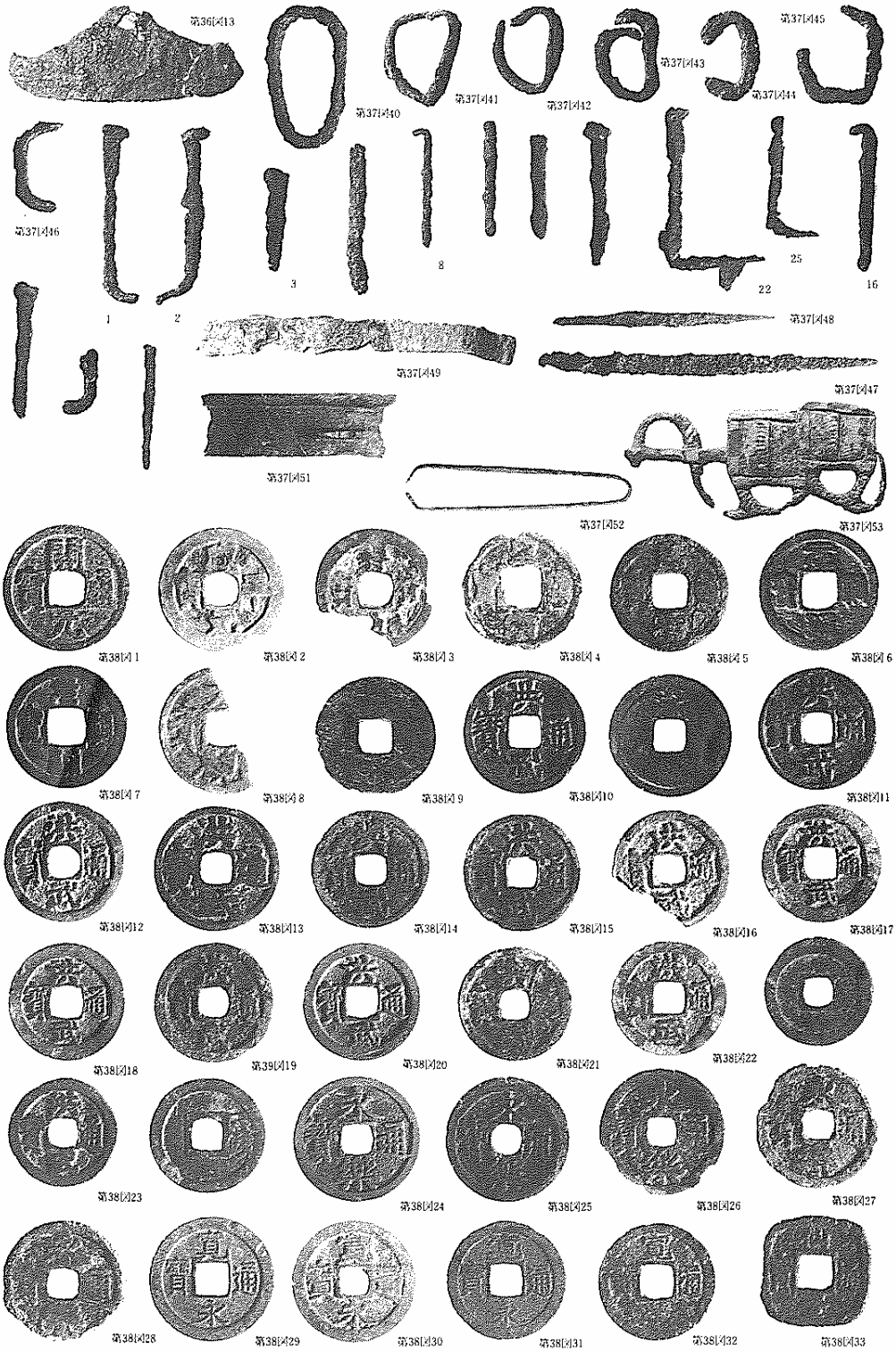

第36図13
第37図45
第37図43
第37図44
第37図40
第37図41
第37図42
第37図46
1
2
3
8
22
25
16
第37図48
第37図49
第37図47
第37図51
第37図52
第37図53
第38図1
第38図2
第38図3
第38図4
第38図5
第38図6
第38図7
第38図8
第38図9
第38図10
第38図11
第38図12
第38図13
第38図14
第38図15
第38図16
第38図17
第38図18
第39図19
第38図20
第38図21
第38図22
第38図23
第38図24
第38図25
第38図26
第38図27
第38図28
第38図29
第38図30
第38図31
第38図32
第38図33

図 版 15 出土遺物(5)